みは深さはあるが径は他のものに比べて小さい。礫は赤変しておらず、炭化物も含まれない。加火された痕跡はない。掘り込みの形態やこの付近にはSB１・SB２があったことなどを考慮すると、掘立柱建物跡の柱穴の１つをなす可能性がある。

Ｃ類

礫が周辺部よりも密に集まっており、明瞭な掘り込みをもち、下部に底石（配石）をもつもの。炭化物が多く含まれること・埋土が黒くなっていること・ほとんどの礫が赤変していることなどでＣ類の集石遺構はこの場での加火の可能性が高いと考えられる。

Ｃ１類：SI25～41

Ｃ類のうち、１基だけで検出し、他と（掘り込みに）切り合い関係がないもの

【SI26】　Ａ１区の南東側の境界近く、ＳＡ５（古墳）の床面下で検出された。上部に礫がかなり密に集まっており、上部礫の約半数が赤変しているのが観察できた。最下部には径約15～35ｃｍの10数個の大・巨礫の底石が見られた。底石は全て赤変しており、底石の下は炭化物が多量に混じった黒色土（砂質）が広がっていた。底石の石材としては尾鈴山酸性岩や砂岩を使用していた。また、断面を見ると掘り込み底面から底石が浮いていることが確認できる。

【SI30】　Ａ２区北側の散礫２の下から検出された。散礫２の礫を除き、狭く密集した集石の上部礫を除くと第36図のような状況で、掘り込みの中に礫が詰まっているのが確認できた。この礫から底石まで３層をなすように礫が入っていた。埋土は小礫（径２cmまで）を多量に含んだ黒色土であり、炭化物を含む。

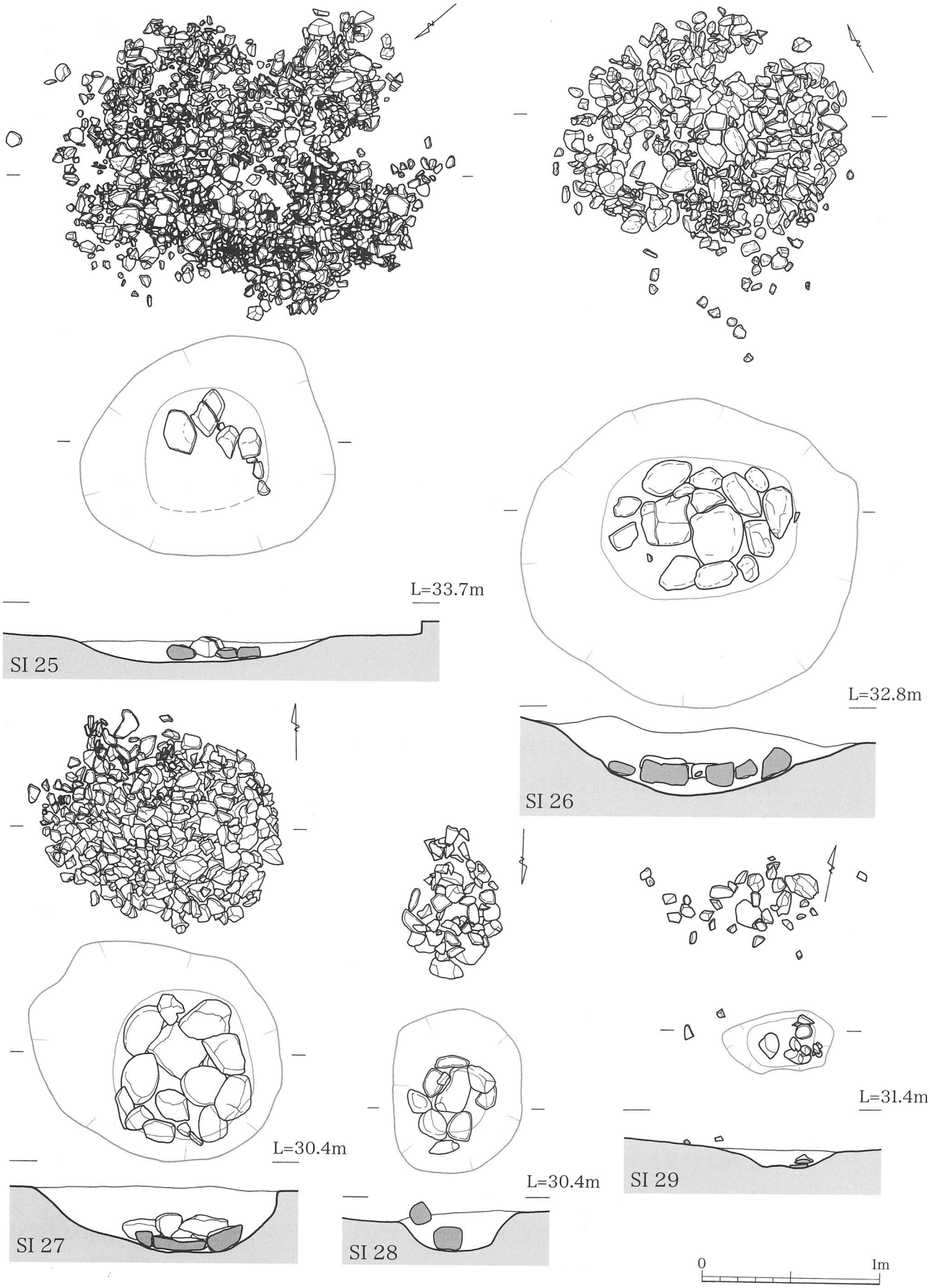
【SI33】　Ａ１区中央部付近から検出した。この付近に集石遺構が集まっている。上部の礫はかなり失われており、検出時には底石が見えていた。底石は大きいもので約30cmで、底石の石材は尾鈴山酸性岩が主であり、円礫である。礫は全て赤変していた。底石と掘り込み底面の間に距離はなく、接している状態である。

Ｃ２類：SI42～51

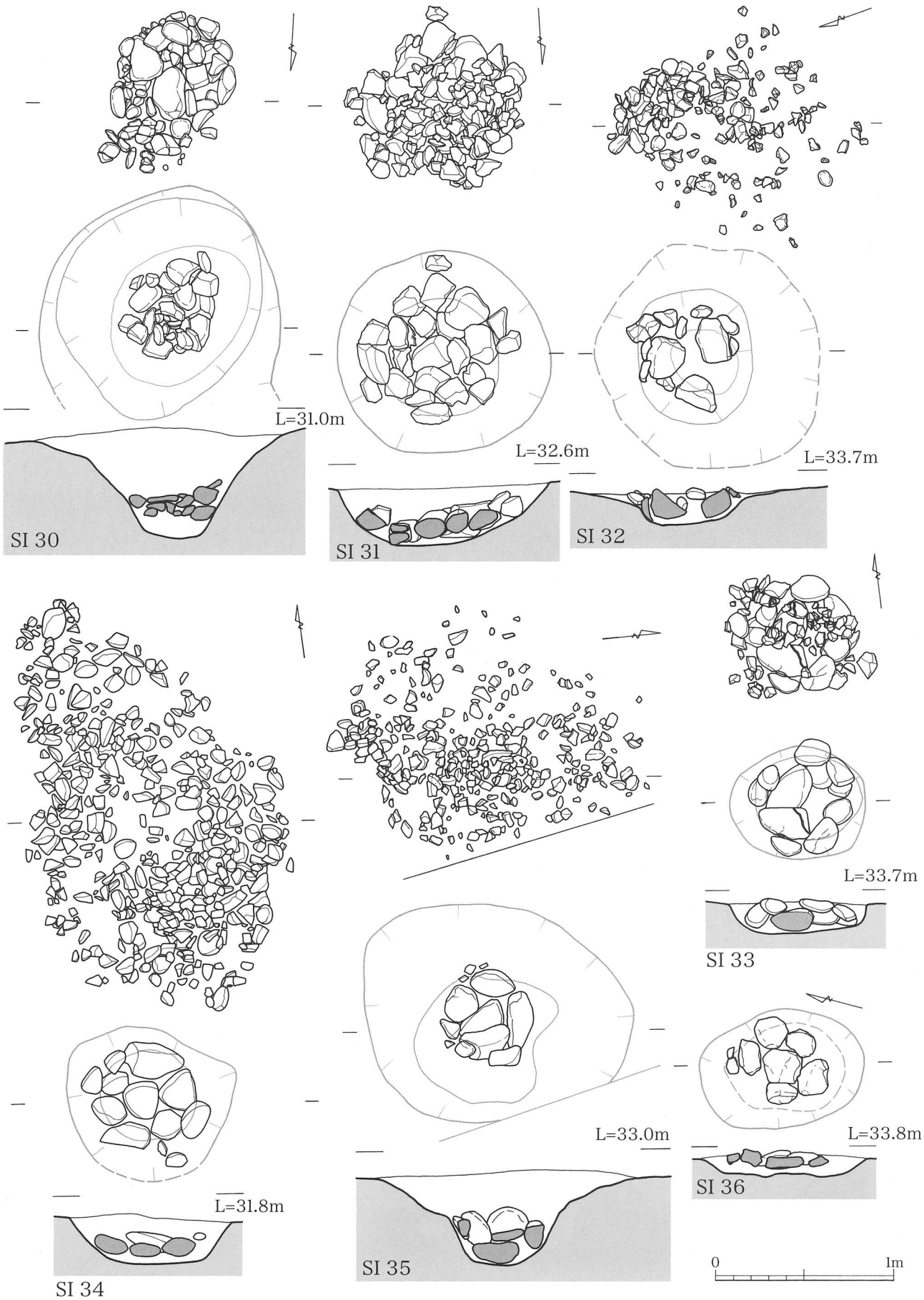
２基のＣ１類のタイプの集石遺構の掘り込みが切り合った（または非常に近接した）状態で存在したもの。２基は集石のサイズ（礫の広がっている範囲）としては同じ程度であるが、掘り込みの深さに明瞭な違いがあるものとそうではないものがある。２基の掘り込みの深さの違いと掘り込まれた時期の関係ははっきりしない。

【SI42とSI43】　Ａ２区東側の散礫４の下から検出された。上部礫は砂岩の円礫が割れたもので構成され、約４割が赤変していた。底石はSI42・SI43ともに径約20cm～40cmの大礫・巨礫を使用し、石材は尾鈴山酸性岩・砂岩を使用していた。SI42の底石がより赤変していた。埋土は黒色であり、炭化物を含んでいた。掘り込みもSI42がより深いことが観察できた。

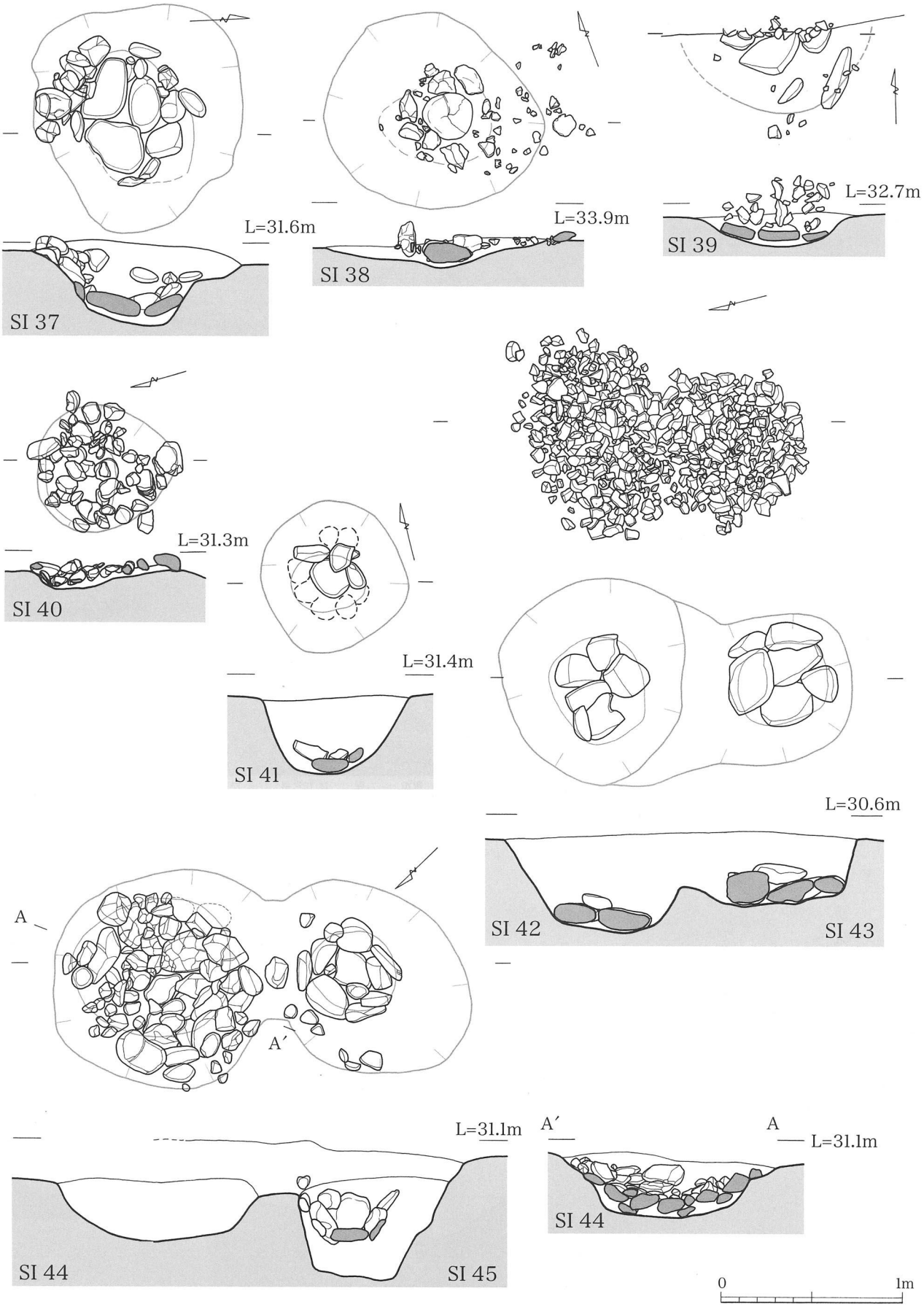
【SI44とSI45】　Ａ２区北側の散礫２の礫を除去していくとSI44がまず検出され、SI44の掘り込みの壁面からSI45の掘り込みが確認された。SI44の底石は径約20～40cmの礫間に径約５～10cmの礫を配する。埋土は炭化物を含んだ黒色土である。SI45の底石はSI44の底石と同サイズのものを配しているが、掘り込み底面から浮いており、その間に黒色の埋土が堆積



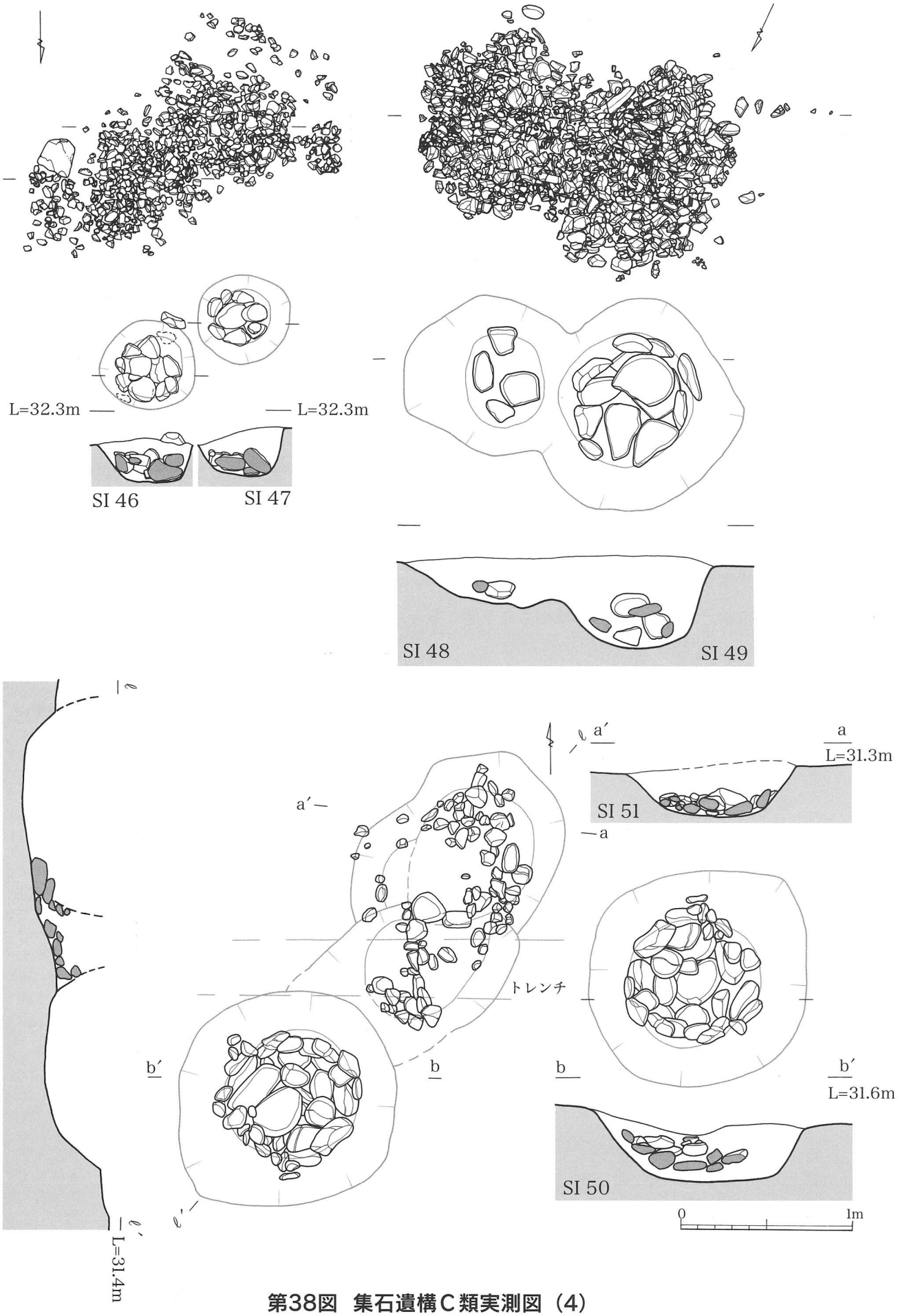
第35図　集石遺構C類実測図（1）



第36図　集石遺構C類実測図（2）



第37図　集石遺構C類実測図（3）



第38図　集石遺構C類実測図（4）

する。掘り込みの壁面には裏込めと考えられる埋土があった。

【SI46とSI47】　Ａ２区中央部から検出された。周囲には炉穴が広がっていた。この２基は他のＣ２類と違って掘り込みは切り合わず、非常に近接していた。また、掘り込みの深さも２基が同じレベルである。２基は上部礫・底石ともに円礫が割れたもので構成されている。底石は非常にもろくなっており、取り上げるとぼろぼろに割れた。埋土は黒褐色土であり、焼土塊を多量に含んでいる部分もあった。また、底石にタール状の物質の付着も見られた。

【SI48とSI49】　Ａ２区東側から検出された。この２基の北側には炉穴が広がっていた。礫の石材は砂岩が主である。掘り込みの深さはSI49がかなり深くなっており、第Ⅵ層（姶良Tn層）に達している。２基の掘り込みの前後関係は切り合いからははっきりしないが、上部礫の断面の様子ではSI49の礫をSI48が切る形になっている。埋土には炭化物を多量に含み、下部は黒色をなしていた。底石は径約15cm～40cmの大礫・巨礫を使用し、石材は尾鈴山酸性岩・砂岩を使用していた。

【SI50とSI51】　Ａ２区北側の散礫２の礫を除去していくとSI50がまず検出された。土層ベルトを挟んだ反対側にSI51が検出された。SI50は上部礫を除くと底石が２層をなすように配されていた。底石は砂岩と尾鈴山酸性岩の円礫が使用されていた。底石は掘り込み底面から浮いた状態であった。埋土は粘性のある暗褐色土であり、炭化物を含む。SI51は最上部の礫は少なかったが、やはり底石を配していた。SI50とSI51の掘り込みの深さは同レベルであったが、２つの掘り込み底面より下層と考えられる位置からも礫を検出している。

第17表　集石遺構観察表

※長径・短径・深さの単位はcm

遺構番号	配石	掘り込み	長径	短径	深さ	赤化	炭化物	分類
1	×	×	－	－	－	○	なし	A
2	×	×	－	－	－	○	なし	A
3	×	×	－	－	－	○	有り	A
4	×	×	－	－	－	○	なし	A
5	×	×	－	－	－	○	なし	A
6	×	×	－	－	－	○	なし	A
7	×	×	－	－	－	○	なし	A
8	×	×	－	－	－	○	有り	A
9	×	×	－	－	－	○	なし	A
10	×	×	－	－	－	×	なし	A
11	×	×	－	－	－	○	なし	A
12	×	×	－	－	－	○	有り	A
13	×	×	－	－	－	○	有り	A
14	×	○	114	104	17	○	有り	B
15	×	○	156	90	20	○	有り	B
16	×	○	87	72	13	○	なし	B
17	×	○	110	106	24	○	有り	B
18	×	○	104	75	21	○	なし	B
19	×	○	115	93	18	○	なし	B
20	×	○	130	112	7	○	なし	B
21	×	○	100	63	13	○	なし	B
22	×	○	87	69	34	○	なし	B
23	×	○	45	42	24	×	なし	B
24	×	○	115	105	11	○	なし	B
25	○	○	147	123	13	○	有り	C1
26	○	○	196	175	36	○	有り	C1
27	○	○	146	120	37	○	有り	C1
28	○	○	92	70	22	○	なし	C1
29	○	○	60	732	11	○	なし	C1
30	○	○	145	135	63	○	有り	C1
31	○	○	120	115	32	○	なし	C1
32	○	○	135	126	18	○	有り	C1
33	○	○	75	63	18	○	有り	C1
34	○	○	154	127	28	○	有り	C1
35	○	○	157	127	54	○	有り	C1
36	○	○	92	67	12	○	なし	C1
37	○	○	131	112	43	○	有り	C1
38	○	○	117	101	15	○	有り	C1
39	○	○	105	(43)	18	○	有り	C1
40	○	○	178	69	11	○	なし	C1
41	○	○	85	81	40	○	有り	C1
42	○	○	(195)	113	54	○	有り	C2
43	○	○	(195)	81	42	○	有り	C2
44	○	○	(228)	120	53	○	有り	C2
45	○	○	(228)	102	69	○	有り	C2
46	○	○	56	54	26	○	有り	C2
47	○	○	57	53	27	○	有り	C2
48	○	○	(199)	90	50	○	なし	C2
49	○	○	(199)	127	69	○	有り	C2
50	○	○	142	123	33	○	有り	C2
51	○	○	(316)	93	32	○	有り	C2

4 土　坑

土坑は、調査区内から多数検出された。土坑の時期は、切り合い関係や埋土中の遺物から、縄文時代～古墳時代にわたり、もっとも集中するのは縄文早期である。分布状況や出土遺物より、縄文時代の所産と判断できたものについて報告する。

縄文早期の土坑は、その配置パターンから以下のA～C群に分類した。本来はC類であり、それが重なりあってB類→A類となる。A類は、意図的に切り合う可能性があり、その重なり方からA－1・2類に細別した。

A類：　複雑に切り合って群をなすもの

　　A－1類：アメーバ状に広がるもの（本来的にはA－2類であり、それが複雑に切り合ったものか）

　　A－2類：ヤツデ状に広がるもの

B類：　2～3基の切りあい関係を持つもの

C類：　単独で存在するもの

土坑A・B類は、平面形が長楕円形をし、かつその大半の床面や壁面に焼土が検出された。この特徴は、土坑A・B類が火に関わる遺構であることを示すと考え、土坑A・B類は炉穴と呼ぶことにする。なお、土坑C類のうち、周辺の遺構配置と考えあわせ炉穴に含めた方が良いと判断した場合は、焼土等がなくとも炉穴に含めた場合がある。炉穴と判断した土坑については、「第18表　土坑観察表」に記載している。

調査の経過で述べたように、土坑はⅥ層面で検出された。土坑の埋土は、周辺の土質と大差ない場合が多く、「シミ」「にじみ」といった状態で認識される場合が多かった。その場合、「シミ」「にじみ」を削り込むと、炭化物や焼土粒を含む、より黒みを増した「シミ」「にじみ」となる。炭化物や焼土粒を含むものは、たいてい床面に焼土面が検出され、炉穴と認定された。遺構の半裁はプランがおおむね明確になった時点でおこない、まず床面を確認、床面から追いかける格好で壁面の検出をおこなった。

遺構検出については、とくに炉穴に困難な場合が多かった。炉穴相互の切り合い関係については、埋土が埋土を切るような場合、判定は困難を極め、とくにA－1・A－2類に顕著である。したがって、炉穴間の切り合い関係について明確でないものもある。しかし、炉穴の床面・壁面の焼土は周辺の土質と明確に区別でき、容易に精査することができた。このほか、炉穴は、散礫を外した時点で検出されたもの、集石遺構のような状態で埋土中に礫が充填されたものなどもみられた。散礫など礫の分布と炉穴の分布が重なる場合、当初、集石遺構と認定していたものが、集石を除き土坑壁面を精査中に焼土が見つかり、追いかけていくと長楕円形のプランの炉穴となったものもあった。

炉穴床面には、磨石に似た円礫、赤片した大形の自然礫の残されるものがあった。埋土中には土器・石器・多数の赤化礫・炭化物が混じり、とくに床面付近になると焼土塊や細かな炭化物が広がる場合が多くみられた。床面にピット状の浅い掘り込みを持つものもあった。いわゆる連結土坑に伴うブリッジの明確なものはなく、一部の炉穴に限ってその残骸かと思われるものが検出された。

C類のうち、炉穴以外の土坑に遺物・赤化礫の含まれることはほとんどなかった。

A－1類

【SC１～12】（第39図）　密集した炉穴群である。丘陵頂部から下がり始める、A2区中央部で検出された。長軸方向は北東～南西のものと、北西～南東のものとに大きく分けられ、相互に複雑に切り合っている状況である。

調査では、各炉穴の床面が姶良Tn火山灰であったことから床面の把握は容易であった。しかし、炉穴ごとの埋土の差、壁面となるⅤ・Ⅵ層と埋土の差は明瞭でなく、切り合いの把握、壁面の把握は困難を極めた。土層断面から切り合いを明確にできなかった場合、床面の高低差や壁面の立ち上がりなども勘案して切り合いを推した。

炉穴床面には、長軸の一端に偏って、焼土面やピット状の浅い掘り込みが確認されたものがいくつかある。また、一端に壁面がわずかに張り出すものがある。これは、いわゆる連結土坑のブリッジの残骸の可能性がある。ほとんどの炉穴には張り出しは確認されず、壁面の崩落等によって完全に失われてしまったか、あるいは一部の炉穴に限ってブリッジ状の施設が構築されたものなのかが考えられる。埋土は全体に軟らかく、炭化物粒を多く含むためか、土色は壁面より若干黒ずむ程度であった。埋土中には縄文土器細片、敲石などの礫石器類、若干の旧石器が出土した。

【SC１】　不整形な土坑で、端部や床面にピット状の落ち込みが複数検出された。複数の土坑の切り合いである可能性がある。

【SC2～5】　明確な切り合い関係を把握できなかった。壁面のカーブ具合などから、おそらくは3基の炉穴（SC2～4）であったと推測される。SC3床面上には赤化礫19点が残されていたが、それは北壁で切られた旧石器時代の礫群SI10のものであろう。SC4は、検出時点では、一見すると集石遺構のような礫のまとまりと、その周辺にはシミ状の暗褐色土が広がっていた。礫は45点あり、赤化礫は10点（全体の約22%）と少ない。礫およびシミ状の広がりをあわせて半裁したところ、礫は埋土上部に混入するばかりであった。SC5はSC4に切られた土坑である。これも複数の土坑の切り合いからなる可能性が残る。

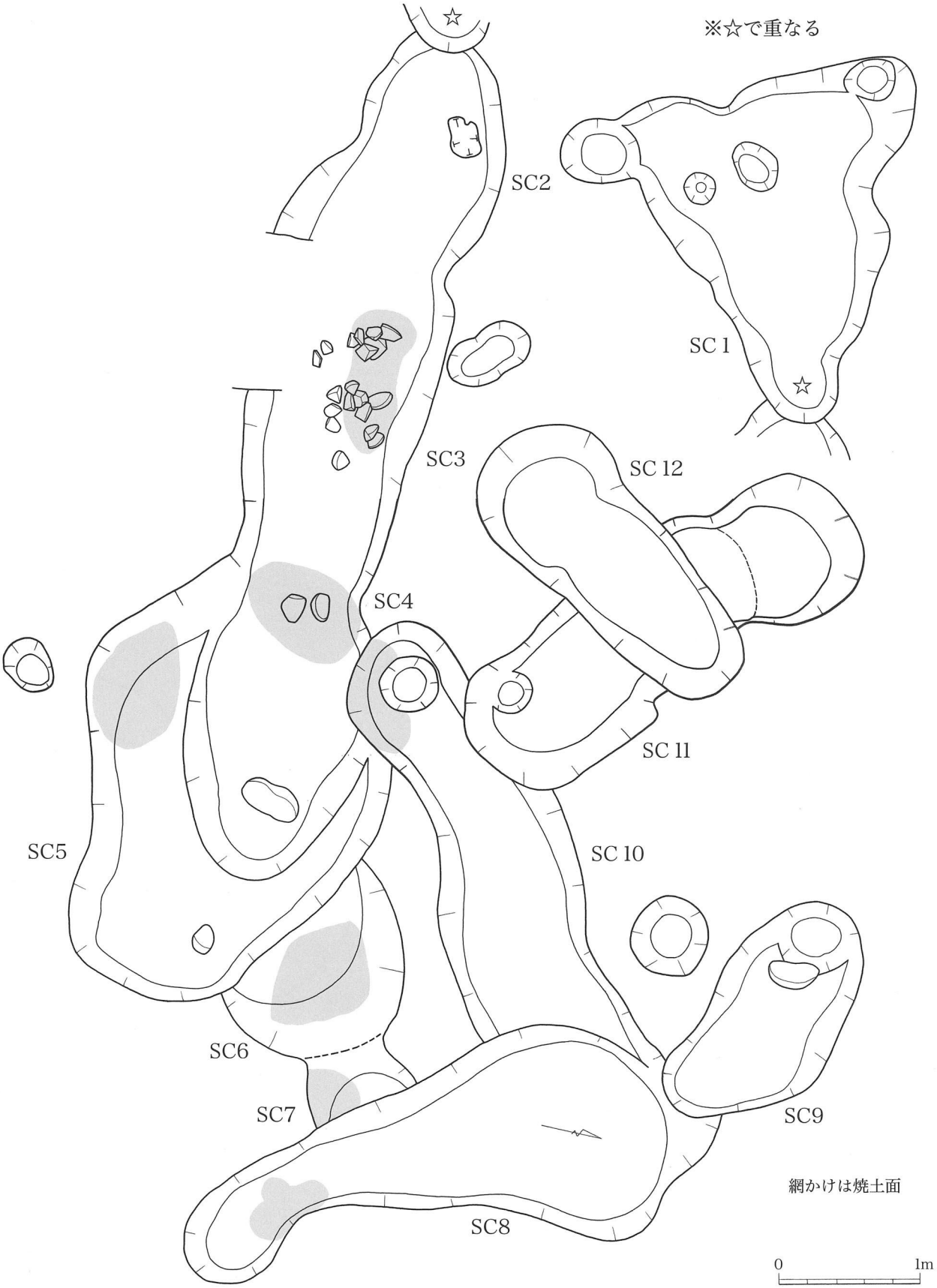
【SC6・7】　床面の立ち上がりから推してSC6の方が新しい可能性があるが、不詳。

【SC8～10】　SC9完掘後、SC8の存在に気付いたため、先後関係は不詳。掘り込みの深さからSC9の方が新しいと推測した。SC10はSC4側から調査を開始し、最終的にSC8に切られるとわかった。土坑規模からすると、やはり複数の土坑の切り合いからなる可能性が残る。

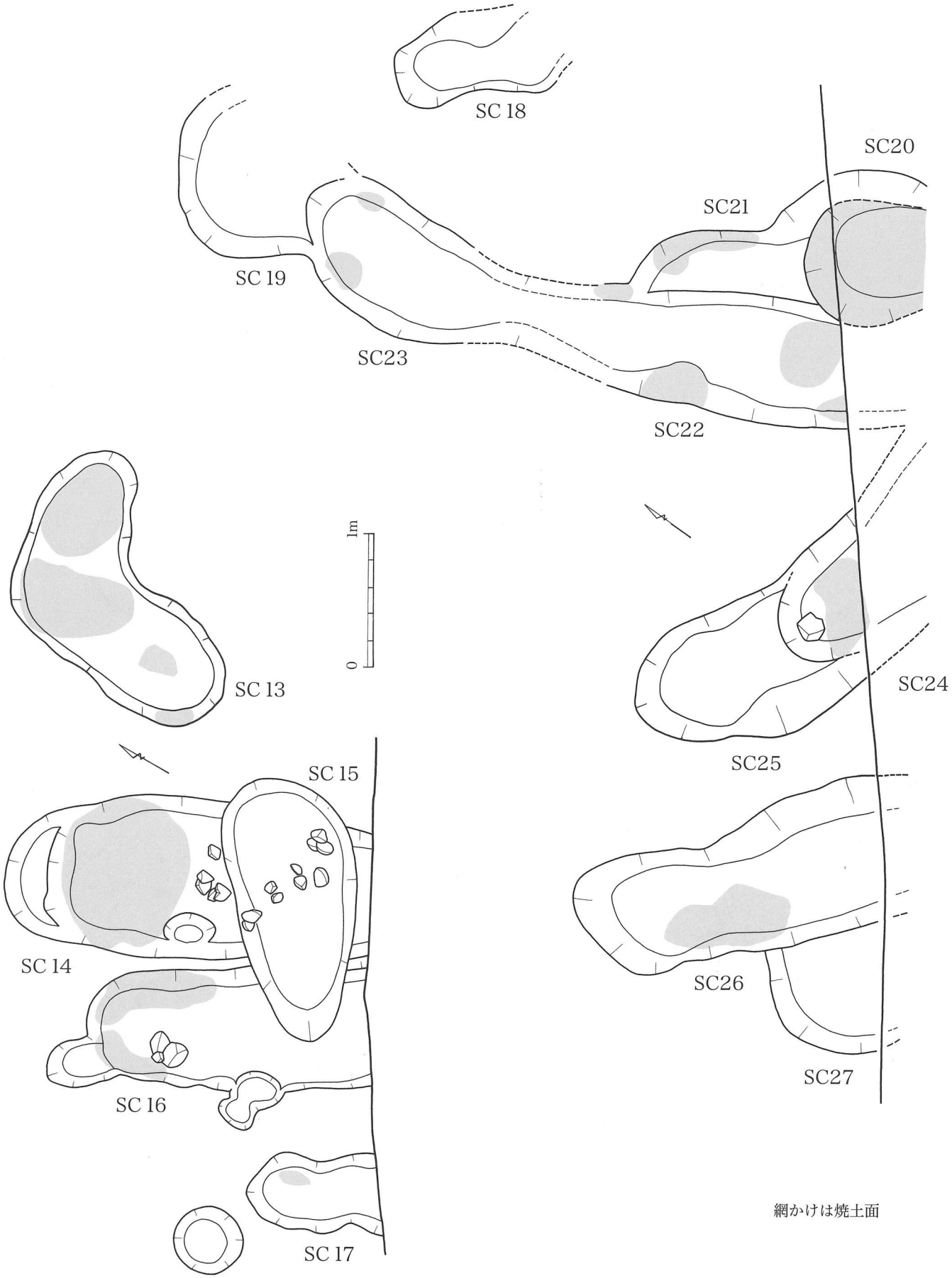
【SC11・12】　全形や切り合いや等、ほかと比べ明確に把握できた。SC11はSC12により直交方向に切られる。SC11・12ともに、壁面がわずかに張り出す箇所がある。これはいわゆる連結土坑のブリッジの残骸かと思われる。埋土中には炭化物がわずかに混じる。

A－2類

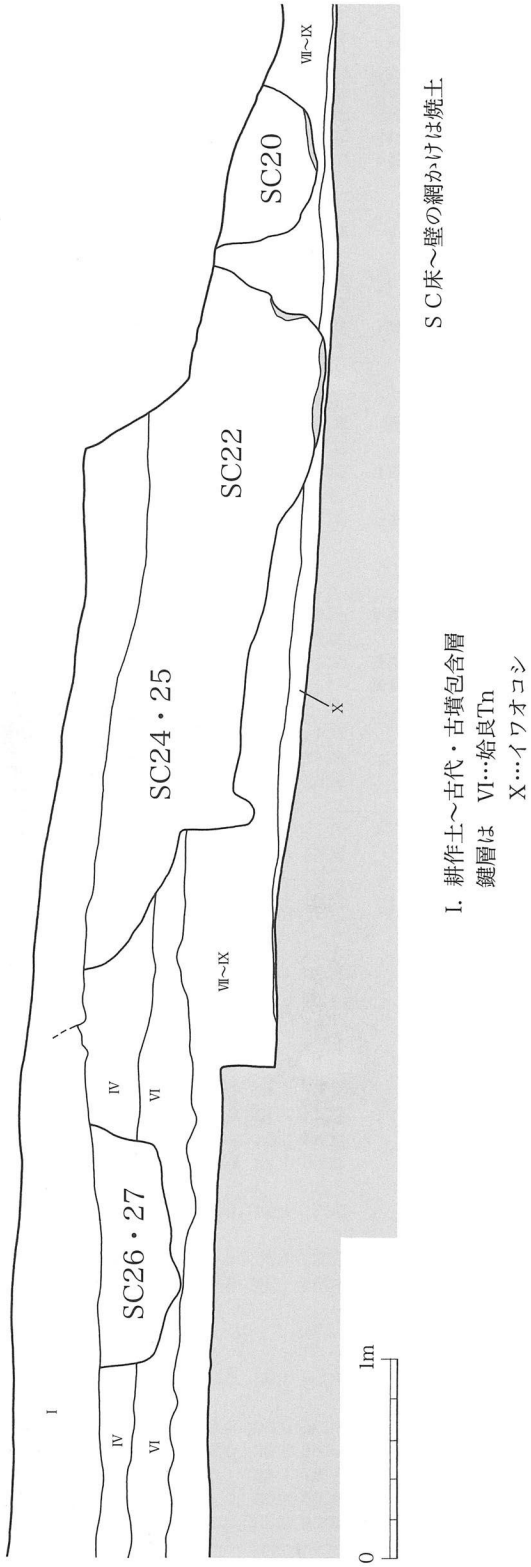
【SC13～17・SC18～27】（第41・42図）　丘陵頂部にあたる、A１・A2区境で検出された。東南側は調査区境に接するため、調査できなかったが、炉穴の延びる向きと出土遺物の共通などから、一群をなす炉穴と思われる。長軸方向は、丘陵南の谷の方向に直交する。各炉穴は、主穴の切り合いが著しく、またⅦ層まで削平された箇所であったため、本来の遺構規模は不明確である。長軸は、おおむね2mを越え、断面形はU字状をする。SC19は、その上部に散礫がのっており、遺構の保存は良好であった。



第39図　土坑A-1類実測図



第40図　土坑A-2類実測図



第41図　土坑A-2類ほか土層断面図

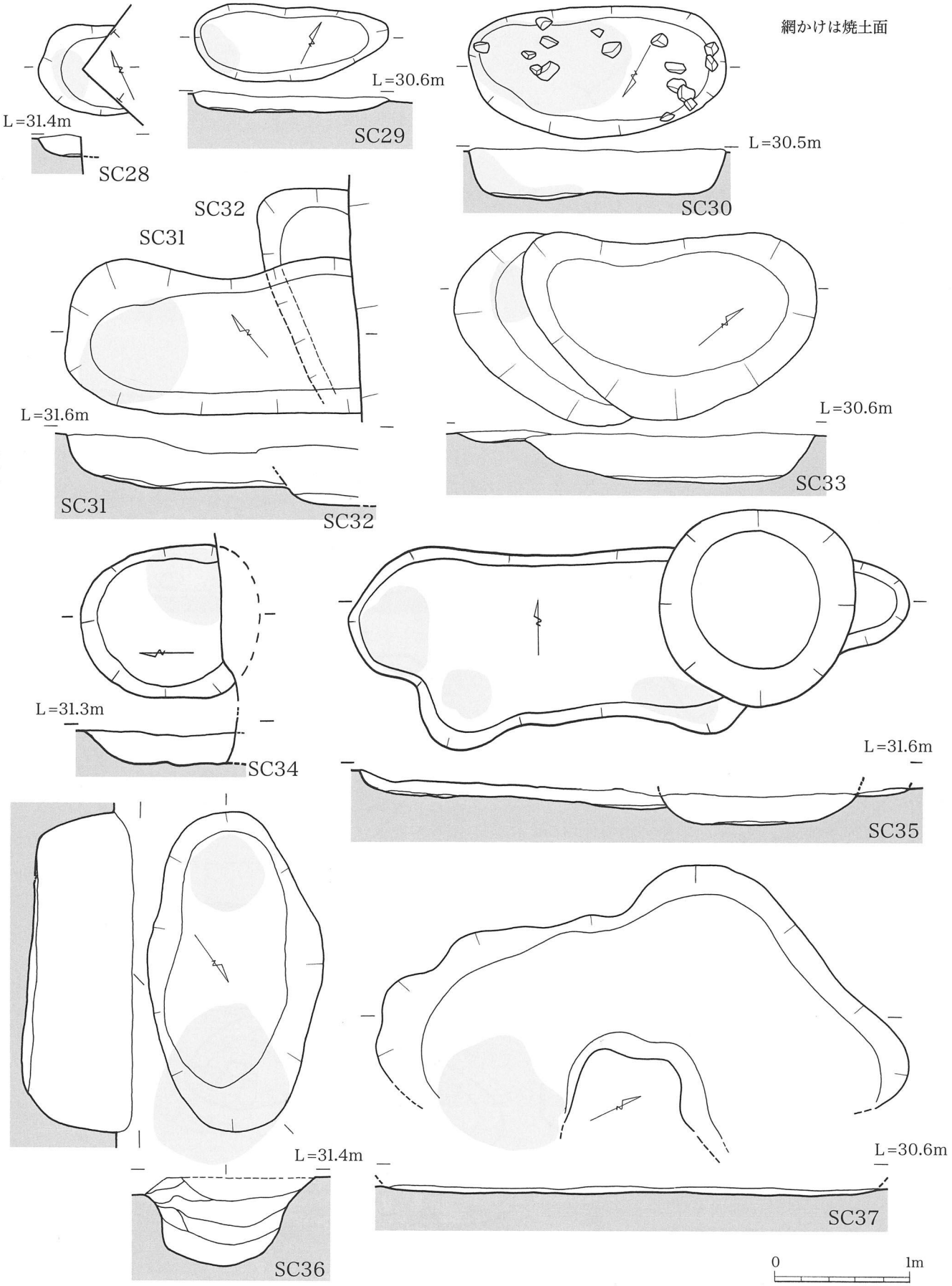
断面は円管形で床～壁面下部に焼土面が広がっていた。埋土は下部にいくほど黒みを増した。

なお、古墳周溝壁面や削平された墳丘部分にも、配置パターンA－2類の炉穴群が確認された。これらの多くについては、古墳周辺の保存の方向性が出た段階で、平板図に位置のみ記録するにとどめた。掘削をおこなったのはSC31・32のみである。

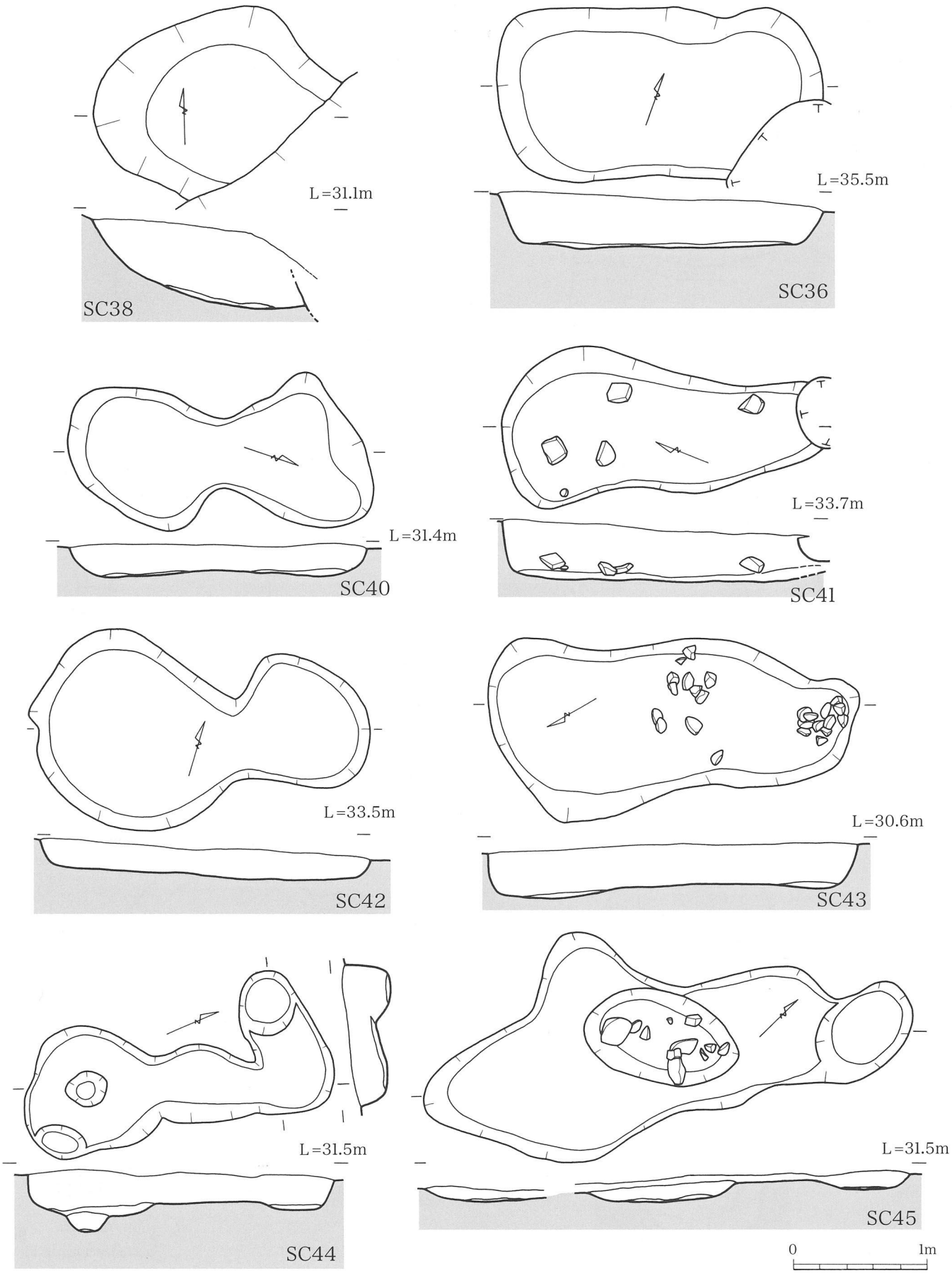
【SC31・32】(第42図)　古墳の周溝によって、南側を削られている。周溝壁面に浅いU字状の焼土面が確認され、炉穴とわかった。焼土面は、炉穴床面から壁面まで広範囲に広がっていた。埋土中には数多くの赤化礫のほか、若干の土器が混じっていた。

第18表　土坑観察表

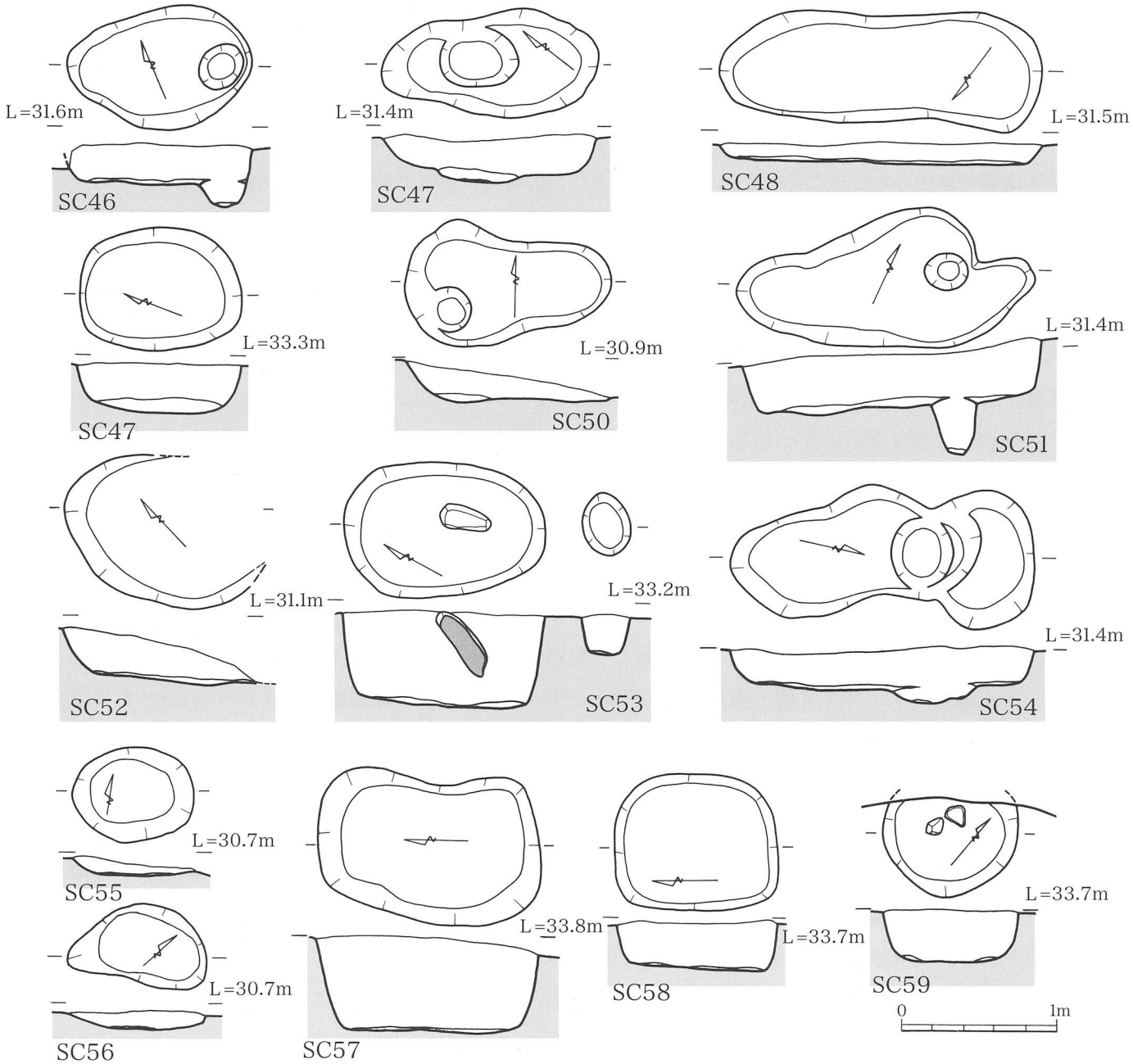
No	遺構規模(m) 長径	短径	残深	焼土面	分類	出土遺物	備考
SC1	2.56	2.48	-	あり	A-1		SC1～12は一連の土坑
SC2	1.76	1.40	-	あり	〃		埋土中の礫は旧石器Ⅱ期礫群の崩落か 床面に小ピットあり
SC3	2.10	1.26	-		〃	楕円押型文（183）	埋土中の礫は旧石器Ⅱ期礫群の崩落か
SC4	2.40	1.34	-		〃		床直に礫３点あり
SC5	3.40	2.34	-		〃		床直に礫１点あり
SC6	1.36	1.30	-		〃		SC7との切り合い不明
SC7	0.76	0.40	-		〃		SC6との切り合い不明
SC8	3.86	1.70	-		〃	敲石（502）	
SC9	1.84	0.98	-		〃		土坑端にピット状のものあり
SC10	3.56	1.20	-		〃		土坑端床面にピットあり
SC11	3.14	1.16	-		〃		土坑端床面にピットあり
SC12	2.34	1.04	-		〃		
SC13	2.18	1.26	-		A-2		SC13～27は一連の群検出面は低く残存非常に悪い
SC14	2.76	1.26	-		〃		埋土上部に礫あり
SC15	2.00	0.96	-		〃		埋土上部に礫あり
SC16	2.48	1.28	-		〃		埋土上部に礫あり
SC17	1.04	0.64	-		〃		
SC18	1.26	0.84	-		〃		
SC19	1.30	1.16	-		〃	手向山式（184） 石核（400） 打製石斧（441）磨石	
SC20	0.96	0.90	-		〃		
SC21	2.40	1.20	-		〃		
SC22	2.96	0.96	-		〃		
SC23	1.86	1.04	-		〃		
SC24	1.86	0.90	-		〃		
SC25	2.20	1.20	-		〃		
SC26	2.68	1.16	-		〃	貝殻条痕（185･186） 打製石斧（419･431）	
SC27	1.06	0.80	-		〃		
SC28	0.68	0.68	0.18	あり	C		撹乱著しい
SC29	1.44	0.60	0.16	〃	〃		
SC30	1.90	1.20	0.40	〃	〃		埋土上部に礫16点含む
SC31	2.20	1.20	0.46	〃	B	田村式（187）	古墳周溝
SC32	1.50	0.80	0.60	〃	〃		
SC33	2.20	1.36	0.34	〃	〃	田村(189) 轟（190） 曽畑（188） 平底底部（191）	前期遺物を含む
SC34	1.32	1.12	0.32	〃	C		
SC35	4.16	1.52	0.36	〃	B		別時期の土坑に切られる
SC36	2.40	1.32	0.88	〃	C		
SC37	3.96	2.20	0.34	〃	B	楕円押型文（192） 二次加工剥片（404）	
SC38	1.66	1.36	0.76		C		後世溝に切られる
SC39	2.46	1.32	0.44		〃		撹乱著しい
SC40	2.28	1.20	0.28		〃		
SC41	2.40	1.22	0.48		〃	敲石（509）	床直礫４点あり
SC42	2.56	1.52	0.34		〃		
SC43	2.80	1.40	0.48		〃	沈線文ある土器（193） 石鏃（387）	埋土上部に礫24点含む
SC44	2.32	1.10	0.52		〃		床面・土坑端にピット状のものあり
SC45	3.66	1.70	0.30		〃		埋土上部に礫11点含む 床面・土坑端にピット状のもの
SC46	1.20	0.82	0.52		〃		土坑端にピット状のものあり
SC47	1.40	0.72	0.38		〃		土坑中央に浅い落ちこみ
SC48	2.10	0.78	0.28		〃		
SC49	1.04	0.82	0.22		〃		
SC50	1.34	0.82	0.30		〃		土坑端にピット状のものあり
SC51	1.94	0.94	0.68		〃		土坑端にピット状のものあり
SC52	1.30	1.02	0.46		〃		
SC53	1.30	0.90	0.70		〃		埋土上部に礫１点含む
SC54	1.96	0.90	0.36		〃		土坑中央に浅い落ちこみ
SC55	0.80	0.62	0.16		〃		削平著しい
SC56	0.90	0.52	0.18		〃		削平著しい
SC57	1.46	1.06	0.64		〃		
SC58	1.06	0.90	0.36		〃		
SC59	0.86	0.70	0.34		〃		埋土上部に礫２点含む



第42図　土坑B・C類実測図（1）



第43図　土坑B・C類実測図（2）



第44図　土坑B・C類実測図（2）

B　類（第43～45図）

【SC37】　A2区丘陵東の落ち際で検出され、表土除去時点では、赤化礫の散在する状況であった。赤化礫を露出させる過程で、多くの炭化物や焼土、焼土面の広がりが検出されたため、炉穴の可能性を想定し掘り下げた。長軸方向を追うと90°近く曲がることから、切り合った複数の炉穴の可能性も予想されたため、配置パターンのB類に含めた。

C　類（第43～45図）

土坑形状は楕円形のものが多く、ほか円形・隅丸方形のものも少量みられる。焼土のないもの・遺物の伴わないものも少なくなく、それらの性格づけなど不詳な点が多い。

5　縄文土器

縄文土器は試掘調査・確認調査の結果より、当初は縄文時代早期～後期の土器が検出されることが予想された。本調査に入り、表土を剥ぐと層序（第Ⅴ章）で記述したように調査地は削平を受け、鬼界アカホヤ火山灰層を含む上位層の残存状態が悪いことがわかった。このことは、縄文時代早期以前の土器が本遺跡では中心になることを意味していた。また、古墳時代以降の遺構の密度が比較的高く、その掘り込みの底面（遺構底面）が縄文時代の遺構や縄文包含層に達していることにより、原位置を保持していない縄文土器が多いことも予想された。

本遺跡での縄文土器の出土・採集は、縄文時代の遺構・縄文包含層・古墳時代以降の遺構・耕作土（造成土を含む）・地表面からなどに大別される。縄文土器は出土遺物の中で点数は最も多く、多量である。ここでは出土した縄文土器のうち168点を掲載した。

掲載の方法は以下のようにした。まず、掲載した縄文土器を『遺構に伴うかどうか』の観点で、A「遺構出土の縄文土器」とB「遺構外出土の縄文土器」に２分割した。A「遺構出土の縄文土器」は縄文時代の遺構と考えられる集石遺構・炉穴・散礫について①集石遺構出土の縄文土器、②土坑出土の縄文土器、③散礫出土の縄文土器の順に記述する。B「遺構外出土の縄文土器」は縄文包含層や古墳時代以降の遺構出土の縄文土器、表面採集などの縄文土器である。縄文時代早期・縄文時代前期・その他の時期に区分して、形態・文様などについて分類して記述する。（分類については後述する。）縄文土器の部位・出土地点・サイズ・文様・調整などの詳細については「縄文土器観察表（１）～（６）」を作成した。また、実測図中の土器の傾きについては、小片や胴部片などを中心に不確定なものがある。

A「遺構出土の縄文土器」

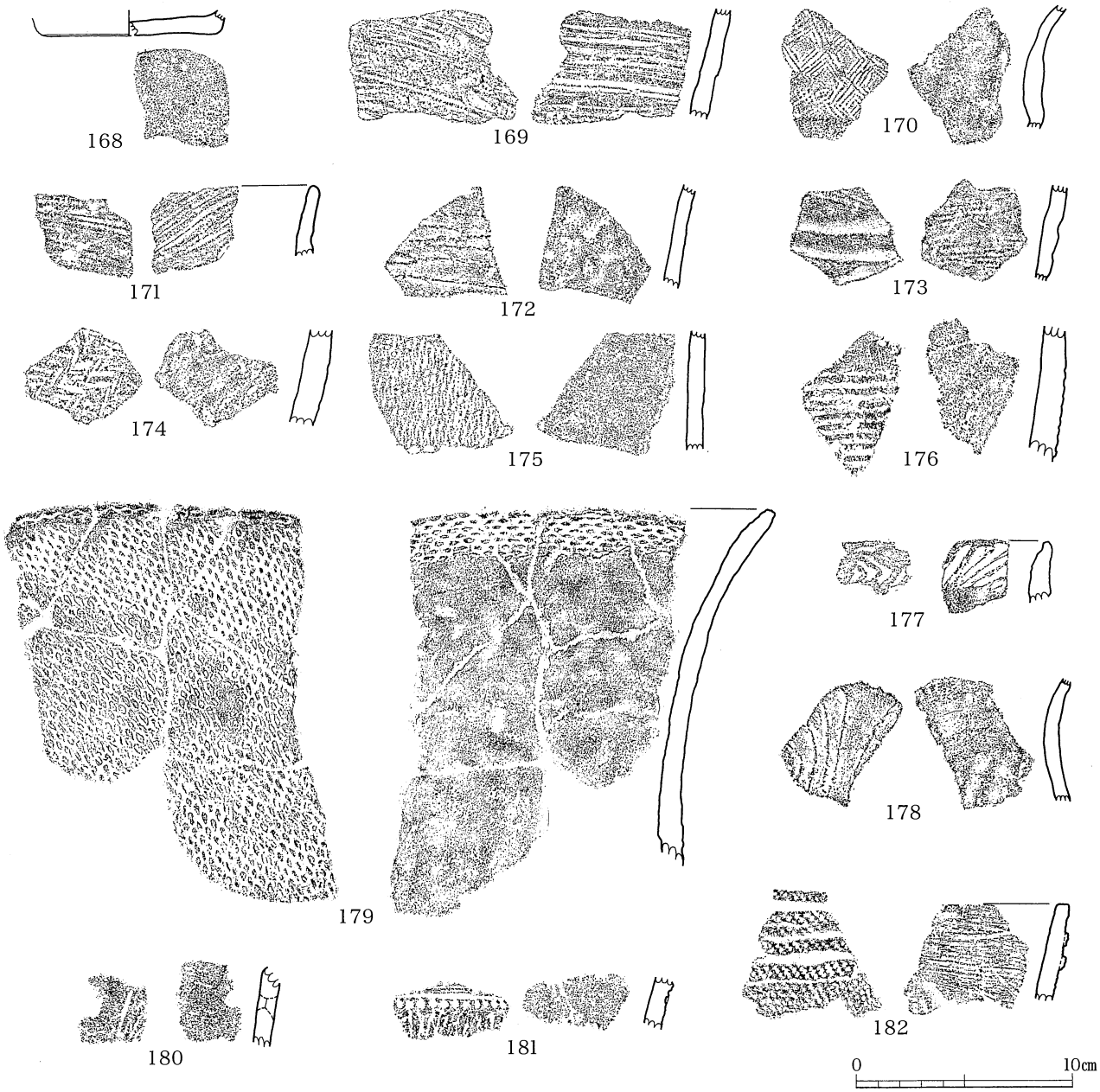
「遺構出土の縄文土器」は縄文時代の遺構の時期を判断する材料の一部になると考え、遺構ごとに掲載した。時期の情報としては埋土からの出土であるものや一括資料として取り上げているものが多いことなどから、活用が難しい部分もある。また、遺構の埋土からの出土であっても出土状況がはっきりとしていないものや遺構そのものの判断に迷うもの（竪穴住居跡）についてはここに含めていないものもある。

①　集石遺構出土の縄文土器

集石遺構の多くは層位的には前述のように縄文時代早期である可能性が高いため、それに伴う縄文土器も縄文時代早期の土器が出土すると考えられた。168～182が集石遺構から出土した縄文土器であり、集石遺構の礫間や掘り込みの埋土に含まれていた。168～175は集石遺構Ａ類からの出土である。168はSI３から出土し、風化が著しく調整は不明であるが平底の底部である。169はSI４から出土し、170・175はSI16から出土した。169は内・外面ともに貝殻条痕をもつ。170は胴部屈曲部付近であり、外面に押型文（菱形）を施し、内面には指頭痕が残る。175は外面に撚糸文を施し、器壁がやや厚い。171～174はSI20から出土した。171は内・外面ともに貝殻条痕をもつ。172は外面にヘラ状工具による微隆起線文を施し、内面に指頭痕が残る。173は外面に棒状工具による沈線を２条施す。174は外面に山形押型文を施す。176は集石遺構Ｂ類のSI９から出土し、外面に条痕文を施す。器壁はやや厚い。177～180は集石遺構Ｃ１類からの出土である。177・178はSI18からの出土し、177は外面に山形押型文を施し、内面には原体によると思われる条痕が残る。178は外面にヘラ状工具による微隆起線文を施

し、内面に指頭痕が残る。179はSI１からの出土であり、外面及び内面上部に楕円押型文を施す。他にも同一個体と思われる土器片が出土している。180はSI38からの出土であり、外面に沈線文・撚糸文を施し、円形の穿孔をもつ。181・182は集石遺構C２類のSI49からの出土である。181は外面に沈線文・連点文・撚糸文を施す。182は外面に隆（起）帯を貼り付け、その後に縄文を施す。縄文は口唇部にも残る。

出土した縄文土器と集石遺構A類～D類までの分類との間にははっきりとした関連や時期差を見い出すことはできなかったが、集石遺構から出土した縄文土器は縄文時代早期中葉～縄文時代前期のものである。



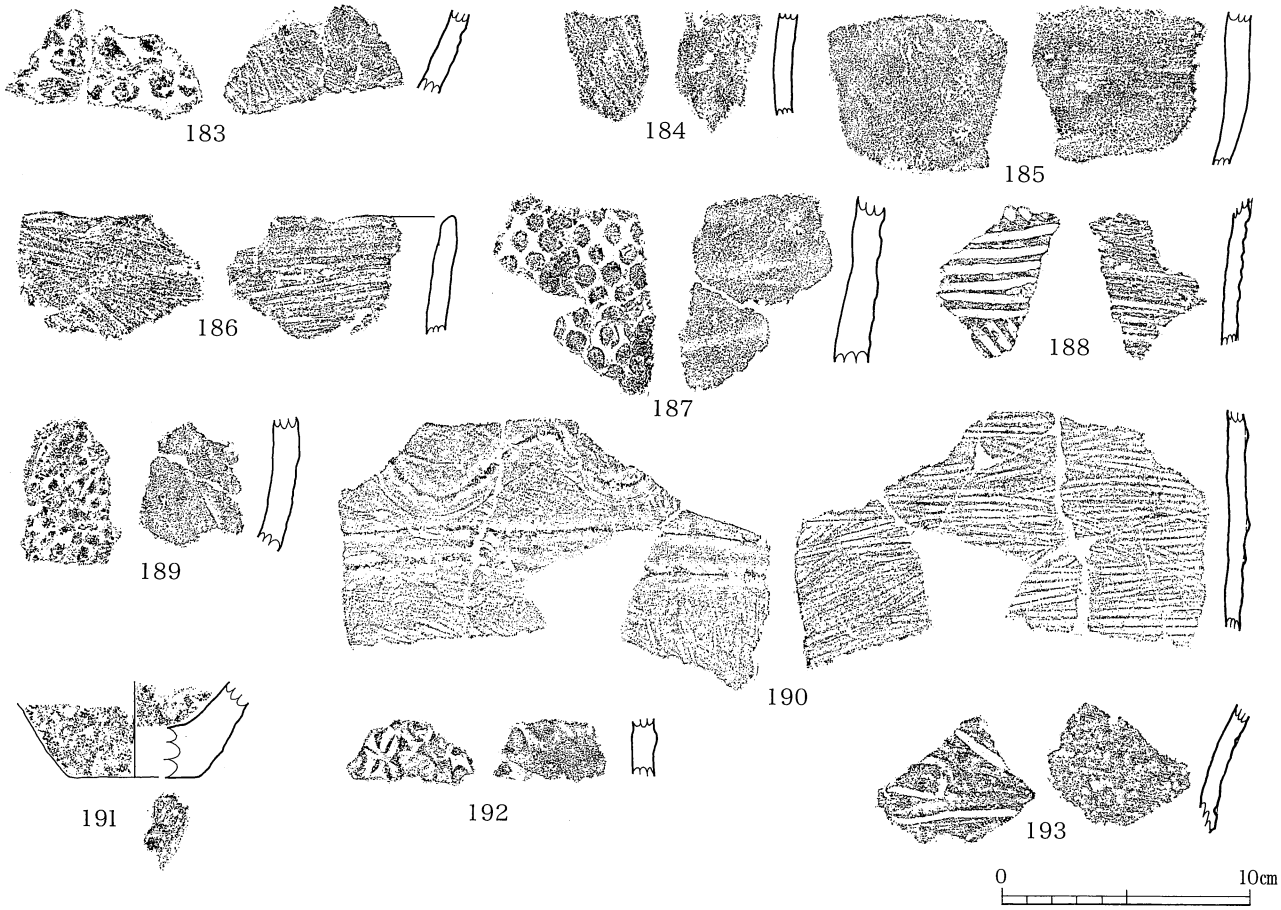
第45図　縄文土器実測図（1）

② 土坑出土の縄文土器

土坑の時期も集石遺構と同じく、層位的に判断すると縄文時代早期が中心であると考えられる。また、集石遺構や散礫の下から検出されているものがあることから、それらの時期よりも少なくとも新しくないことが考えられる。

183～193は土坑から出土した縄文土器であり、土坑の底面・壁面や埋土などに含まれていたものである。183は土坑A１類のSC３から出土し、外面に楕円押型文をもつ。184～186は土坑A２類からの出土である。184はSC19から出土し、外面にヘラ状工具による微隆起線文をもつ。185・186はSC26からの出土である。185は無文の土器と考えられる。186は内・外面ともに貝殻条痕をもつ。187～192は土坑B類からの出土である。187は切りあう土坑のSC31から出土し、外面に比較的大きな楕円押型文を施す。器壁も厚い。188～191はSC33からの出土である。188は外面に列点文・横及び斜方向の沈線文を施し、胎土に滑石が含まれる。189は外面に楕円押型文をもつ。190は内・外面を条痕により調整し、外面に曲線と直線（２条）の断面が三角形の突帯を貼り付ける。他にも同一個体と思われる土器片が出土している。191は風化が著しく調整は不明であるが、平底の底部である。192はSC37から出土し、外面に楕円押型文を施す。193は土坑C類のSC43から出土し、内・外面を条痕により調整したのち外面に曲線と直線の沈線文を施す。

土坑から出土した縄文土器の時期は、集石遺構から出土した土器と同じく縄文時代早期中葉～縄文時代前期である。



第46図　縄文土器実測図（2）

第19表　縄文土器観察表（1）

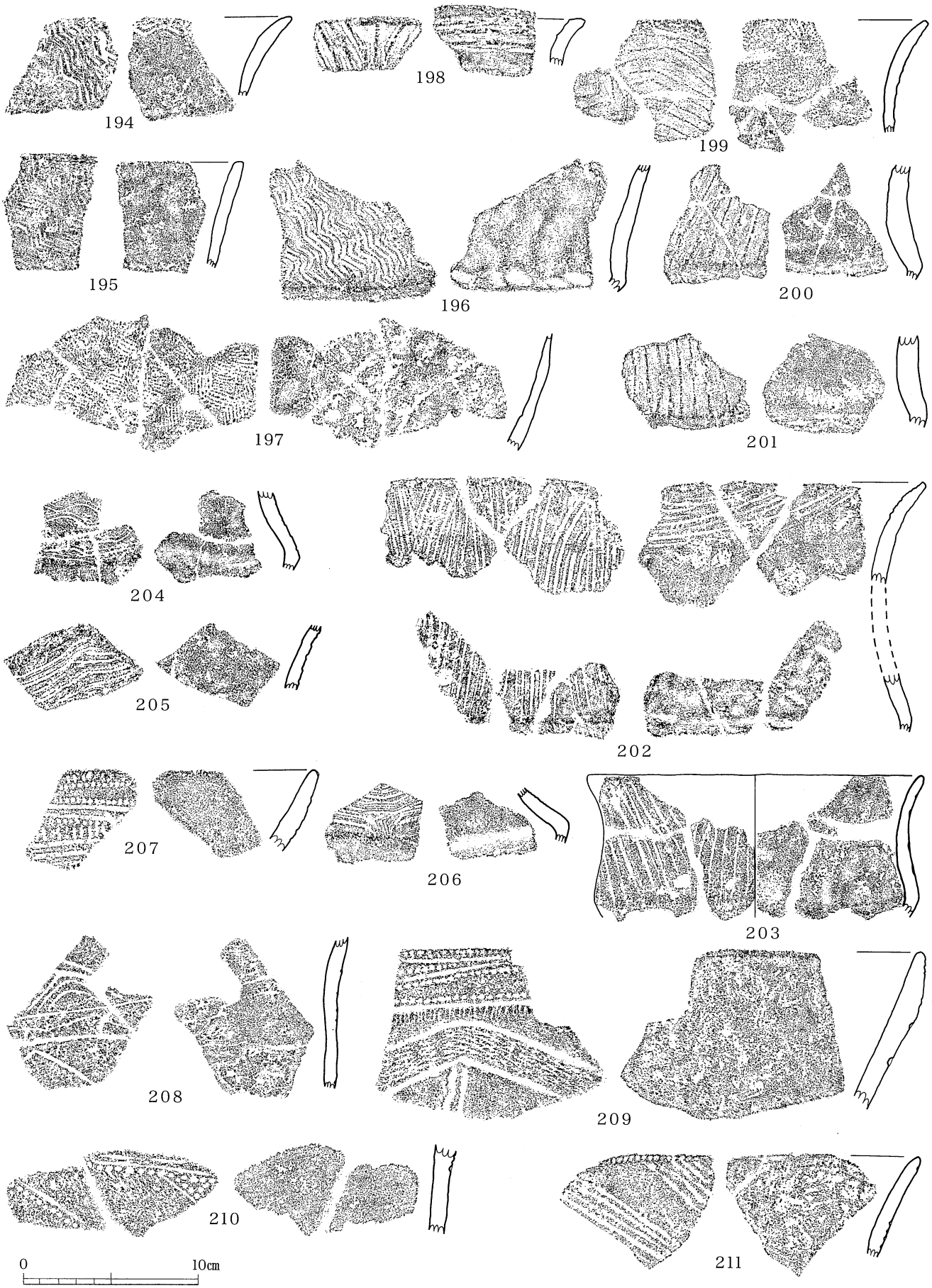
法量＝cm

遺物番号	器種	部位	法量			出土位置	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考	
			口径	底径	器高		外面	内面	外面	内面			
168	深鉢	底部		(8.2)		SI3	風化著しい	ナデ	オリーブ黒	オリーブ黒	1㎜以下の黄灰褐色粒	平底	
169	深鉢	胴部				SI4	貝殻条痕文	貝殻条痕	にぶい黄橙	暗灰黄	1㎜以下の乳白色・明赤褐色粒		スス付着
170	深鉢	胴部				SI8	押形文（菱形）	ナデ	褐	オリーブ褐	1.5㎜以下の金色・無色透明光沢・淡黄色・灰白色粒	手向山	指頭痕
171	深鉢	口縁部				SI7	貝殻条痕、ナデ	貝殻条痕	灰黄褐	にぶい褐	2㎜以下の灰白色・黄灰色・明褐色粒	貝殻条痕文系	
172	深鉢	胴部				SI7	微隆起線文（ヘラ状工具）	ナデ	暗褐	にぶい橙	2㎜以下の淡黄色・灰色・褐色粒	手向山	指頭痕
173	深鉢	胴部				SI7	沈線（凹線）文（棒状工具）	条痕、ナデ	橙・黄褐	にぶい橙	3㎜以下の灰褐色・灰白色・乳白色粒、2㎜以下の黒色・無色光沢粒		指頭痕
174	深鉢	胴部				SI7	山形押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3㎜以下の灰色粒、2㎜以下の乳白色・無色透明光沢粒		
175	深鉢	胴部				SI8	撚糸文	ナデ	にぶい橙・にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の灰白色・黄灰褐色粒	船元	
176	深鉢	胴部				SI20	条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	4㎜大の褐色粒、2㎜以下の乳白色・黄灰色粒		
177	深鉢	口縁部				SI26	山形押型文	原体条痕	にぶい褐	にぶい黄褐	2.5㎜以下の橙色粒、1㎜以下の微細な灰白色粒	山形押型文	
178	深鉢	胴部				SI26	微隆起線文（ヘラ状工具）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	5㎜以下の灰白色粒、4㎜以下の暗灰黄色粒、3㎜以下の赤褐色粒	手向山	指頭痕
179	深鉢	口縁～胴部				SI35	楕円押型文	楕円押型文、ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5㎜の白色粒、3㎜のにぶい黄橙色粒、2㎜以下の柱状黒色光沢粒	楕円押型文	指頭痕、スス付着
180	深鉢	口縁部付近				SI38	沈線文、縄文（充填）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	1㎜以下の乳白色・灰白色粒	塞ノ神	穿孔あり
181	深鉢	胴部				SI49	連点文、沈線文、撚糸文	ナデ	灰黄褐	にぶい黄	0.5～1㎜の透明光沢粒、褐色・乳白色粒	塞ノ神	
182	深鉢	口縁部				SI49	貼付突帯、縄文	条痕、ナデ	にぶい黄	明灰黄	1㎜以下の灰黄色・乳白色粒、2㎜大の黒色光沢粒	船元	№19、スス付着
183	深鉢	胴部				SC3	楕円押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙、褐灰	4㎜以下の赤褐色・灰色粒、3.5㎜以下の灰白色粒	楕円押型文	
184	深鉢	胴部				SC19	微隆起線文（ヘラ状工具）	ナデ	褐	にぶい黄橙	2㎜以下の灰白色・乳白色粒、1㎜大の茶色粒	手向山	
185	深鉢	胴部				SC26	ナデ	ナデ	橙	橙	2㎜～4㎜大の灰褐色・明褐色粒、1㎜以下に灰白色・黒褐色粒		
186	深鉢	口縁部				SC26	貝殻条痕文	貝殻条痕、ナデ	橙	橙オリーブ褐	1㎜以下の灰白色・明褐色・褐色粒	貝殻条痕文系	スス付着
187	深鉢	胴部				SC31	楕円押型文	ナデ	橙	にぶい黄橙	7.5㎜以下の赤褐色粒、3.5㎜以下の灰褐色粒、2㎜以下の乳白色粒	楕円押型文	田村
188	深鉢	胴部				SC33	沈線文、列点（刺突）文	条痕、ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	4㎜以下の灰白色粒（滑石）、褐色粒	曾畑	
189	深鉢	胴部				SC33	楕円押型文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄褐	1㎜以下の茶色・灰白色・明褐色粒	楕円押型文	田村
190	深鉢	胴部				SC33	貼付突帯、条痕、ナデ	条痕、ナデ	黒褐	黄灰	5㎜以下の灰黄色粒、3㎜以下の黄灰色・赤褐色粒、2㎜以下の灰白粒	轟	
191	深鉢	底部		(5.2)		SC33	風化著しい	ナデ	橙	橙	3㎜～5㎜大の灰白色・黄灰色・無色光沢粒		平底
192	深鉢	胴部				SC37	楕円押型文	ナデ	にぶい黄橙・にぶい黄灰	にぶい黄褐	2㎜以下の灰白色・黄褐色、5㎜大の灰白色粒	楕円押型文	
193	深鉢	頸部				SC43	沈線文	条痕、	橙	橙	5㎜以下の乳白色粒、微細な透明光沢粒		

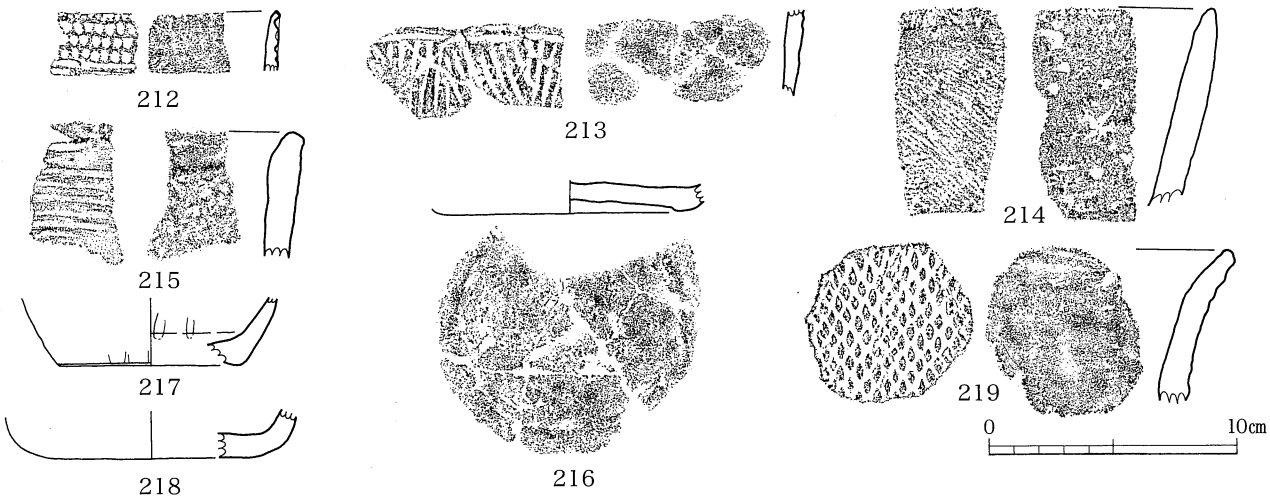
③　散礫出土の縄文土器

194～224は散礫から出土した縄文土器であり、礫間や埋土に含まれていたものである。

194～219は散礫1からの出土である。194～197は外面に斜方向に山形押型文を施す。198～201は外面にヘラ状工具による微隆起線文を施すが、198は綾杉状・199は波状・200は斜方向・201は縦方向である。202・203は外面に綾杉状の沈線文を施す。204は外面に波状の沈線文を施す。205・206は外面に工具は不明であるが曲線を残す。198は内面にも微隆起線文を、202は沈線文（曲線）を施す。194～203の土器は195以外は口縁部が外反し、胴部中央部付近が張り出す屈曲した器形をしていると考えられる。207～211は連点文・沈線文・縄文・刻目文などで構成され、口唇部に刻目を持つ土器である。207は連点文・沈線文・刻目文などで構成される。208は沈線1条単位で直線・曲線が施文されている。209は沈線の区画に縄文が充填される。器壁は厚い。210・211は連点文・沈線文で構成される。212は外面に棒状工具による列点文・短沈線文や口唇部付近に連点文を施す。胎土には滑石が含まれ、器壁はうすい。213は横・斜方向の沈線を外面に施し、器壁はうすく、胎土に滑石は含まれない。214は外面に撚糸文を施し、口唇部に刻目をもつ。器壁は厚い。215は外面に貝殻条痕文を施す。216～218はいずれも平底の底部である。216は上げ底気味であり、217は工具痕？が残る。219は円盤の可能性もあるが、外面に楕円押型文を施し、外反した口縁部をもつ土器片であると判断した。散礫1の土器の時期は194～211・214～216・219は縄文時代早期に、212・213は縄文時代前期に相当すると考えられる。



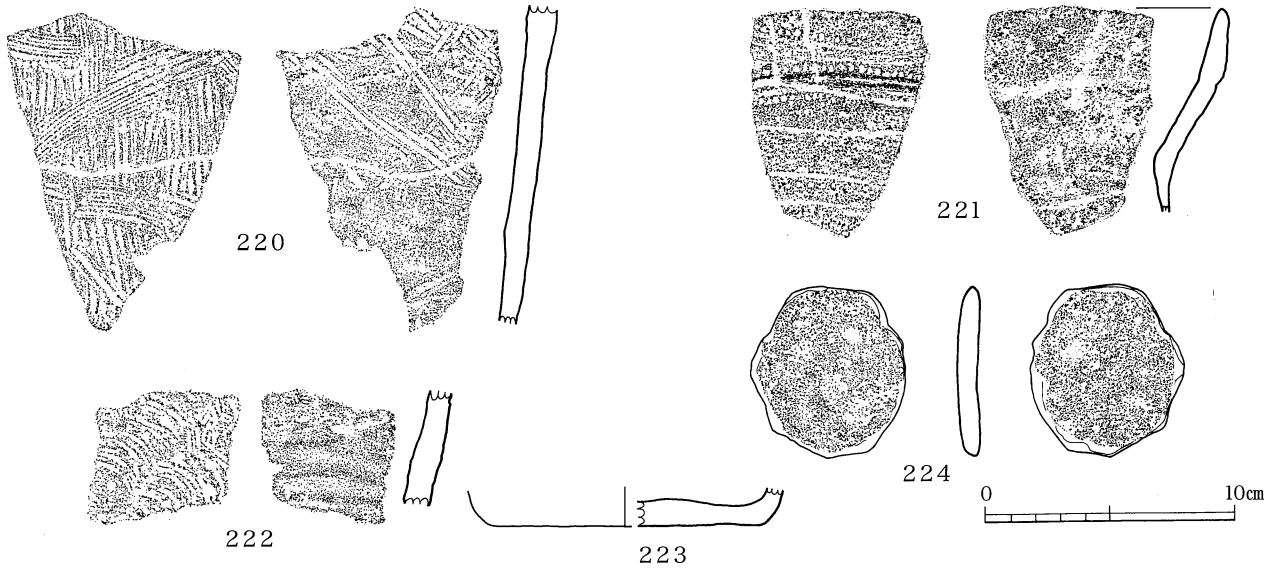
第47図　縄文土器実測図（3）



第48図　縄文土器実測図（4）

220～224は散礫２から出土した土器であり、散礫１と同じく礫間や埋土に含まれていたものである。220は内外面に貝殻条痕が残る。貝殻条痕は外面は縦方向のち斜・横方向に施し、内面は上部にだけ調整する。器壁はやや厚い。221は頚部付近で外反し開いた器形をしている。外面に連点・沈線に幾何学文を施す。222は外面に変形撚糸文を施し、内面はで調整している。223は平底の底部であり、指頭痕が残る。224は円盤である。内外面ともにナデで調整した無文の土器を加工し、転用している。散礫２の土器の時期は220は縄文時代前期に、221～223は縄文時代早期に相当すると考えられる。

なお、掲載はしていないが、散礫３からは山形押型文をもつ土器・条痕文をもつ土器・四角文（沈線）もつ土器などの細片が、散礫４からは無文の土器などの細片が出土している。



第49図　縄文土器実測図（5）

第20表　縄文土器観察表（2）

法量＝cm

遺物番号	器種	部位	法量			出土位置	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考	
			口径	底径	器高		外面	内面	外面	内面			
194	深鉢	口縁部				散礫1	山形押型文	山形押型文、ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5㎜以下の浅黄色・灰白色・灰褐色・褐色・黒色光沢粒	山形押型文	
195	深鉢	口縁部				散礫1	山形押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の灰白色・褐色・黒色光沢粒	山形押型文	
196	深鉢	胴部				散礫1	山形押型文	ナデ	にぶい黄橙・褐灰・橙	にぶい黄橙	6㎜以下の明赤褐色粒、4㎜以下の黒色光沢・無色透明光沢粒	山形押型文	指頭痕
197	深鉢	胴部				散礫1	山形押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	6㎜以下のにぶい褐色粒、4㎜以下の灰白色粒、1㎜以下の黒色光沢粒	手向山	指頭痕
198	深鉢	口縁部				散礫1	微隆起線文（ヘラ状工具）	微隆起線文（ヘラ状工具）、ナデ	にぶい黄橙	橙	2㎜以下の白色・黄灰色・明褐色粒	手向山	
199	深鉢	口縁部				散礫1	微隆起線文（ヘラ状工具）	ナデ	にぶい黄橙	黒褐	2㎜以下の浅黄橙色、1㎜以下の無色透明光沢粒	手向山	
200	深鉢	胴部				散礫1	微隆起線文（ヘラ状工具）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	6㎜以下の灰白色粒、3㎜以下の灰白色粒、2㎜以下の黒褐色粒	手向山	
201	深鉢	胴部				散礫1	微隆起線文（ヘラ状工具）	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	4㎜以下の灰白色粒、2㎜以下の黄灰色粒・黒色光沢粒（柱状）	手向山	
202	深鉢	口縁～胴部				散礫1	沈線文（‖一方向）	沈線文、ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	3㎜以下の褐灰色、1㎜以下の浅黄橙色・赤褐色・無色透明光沢粒	手向山	指頭痕
203	深鉢	口縁部	(15.5)			散礫1	沈線文（＼／方向）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4㎜以下の橙色・灰白色粒、2㎜以下の黒色光沢粒	手向山	指頭痕
204	深鉢	胴部				散礫1	沈線文（～方向）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3㎜以下で灰白色・褐色・黒色光沢粒	手向山	
205	深鉢	胴部				散礫1	条痕文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	3㎜以下の橙色・灰黄色・乳白色粒	手向山	指頭痕
206	深鉢	胴部				散礫1	条痕文	ナデ	黄褐	明黄褐	1㎜以下の灰白色・黒色粒	手向山	指頭痕
207	深鉢	口縁部				散礫1	連点文、沈線文、縄文、刻目（口唇）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3㎜以下の黄灰色・灰白色粒	塞ノ神	
208	深鉢	胴部				散礫1	沈線文（一＼方向）	風化著しい	褐	にぶい褐	3.5㎜以下の褐色粒、2㎜以下の褐灰色粒、1㎜以下の灰白色・褐灰色粒	塞ノ神	
209	深鉢	口縁部				散礫1	連点文、沈線文、撚糸文（充填）、刻目（口唇）、刻目文	ナデ	橙	黄褐	3㎜以下の黄褐色・浅黄色粒	塞ノ神	
210	深鉢	頸部～胴部				散礫1	沈線文、連点文	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	3.5㎜以下のにぶい橙色粒、22.5㎜以下の褐色粒、2㎜以下の灰白色粒	塞ノ神	
211	深鉢	口縁部				散礫1	沈線文（＼方向）、刻目（口唇）	ナデ	にぶい黄橙・黒褐	橙	3㎜以下の黒褐色粒、2㎜以下の淡黄色粒、1㎜以下の無色透明光沢粒	塞ノ神	
212	深鉢	口縁部				散礫1	列点文、沈線文、連点文（口唇）	ナデ	黄褐	にぶい黄褐	2㎜以下の銀色光沢・灰白色粒（滑石入り）	曽畑	
213	深鉢	胴部				散礫1	沈線文（一／＼方向）	ナデ	明黄褐	明黄褐	3㎜以下の灰色粒、1㎜以下の黒色光沢粒・透明光沢粒	曽畑	
214	深鉢	口縁部				散礫1	撚糸文、刻目（口唇）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	1㎜以下の微細な灰白粒	撚糸文	
215	深鉢	口縁部				散礫1	条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の灰白色・乳白色・無色光沢粒	貝殻条痕文系	
216	深鉢	底部		(9.5)		散礫1	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3㎜以下の浅黄橙色粒、1．5㎜以下の金色光沢粒、1㎜以下の無色透明光沢粒		指頭痕
217	深鉢	底部		(7.6)		散礫1	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の灰白色・灰褐色・褐色粒		工具痕
218	深鉢	底部		(10.4)		散礫1	条痕、ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	1㎜以下で灰白色・褐色・黄白色粒、1㎜大の灰褐粒		
219	深鉢	口縁部				散礫1	楕円押型文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	5.5㎜以下の黄褐色・灰白色・黄灰色粒	楕円押型文	指頭痕・円盤？
220	深鉢	胴部				散礫2	貝殻条痕文	貝殻条痕、ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1㎜以下の灰白色・褐色粒	鎌石橋	
221	深鉢	口縁部				散礫2	沈線文、連続刺突文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	1㎜以下で灰白色・黄灰色粒	平栫	
222	深鉢	胴部				散礫2	変形撚糸文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3㎜以下の灰白色粒、2㎜以下の淡橙色粒・金色光沢粒	撚糸文	
223	深鉢	底部				散礫2	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	3㎜以下の橙色粒、2㎜以下の褐灰色・灰白色・無色透明光沢粒	手向山	指頭痕
224	円盤					散礫2	ナデ	ナデ	浅黄・暗灰黄	にぶい黄橙	2.5㎜以下の明黄褐色粒、1.5㎜以下の灰白色・黒色光沢粒		指頭痕

B「遺構外出土の縄文土器」

「遺構外出土の縄文土器」は次のようにⅠ～Ⅶ類に分類した。分類のⅠ～Ⅳ類は縄文時代早期に、Ⅴ・Ⅵ類は縄文時代前期に、Ⅶ類はその他の時期に相当すると考えられる。

○Ⅰ類

押型文を主文様にしていると考えられる土器である。文様を観点にして細分すると外面に「楕円押型文をもつもの」、「山形押型文をもつもの」、「微隆起線文・沈線文をもつもの」などにさらに分類できる。器形は尖底の深鉢形と口縁部が外反し胴部に屈曲部がある平底の深鉢形のものに２分割できると思われる。Ⅰ類に相当する土器は縄文時代早期中葉のものと考えられる。

○Ⅱ類

特徴として「口縁部が開いている」深鉢形の器形であり、基本的な文様としては連点文、貝殻条痕文、沈線文、撚糸文、縄文、刻目文などで構成され、口唇部に刻目などを持つ土器である。風化が著しく、胎土はあまり良くないものが多い。さらに、沈線文の区画に撚糸文を充填するタイプや沈線（直線や曲線）や刺突による幾何学文をもつタイプなどに細分していくことができる。Ⅱ類に相当する土器は縄文時代早期後葉のものと考えられる。

○Ⅲ類

縄文や撚糸文を外面に主文様として施すものである。口縁部が外反しており、器壁はやや厚いものが多い。

○Ⅳ類

口縁部付近に貝殻刺突文を施し、楔形突帯を貼り付け、胴部に縦方向の貝殻刺突文をもつ土器である。

Ⅳ類に相当する土器は縄文時代早期前葉のものと考えられる。

○Ⅴ類

貝殻条痕文（条痕文）や微隆起線文などを器面に広く施す土器である。口縁～胴部にかけて１～数条の隆帯・微隆起帯を貼り付ける。また、口唇部に刻目を有するものもある。器壁はややうすい。Ⅴ類に属する土器中には縄文時代早期の土器が含まれる可能性や時期が縄文時代早期に遡る可能性がある。

○Ⅵ類

文様は沈線や刺突などによる幾何学文である。器壁はうすく、焼成も良好なものが多い。さらに胎土に滑石が含まれるものと含まれないものに分類できる。

○Ⅶ類

Ⅰ類～Ⅵ類に分類できない土器である。

---

① 縄文時代早期の土器

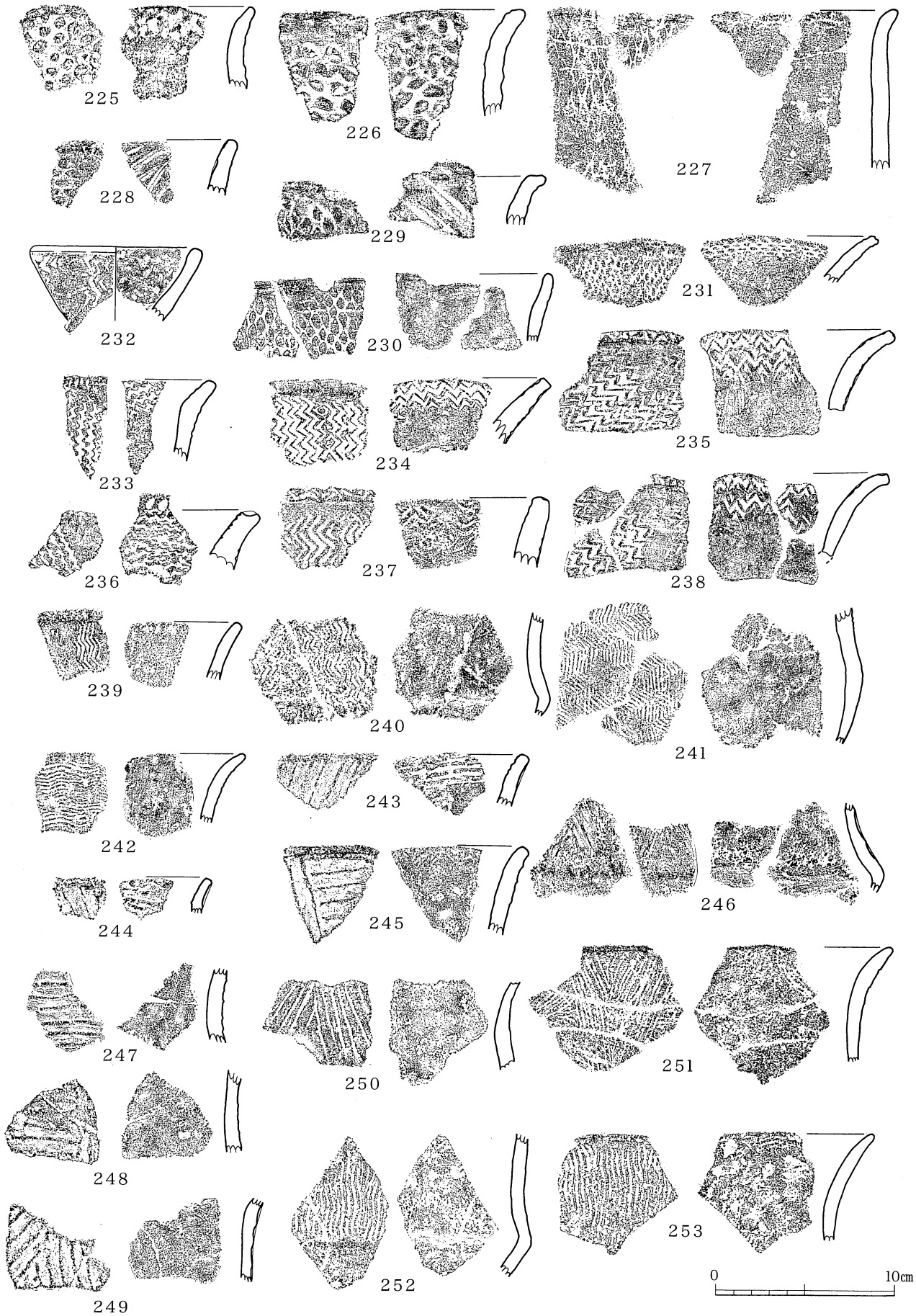
225～258はⅠ類に相当する縄文土器である。225～231は外面に楕円押型文を施す。226は内面にも広く楕円押型文を施すが、225・231は内面口縁部付近にのみ楕円押型文を施す。228・229は内面に原体による条痕が残る。

232～242は外面に山形押型文を施す。232～234・239・240は縦方向、他は斜方向である。233～238は内面にも山形押型文を施す。236は口唇部に刺突文も残る。243～249はヘラ状工具による横・斜方向の微隆起線文を外面に施す。250・251は外面に綾杉状の沈線文を施す。252・253は外面に「ʃ形の押型文を施す。文様や胎土の様子から同一個体の可能性がある。254・255・257は棒状工具によるやや幅広の沈線文を施す。256は上部に縄文、下部に山形押型文を施す。258は平底の底部であり、やや上げ底気味である。器形は232は浅鉢、239～258は胴部中央部付近が張り出し屈曲した深鉢であると考えられる。

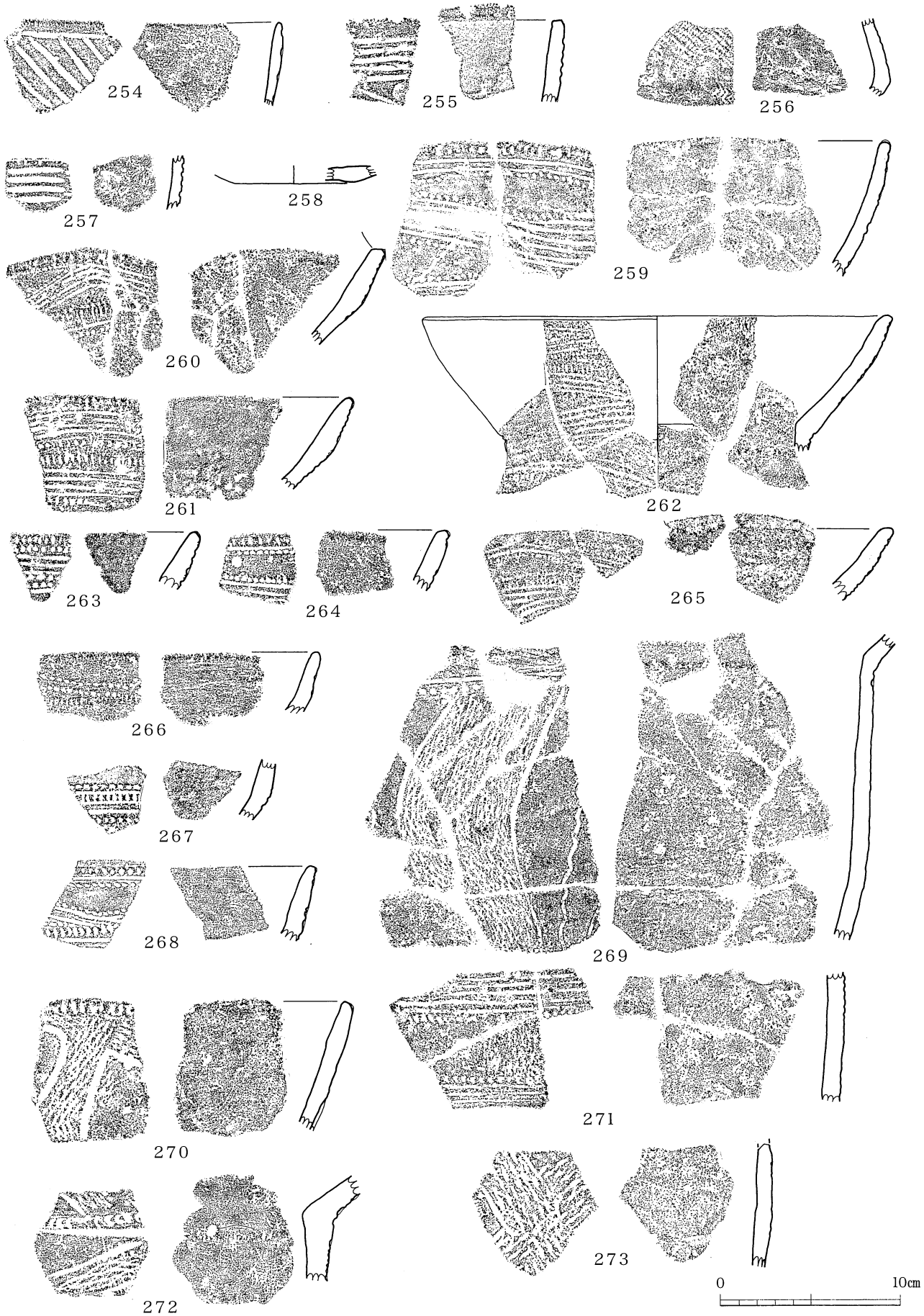
259～282はⅡ類に相当する縄文土器である。259～268は外面が沈線文・連点文・刻目（文）などが施文される。269～276は外面に沈線文の区画に撚糸文または縄文が充填される文様をもつ。277は網目状撚糸文を施す。278・280は沈線文を施す。278は１条単位で構成されているが、280は数条単位で構成されている。279は外面に貝殻押引文を施す。281・282は沈線文（波状）・刻目（口唇）が施文される。

283～291はⅢ類に相当する縄文土器であるが、Ⅰ類に相当する土器が混じる可能性がある。283～287は外面に撚糸文を施す。286は撚糸文の下に条痕調整を残す。288～291は外面に縄文を施す。288は内面口縁部付近にも縄文を施し、口唇部には刻目が残る。290と291は外面に疎に縄文を施している。291は口唇部に刺突文を施し、内面に赤色の物質が付着している。290と291は文様と胎土の様子から同一個体かもしれない。

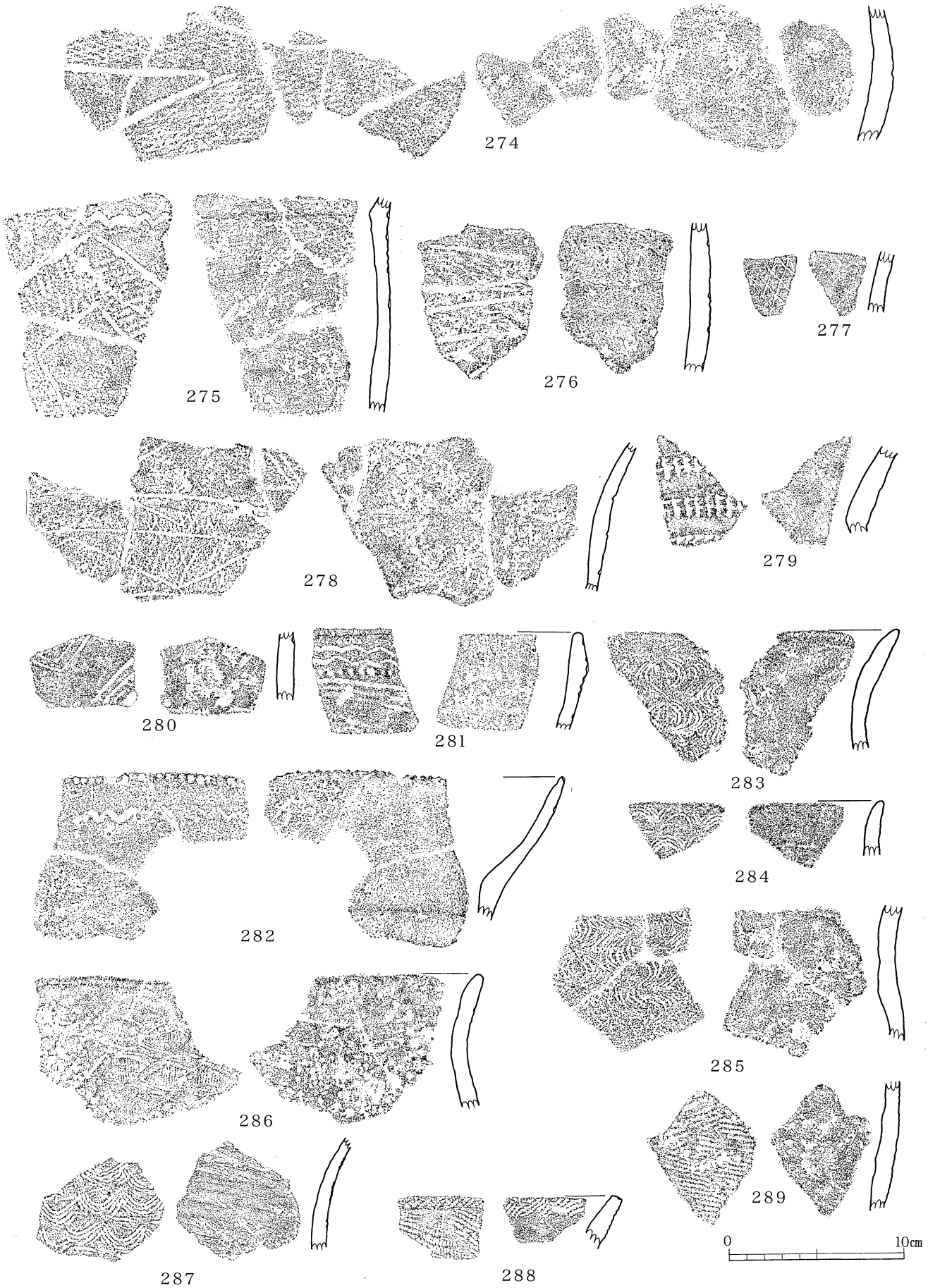
292は１点だけであるがⅣ類に相当する縄文土器である。外面に縦方向に貝殻刺突文を施し、楔形突帯（下半部だけ）を貼り付ける。器形は角筒の深鉢であり、部位は口縁部の下端付近と思われる。



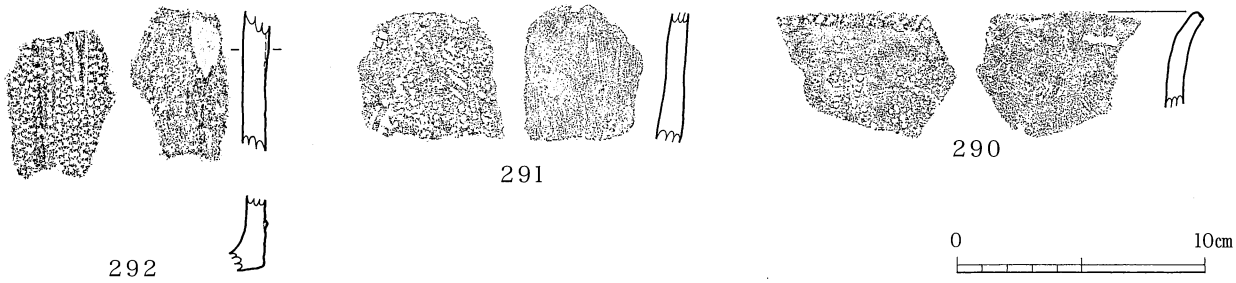
第50図　縄文土器実測図（6）



第51図　縄文土器実測図（7）



第52図　縄文土器実測図（8）



第53図　縄文土器実測図（9）

第21表　縄文土器観察表（3）

法量＝cm

遺物番号	器種	部位	法量			出土位置	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考	
			口径	底径	器高		外面	内面	外面	内面			
225	深鉢	口縁部				(SC15)	楕円押型文	楕円押型文、ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	3mm以下の灰白色・黄灰色粒	楕円押型文	
226	深鉢	口縁部				A	楕円押型文	楕円押型文	にぶい橙	にぶい褐	6.5mm以下の灰白粒、5mm以下のにぶい黄橙色粒、2mm以下の浅黄橙色・橙色粒	楕円押型文	
227	深鉢	口縁部				A	楕円押型文	ナデ	明赤褐	にぶい褐	3mm以下の灰白色・褐色・黒色光沢粒	楕円押型文	指頭痕
228	深鉢	口縁部				A	楕円押型文	原体条痕	明赤褐	橙	0.5mm以下の淡黄色粒	楕円押型文	
229	深鉢	口縁部				SE2	楕円押型文	原体条痕、ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	3mm以下の灰白透明粒、微細な浅黄橙色・黒色・明褐灰色粒	楕円押型文	
230	深鉢	口縁部				SC	楕円押型文	ナデ	橙	橙	5mm以下のにぶい橙色粒、2mm以下の褐灰色・黒色・灰白色透明光沢粒	楕円押型文	指頭痕
231	深鉢	口縁部				トレンチ3	楕円押型文、楕円押型文（口唇）	楕円押型文、ナデ	浅黄橙・黄灰	浅黄橙	5mm以下の淡黄色・灰色粒、3mm以下の灰白色粒、2mm以下の茶褐色粒	楕円押型文	
232	浅鉢	口縁部	(9.4)			SC	山形押型文	ナデ	橙	浅黄橙	2mm以下の灰白色・灰色粒	山形押型文	
233	深鉢	口縁部				SC	山形押型文	山形押型文、ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	3mm以下の金色光沢粒、2mm以下の灰白色粒	山形押型文	指頭痕
234	深鉢	口縁部				SA7	山形押型文	山形押型文、ナデ	橙	橙	5mm以下の褐灰色粒、2mm以下の灰白色粒	山形押型文	指頭痕
235	深鉢	口縁部					山形押型文、山形押型文（口唇）、ナデ	山形押型文、ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰白色粒	山形押型文	
236	深鉢	口縁部					山形押型文、刺突文（口唇）、ナデ	山形押型文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰白色粒・金色光沢粒、2mm以下の灰白色粒、1mm以下の無色透明粒	山形押型文	
237	深鉢	口縁部				(SA101)	山形押型文、山形押型文（口唇）	山形押型文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	9mm大の褐色粒、3mm以下の淡黄色・灰白色・黒色光沢粒	山形押型文	
238	深鉢	口縁部					山形押型文、山形押型文（口唇）、ナデ	山形押型文、ナデ	にぶい橙	にぶい橙	4mm以下の灰白色粒	山形押型文	
239	深鉢	口縁部				A	山形押型文	風化著しい	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の灰白色粒	手向山	
240	深鉢	胴部				SA5	山形押型文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	1mm以下で淡黄色・灰褐色・褐色粒	手向山	
241	深鉢	胴部				A	山形押型文	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	3mm以下の灰白色粒、2mm以下の金色光沢粒	手向山	指頭痕
242	深鉢	口縁部				A	山形押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の灰白、2mm以下の黒、1mm以下の透明光沢、黒色光沢粒	手向山	指頭痕
243	深鉢	口縁部				A	微隆起線文（ヘラ状工具）	条痕文、ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の褐色・黄褐色粒	手向山	
244	深鉢	口縁部				A	微隆起線文（ヘラ状工具）	微隆起線文、ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の褐色粒	手向山	
245	深鉢	口縁部				A	微隆起線文（ヘラ状工具）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰褐粒	手向山	指頭痕
246	深鉢	胴部				SA7	微隆起線文（ヘラ状工具）	ナデ	にぶい黄橙・褐灰	浅黄・黒	5mmのにぶい褐色粒、3mm以下の灰白色・黒色・黒色透明光沢粒	手向山	指頭痕
247	深鉢	胴部				SA7	微隆起線文（ヘラ状工具）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰白色・黄橙色・黒色光沢粒	手向山	指頭痕
248	深鉢					A	微隆起線文（ヘラ状工具）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒色粒、微細な無色透明光沢粒	手向山	
249	深鉢	胴部				SA2	微隆起線文（ヘラ状工具）	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	2.5mm以下の乳白色・灰白色・褐色粒	手向山	
250	深鉢						沈線文（／＼方向）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	2mm以下の灰白色・褐色・黒色光沢・黄灰色粒	手向山	指頭痕
251	深鉢	口縁部				A	条痕文（＼／方向）	ナデ	浅黄	浅黄	3mm以下の灰白色・黒色・明赤褐色、2mm以下の無色透明光沢粒	手向山	
252	深鉢	胴部				A	条痕文？（　方向）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の褐色・灰白色・黄褐色粒	手向山	
253	深鉢	口縁部				A	条痕文？（　方向）	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	4mm以下の灰白色・黄灰色粒	手向山	
254	深鉢	口縁部				SA5	沈線文（—＼方向）	ナデ	灰黄褐	にぶい黄褐	3mm以下の灰白色・浅黄色・褐色粒	手向山	
255	深鉢	口縁部				A	沈線文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の淡黄色・褐色粒	手向山	
256	深鉢	胴部				SA2	縄文、山形押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2.5mm以下の橙色粒、1mm以下の灰白・褐色の粒を含む	手向山	指頭痕
257	深鉢	胴部				SA7	沈線文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下のにぶい黄橙粒、2.5mm以下の褐灰粒、2mm以下の灰白粒を含む	手向山	
258	深鉢	底部		(6.5)		A	ナデ	ナデ	灰黄褐	褐灰	2mm以下の金色光沢粒・褐灰粒、1mm以下の灰白・にぶい黄橙粒を含む	手向山	
259	深鉢	口縁部				A	連点文、条痕文、口唇（刻目）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下で灰白・黄灰・金色光沢粒を含む	塞ノ神	
260	深鉢	口縁部				A	沈線文、連点文、刻目文、刻目（口唇）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒色粒・微細な灰白粒を多く含む	塞ノ神	
261	深鉢	口縁部				SC	連点文、沈線文、刻目（口唇）、刻目文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の灰褐色粒、0.5mm以下の灰白粒	塞ノ神	
262	深鉢	口縁部	(25.7)			A	沈線文、連点文、刻目文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒色・透明光沢粒、微細な灰白色粒を多く含む	塞ノ神	
263	鉢	口縁部				SN1	刻目（口唇）、連点文、沈線文	風化著しい	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の淡黄色粒、微細な黒色・無色透明光沢粒を含む	塞ノ神	
264	深鉢	口縁部				SA4	連点文、刻目（口唇）、沈線文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の白色粒、0.5mm以下の無色透明光沢粒を含む	塞ノ神	
265	深鉢	口縁部				A	沈線文、刻目文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒・赤褐・黒色光沢（柱状）粒を含む	塞ノ神	
266	深鉢	口縁部				SA4	連点文、刻目（口唇）、沈線文、刻目文	条痕のちナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰白粒、2mm以下の無色透明光沢粒を含む	塞ノ神	
267	深鉢	口縁付近				SA5	刻目文、連点文、沈線文、竹管刺突文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄橙	2mm以下の灰白粒、1.5mm以下のにぶい褐色・にぶい橙・金色光沢粒	塞ノ神	
268	深鉢	口縁部				SA8	沈線文、連点文、刻目文、刻目（口唇）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の灰白粒、2mm以下の淡黄粒、0.5mm以下の無色透明粒	塞ノ神	

第22表　縄文土器観察表（4）

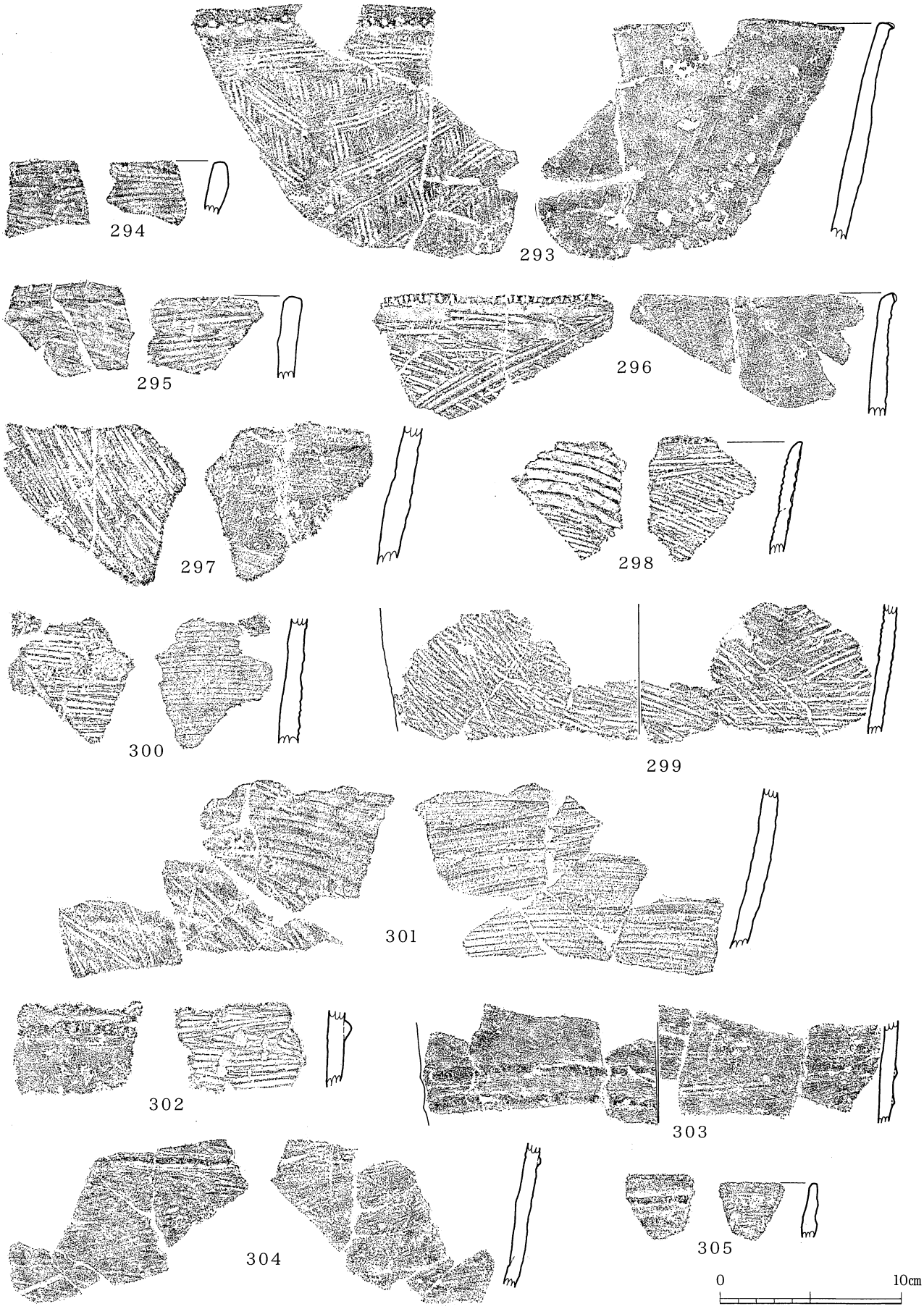
法量＝cm

遺物番号	器種	部位	法量			出土位置	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考	
			口径	底径	器高		外面	内面	外面	内面			
269	深鉢	胴部				A	沈線文、連点文、撚糸文（充填）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	5mm以下の灰色・黒色粒、3?以下の無色透明光沢粒	塞ノ神	
270	深鉢	口縁部				SA5	沈線文、刻目(口唇)、撚糸文（充填）	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	7mm以下の褐灰色粒、5mmm以下の赤灰色粒、3mm以下の赤褐色・にぶい橙色粒	塞ノ神	
271	深鉢	口縁部				A	沈線文、連続刺突文、撚糸文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な灰白色・白黄色粒	塞ノ神	
272	深撥	胴部				SA2	沈線文、竹管刺突文、撚糸文（充填）	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の灰白色粒	塞ノ神	スス付着
273	深鉢	口縁部				SA7	沈線文、縄文（充填）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の淡黄・無色透明光沢粒、にぶい褐色・黒色粒	塞ノ神	
274	深鉢	胴部				A	沈線文、撚糸文（充填）	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	5mm以下の灰黄粒、4mm以下のにぶい黄橙色粒、2.5mm以下の明黄褐色粒	塞ノ神	
275	深鉢	胴部				A	沈線文、沈線文(鋸歯状)、撚糸文（充填）	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	5mm以下の灰白色粒、2mm以下の黒色・無色透明光沢粒	塞ノ神	指頭痕
276	深鉢	胴部				A	沈線文、撚糸文（充填）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の無色透明光沢粒・灰白色粒	塞ノ神	
277	深鉢	胴部				A	網目状撚糸文	ナデ	にぶい黄	にぶい黄橙	4mm以下の灰褐色・灰白色・褐色・黒色光沢粒	塞ノ神	
278	深鉢	胴部				A	沈線文、ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい橙	3mm以下の橙色・黒色粒、微細な灰白色・褐灰色粒	塞ノ神	
279	深鉢	頸部				SE2	貝殻押引文	ナデ	浅黄	にぶい黄橙	6mmの灰白色粒、2mm以下の灰白色・橙色粒	塞ノ神	
280	深鉢	胴部				A	沈線文	風化著しい	にぶい褐	にぶい橙	2mm以下の黒色粒、1mm以下の灰白色・無色透明光沢粒	塞ノ神	
281	深鉢	口縁部				A	沈線文、刻目文、刻目（口唇）	ナデ	橙・褐	にぶい褐	4mm以下の褐色・灰白色粒	平栫？	
282	深鉢	口縁部				A	沈線文（波状）、刻目（口唇）	風化著しい	にぶい褐	褐	5mm以下の淡黄色、3mm以下の灰白色・黄灰色・黒色粒	平栫？	指頭痕
283	深鉢	口縁部				A	撚糸文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の灰白色・褐色粒	撚糸文	指頭痕
284	深鉢	口縁部				SE3	撚糸文、刻目（口唇）	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	微細な灰白粒	撚糸文	
285	深鉢	胴部				A	撚糸文	ナデ	黒褐	にぶい黄橙	5mm以下の褐色粒、3mm以下の灰白色粒	撚糸文	指頭痕
286	深鉢	口縁部				(SC45)	撚糸文、条痕	ナデ	にぶい褐	橙	3mm以下の灰白色・黄灰色・黒色光沢粒	撚糸文	
287	深鉢	胴部				SA8	撚糸文、ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰色・褐色粒、0.5mm以下の無色透明光沢粒	撚糸文	
288	深鉢	口縁部				SA8	縄文、縄文（口唇）	縄文、ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	2mm以下の灰白・黒色光沢（柱状）粒	縄文	
289	深鉢	胴部				SE2	縄文	ナデ	浅黄・黄橙	淡黄	2mm以下の灰白・淡黄・黒色光沢・無色透明光沢粒	縄文	指頭痕？
290	深鉢	口縁部				SA1	縄文、押圧刻（口唇）	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰白・褐色粒	縄文	赤色顔料か？
291	深鉢	胴部				SA1	縄文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰白・淡黄色粒	縄文	99と同一固体
292	深鉢	口縁部～胴部				A	貝殻刺突文、楔形突帯	ナデ？	にぶい褐	橙	1mm以下の灰白・無色透明光沢粒	知覧	角筒土器

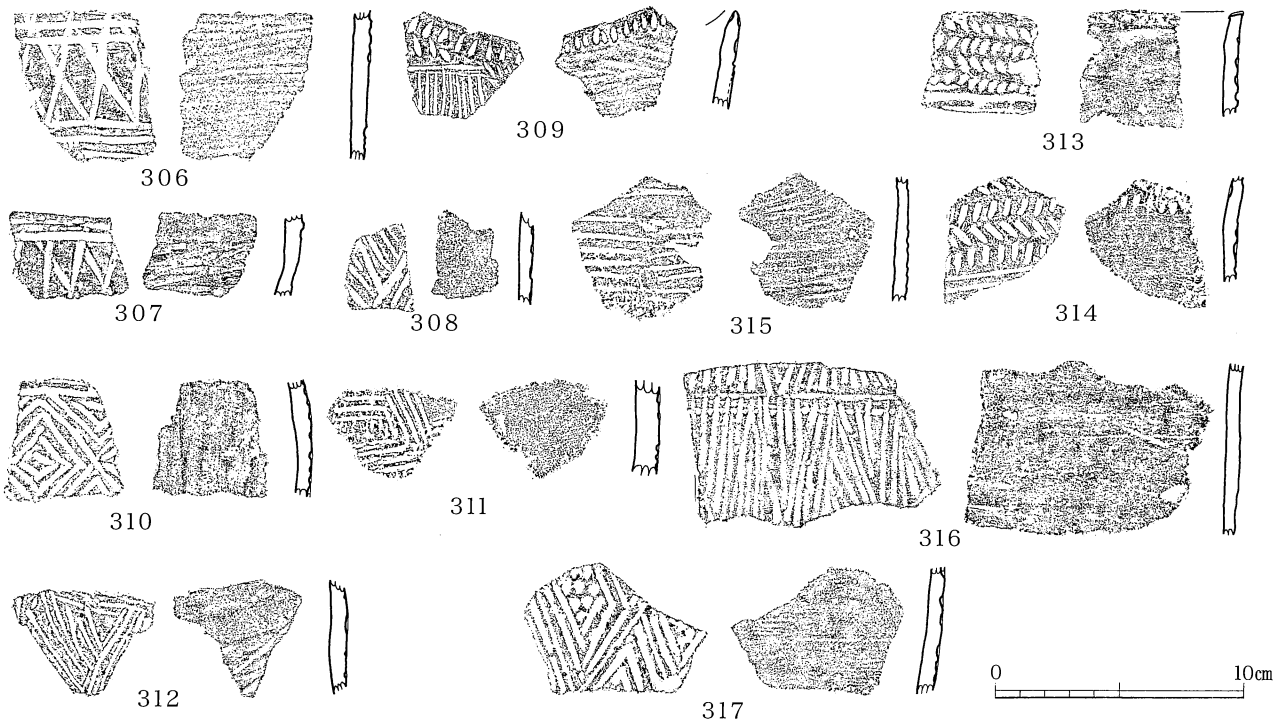
②　縄文時代前期の土器

293～305はⅤ類に相当する縄文土器である。293は外面に縦方向に貝殻条痕文が施されたあと、上部に斜方向に貝殻条痕文を施し、口縁部は横方向に貝殻条痕を施している。口唇部には刻目をもち、器壁はやや厚い。294・295は内外面に貝殻条痕をもち、器壁はやや厚い。縄文時代前期の土器に含んでいるが縄文時代早期の土器の可能性もある。296は上部に斜方向の貝殻条痕を施し、口縁部付近には横方向の貝殻条痕を施している。口唇部には刻目をもつ。293に近いタイプの土器である。297～301は外面に貝殻条痕文（条痕）を持つ土器である。298は口縁部付近に微隆起線文ももつ。298・299は文様や胎土の様子から同一個体の可能性がある。302～305は内面を貝殻条痕（条痕）で調整し、外面に突帯を貼り付ける。

306～317はⅥ類に相当する縄文土器である。306・307は外面に「―」「／」「＼」方向の沈線で文様を描き、内面は条痕・ナデで調整している。308は外面に「／」「＼」方向の沈線文を施している。309は口縁部の外面に刺突による羽状文を施し、下部に縦方向の沈線をもつ。口縁部付近の内面に刺突文を施す。310・311は沈線により四角文を施す。器壁は310はうすく、311はやや厚い。312は沈線による三角文を施し、器壁はうすい。306～312には胎土に滑石が含まれない。313・314は外面に羽状文を施すが、313は刺突により、314は短沈線による。315は外面に沈線文を横方向に施す。316は外面に沈線文を横方向に施したのち縦方向に施している。317 は沈線による菱形文に刺突文を充填している。313～317は胎土に滑石が含まれている。



第54図　縄文土器実測図（10）



第55図　縄文土器実測図（11）

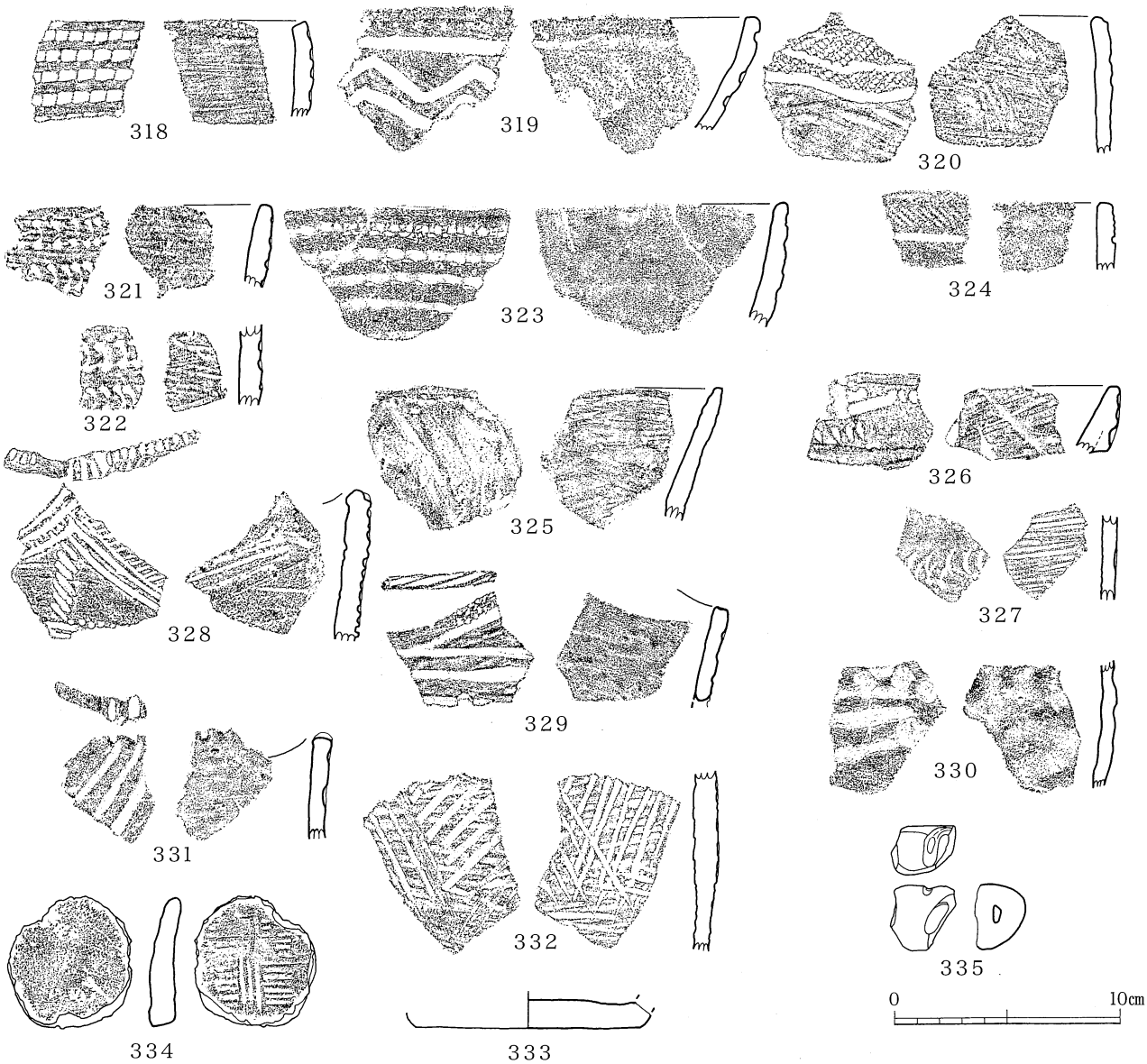
第23表　縄文土器観察表（5）

法量＝cm

遺物番号	器種	部位	法量 口径	法量 底径	法量 器高	出土位置	手法・調整・文様ほか 外面	手法・調整・文様ほか 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考	
293	深鉢	口縁部				A	条痕文、押圧刻（口唇）	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	1㎜以下の灰白・黄灰褐粒	鎌石橋	
294	深鉢	口縁部				トレンチB	貝殻条痕、ナデ	貝殻条痕	橙	橙	1㎜以下の灰白・橙色粒	轟	
295	深鉢	口縁部				B	貝殻条痕文、ナデ（口唇）	貝殻条痕	にぶい赤褐	にぶい赤褐	2㎜以下の褐色・灰白色粒、1㎜以下の黒色・褐灰・灰褐・にぶい黄褐色粒	轟	
296	深鉢	口縁部				SA8	貝殻条痕文、刻目（口唇）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	1㎜以下の灰白色・無色透明光沢・黒色透明光沢	轟	指頭痕
297	深鉢	胴部				SE2	貝殻条痕文	ナデ	浅黄	にぶい褐	1㎜以下の灰白・黒色透明光沢・黒色光沢粒	轟	貝殻条痕文
298	深鉢	口縁部				B	微隆起線文、貝殻条痕	貝殻条痕	灰褐	灰褐	4㎜以下の灰白色粒、2㎜以下の柱状黒色光沢粒	轟	154と同一個体
299	深鉢	胴部				B	貝殻条痕文	貝殻条痕、ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	5㎜以下の灰白・白色粒、2㎜以下の柱状黒色光沢粒	轟	スス付着
300	深鉢	胴部				A	沈線文、貝殻条痕文	貝型条痕、ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の乳白色・褐灰白色・金色光沢粒	轟	指頭痕
301	深鉢	胴部				A	貝殻条痕、ナデ	貝殻条痕、ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の褐・灰白色粒	轟	条痕文
302	深鉢	胴部				A	貼付突帯文、ナデ	条痕、ナデ	にぶい黄橙	褐灰	3㎜以下の灰白・橙色粒、2㎜以下の無色透明光沢粒、微細な金色光沢粒	轟	
303	深鉢	胴部				A	貼付突帯文、貝殻条痕、ナデ	貝殻条痕、ナデ	にぶい橙・褐灰～黒変	褐	4㎜以下の橙・灰白・黒色光沢粒	轟	
304	深鉢	胴部				A	貼付突帯文、貝殻条痕、ナデ	貝殻条痕、ナデ	浅黄・にぶい褐	にぶい橙	5㎜以下の灰褐色粒、3㎜以下の灰白・にぶい赤褐色・無色透明光沢粒	轟	
305	深鉢	口縁部				A	貼付突帯、横ナデ	貝殻条痕、ナデ	にぶい橙	黄褐	3㎜以下のにぶい褐色粒、2㎜以下の浅黄橙・灰白・黒色光沢（柱状）粒	轟	
306	深鉢	胴部				A	沈線文（＼／一方向）	条痕、ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3㎜以下の淡黄色粒	曾畑	
307	深鉢	胴部				A	沈線文（＼／一方向）	条痕、ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	5㎜以下の灰褐色・灰黄色粒	曾畑	
308	深鉢	胴部				SC	沈線文（＼／方向）	ナデ	褐灰	にぶい黄橙	2㎜以下の灰白粒、1㎜以下の無色透明光沢粒	曾畑	スス付着
309	深鉢	口縁部				トレンチ3	羽状（刺突）文、沈線文	刺突（口唇）、貝殻条痕	にぶい赤褐	褐灰	2㎜以下の灰白・橙・無色透明光沢・黒色光沢粒	曾畑	
310	深鉢	胴部				A	四角（沈線）文	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	4㎜以下の灰白色粒、2.5㎜以下の柱状黒色光沢粒	曾畑	
311	深鉢	胴部				SA6	四角（沈線）文	ナデ	にぶい橙	明褐	4㎜以下の灰白色・黄褐色・灰褐色粒	曾畑	
312	深鉢	胴部				A	三角（沈線）文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	3㎜以下の灰白色粒、2.5㎜以下のにぶい赤褐色粒、2㎜以下の浅黄橙色粒	曾畑	
313	深鉢	口縁部				A	羽状（刺突）文、沈線文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	4㎜以下で金色光沢粒、微細な褐色粒、滑石入り	曾畑	
314	深鉢	口縁部～胴部				SA4	羽状（刺突）文、沈線文	押引文、ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	3㎜以下の褐色・金色・銀色光沢粒、滑石入り	曾畑	
315	深鉢	胴部				SA4	沈線文	貝殻条痕	にぶい黄橙	にぶい橙	1.5㎜以下の灰白・黄灰・金・銀色光沢粒、滑石入り	曾畑	
316	深鉢	頸部～胴部				A	沈線文	横ナデ	にぶい橙	橙	滑石入り	曾畑	
317	深鉢	胴部				A	沈線文（菱形？）、刺突文	横ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	4㎜以下の金色光沢粒、1㎜以下の灰白・褐色粒、滑石入り	曾畑	

③　その他の時期の縄文土器

318～335はⅦ類の縄文土器である。器壁がうすく、焼成も良好なものが多い。318は外面に連続押引文を施し、内面は貝殻条痕で調整する。319は外面にやや幅広の沈線を直線と波線で横方向に施す。器形はキャリパー形と考えられる。320は外面の口縁部付近に縄文を施し、その後に幅の異なる沈線を２条引く。外面下部と内面には条痕による調整が見られる。321・322は同一個体の可能性があり、外面に竹管様工具による押引文を施し、内面には条痕による調整が残る。323は工具は不明であるが５条の押引文を残す。324は口縁部付近に縄文を施し、その下部に沈線を１条引く。325は内外面ともに条痕のちナデ調整である。326は外面にやや幅広の沈線・連続刺突を施す。内面は条痕により調整する。口縁部の外面側に粘土を貼り付け、断面は三角形をしている。327は外面に爪形文を施し、内面は貝殻条痕を残す。328は波状口縁をもつ深鉢である。外面は沈線文・短沈線・連点文を施し、内面にも沈線が残る。口唇部にも短沈線・刺突が残る。329は外面にやや幅広の沈線文・貝殻連続刺突文、口唇部に沈線をもつ。波状口縁であり、下部に円形の穿孔が残る。330は外面に幅広の沈線



第56図　縄文土器実測図（12）

（凹線）を施す。明瞭な指頭圧痕が外面に残る。331は外面に斜方向の幅広の沈線を施し、口唇部に押圧刻をもつ。波状口縁である。332は内外面ともに貝殻条痕のちに沈線文を施す。333は平底の底部である。器壁はやや厚い。334は円盤である。外面に縦方向のち横方向の条痕を施した土器片を加工転用している。335は橋状取手である。形状はD字形をしており、長楕円形の穴を形成するように器面に貼り付けてあったと思われる。取手の上部には溝が残る。これらの土器の時期は318・321～323・332は縄文時代前期（末）～中期、319は縄文時代中期、320・324・326～331・335は縄文時代後期と考えられる。

第24表　縄文土器観察表（6）

法量＝cm

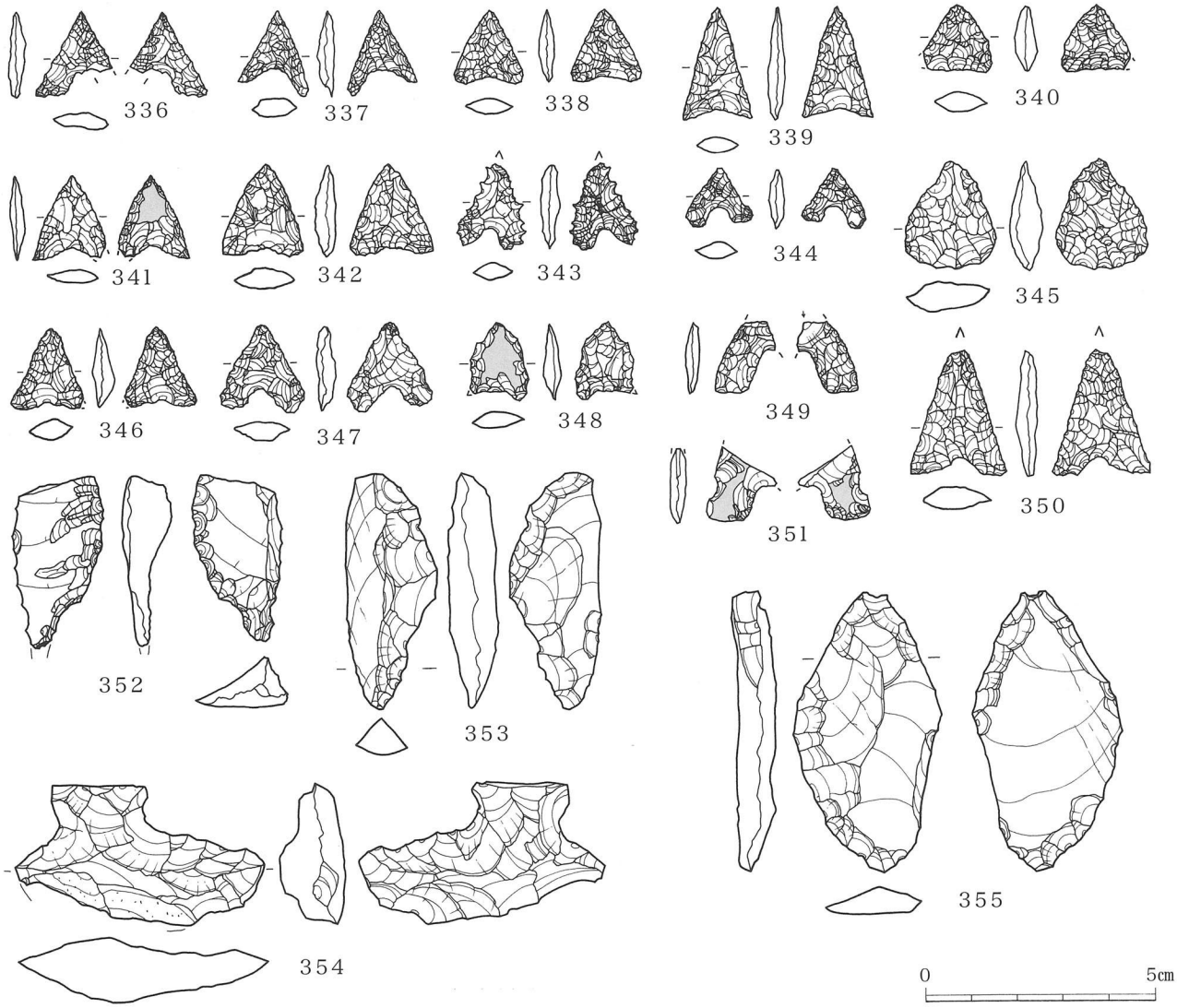
遺物番号	器種	部位	法量			出土位置	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考	
			口径	底径	器高		外面	内面	外面	内面			
318	深鉢	口縁部				A	連続押引文、ナデ	貝殻条痕、ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	2mm以下の黒色光沢（柱状）・橙・褐灰・浅黄粒、1mm以下の灰白粒		口唇（施文痕跡）
319	深鉢	口縁部				SH	沈線文、ナデ	ナデ	黄褐	黄褐	3mm以下の灰白・黄灰色粒		
320	深鉢	口縁部				トレンチ3	沈線文、縄文、条痕、ナデ	条痕	赤褐	赤褐	3.5mm以下の灰白・褐灰・浅黄橙粒、2mm以下の金色粒	磨消縄文	
321	深鉢	口縁部				A	押引文(竹管様工具)、条痕、ナデ	条痕、ナデ	にぶい橙	灰黄褐	3mm以下の灰白色・灰褐色粒		
322	深鉢	胴部				A	押引文(竹管様工具)、条痕、ナデ	条痕、ナデ	にぶい橙	にぶい橙	4mm以下の灰白色・褐色粒		
323	深鉢	口縁部				SE3	押引文（貝殻？）	ナデ	暗褐	にぶい黄褐	6mm大の灰白粒、2.5mm以下の灰白・浅黄・黒色光沢粒		
324	深鉢	口縁部				トレンチ3	縄文、沈線文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	3mm以下の灰白粒、2mm以下の淡黄・黄灰粒	磨消縄文	
325	深鉢	口縁部				SE2	貝殻条痕のちナデ	条痕、ナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	2.5mm以下の灰白色・浅黄色・褐灰・にぶい赤褐色粒、微細な淡黄色・灰白色粒		
326	深鉢	口縁部				トレンチ13	沈線文、連続刺突文	条痕、ナデ	浅黄	黄灰	3mm以下のにぶい橙色粒、2mm以下の灰白・褐灰色粒		
327	深鉢	胴部				トレンチ3	半裁竹管文、ナデ	貝殻条痕	にぶい橙	にぶい赤褐	3mm以下の灰白色粒、微細な無色透明光沢粒		
328	深鉢	口縁部				A	沈線文、短沈線文、連点文、沈線（口唇）・刻目（口唇）	条痕、ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の黄褐・灰白粒を含む		後期土器（船元？）
329	深鉢	口縁部				SE3	沈線文（／一方向）、刺突文（貝殻）、沈線文（口唇）	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	3mm以下の淡黄色粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒		穿孔あり
330	深鉢	胴部				SE3	沈線文（凹線）、指頭圧痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰白色・褐色粒		指頭痕、スス付着
331	深鉢	口縁部				SE3	沈線文（／方向）、押圧刻（口唇）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の褐色・灰白色粒		
332	深鉢	胴部				トレンチ3	貝殻条痕のち沈線文	貝殻条痕のち沈線	明赤褐	にぶい橙	5mm以下の灰白色粒、2mm以下の無色半透明・灰色・無色透明光沢粒		
333	深鉢	底部		(10.0)		A	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	2mm以下の褐色・乳白色粒		
334		円盤				A	条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3.5mm以下の浅黄色粒、1.5mm以下の柱状黒色光沢粒、1mm以下の灰白色粒		指頭痕
335		橋状取手				SA5	ナデ	（剥落面）	にぶい橙		2mm以下の灰白色・茶褐色粒		

6　縄文石器

石器は試掘調査・確認調査の結果より、縄文時代の石器（以下、縄文石器と記述する。）・旧石器などが主に出土することが予想された。縄文石器は、まず、石錘・石斧類などが表面採集できた。表土を剥ぐと第Ⅲ層や散礫・集石遺構・土坑などの遺構から石鏃・石錘・磨石・敲石などが出土した。これらの石器は縄文土器と同様の理由により、原位置を保持していない石器も多かった。本遺跡での縄文石器の出土・採集は、縄文土器と同じく縄文時代の遺構・縄文包含層・古墳時代以降の遺構・耕作土（造成土を含む）・地表面などに大別される。

縄文石器は『石材』を観点にして分類した。分類の観点を器種でなく、石材としたのは、使用した石材により、時期差が見出される可能性あることが考えられたからである。

石材はチャート・黒曜石（岩）・尾鈴山酸性岩・ホルンフェルス・頁岩・砂岩などに分類することができる。全体を分類してみると、比較的小型な石器（小型石器）はチャート・黒曜石・安山岩などを使用し、大型の石器（大型石器）は尾鈴山酸性岩・ホルンフェルス・頁岩・砂岩などを使用していた。なお、石材の分類は肉眼による観察を中心にし、一部、双眼実体顕微鏡を用いた。分類の基準については後述する。

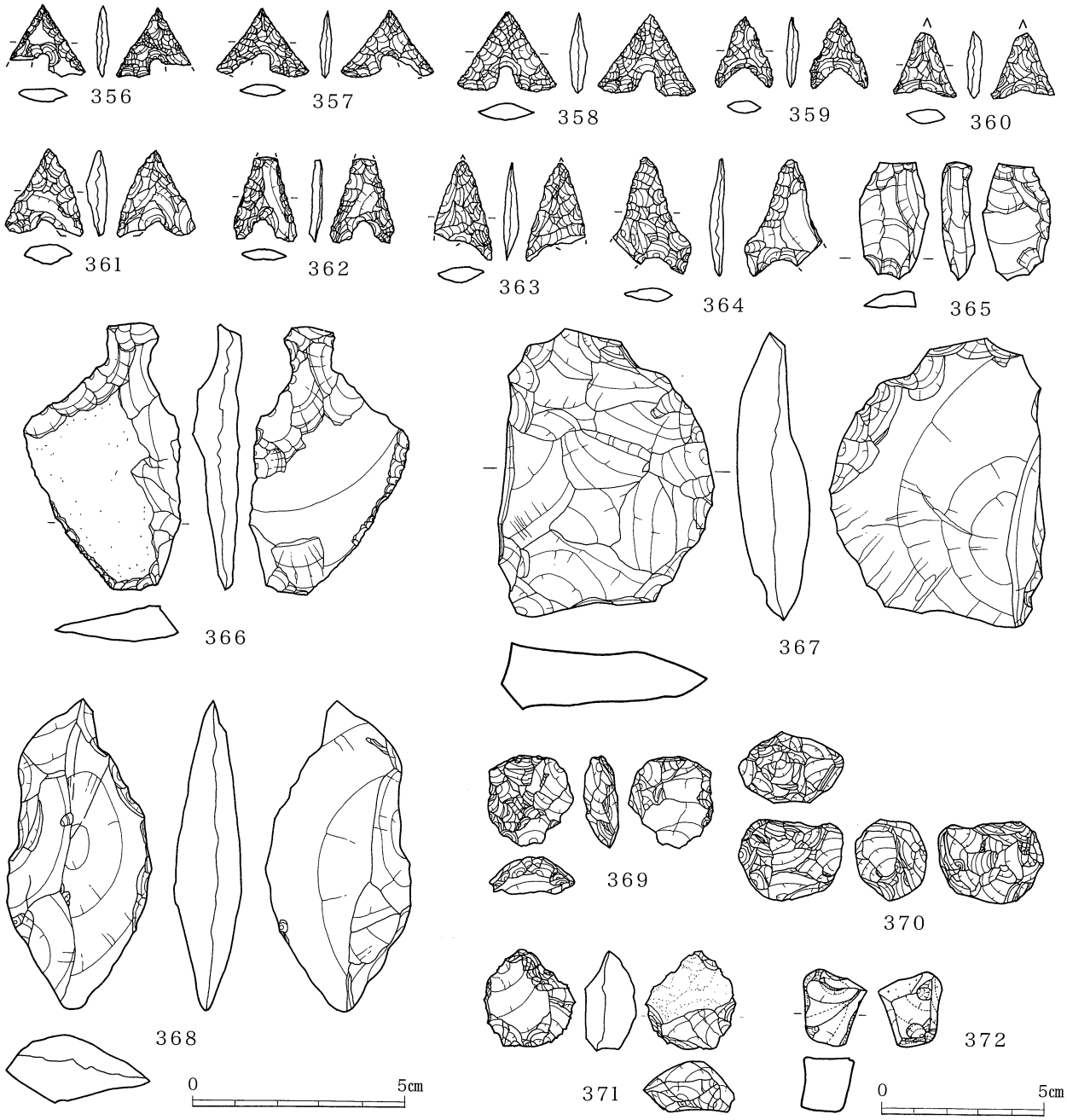


第57図　チャート製石器群実測図

掲載した縄文石器は210点である。掲載順は①チャート製石器群、②黒曜石・安山岩他製石器群、③姫島産黒曜石・ハリ質安山岩製石器群、④尾鈴山酸性岩・凝灰岩製石器群（スクレイパー・剥片類）、⑤ホルンフェルス製石器群（石核・スクレイパー類他）、⑥ホルンフェルス・頁岩製石器群（石斧類）、⑦砂岩・頁岩製石器群（石錘類）、⑧尾鈴山酸性岩・砂岩・頁岩製石器群（敲石類）、⑨尾鈴山酸性岩・砂岩・頁岩製石器群（磨石・砥石類）である。①～③が小型石器であり、④～⑨が大型石器である。縄文石器の器種・出土地点・サイズなどの詳細については「縄文石器観察表（1）～（4）」を作成した。なお、器種については不確定なものや不明なものもある。

①チャート製石器群

336～355はチャートを石材として使用している小型の石器群である。336～350は石鏃であるが、341と348は背面が部分的に磨かれている局部磨製石鏃であり、他は打製石鏃である。石鏃の形状はバリエーションに富んでおり、有脚～無脚・抉りの有～無・基部が平形～円形・サイズが比較的小～中などが観察できる。また、348は形状が五角形である。351はいわゆる「トロトロ石器（局部磨製異形石

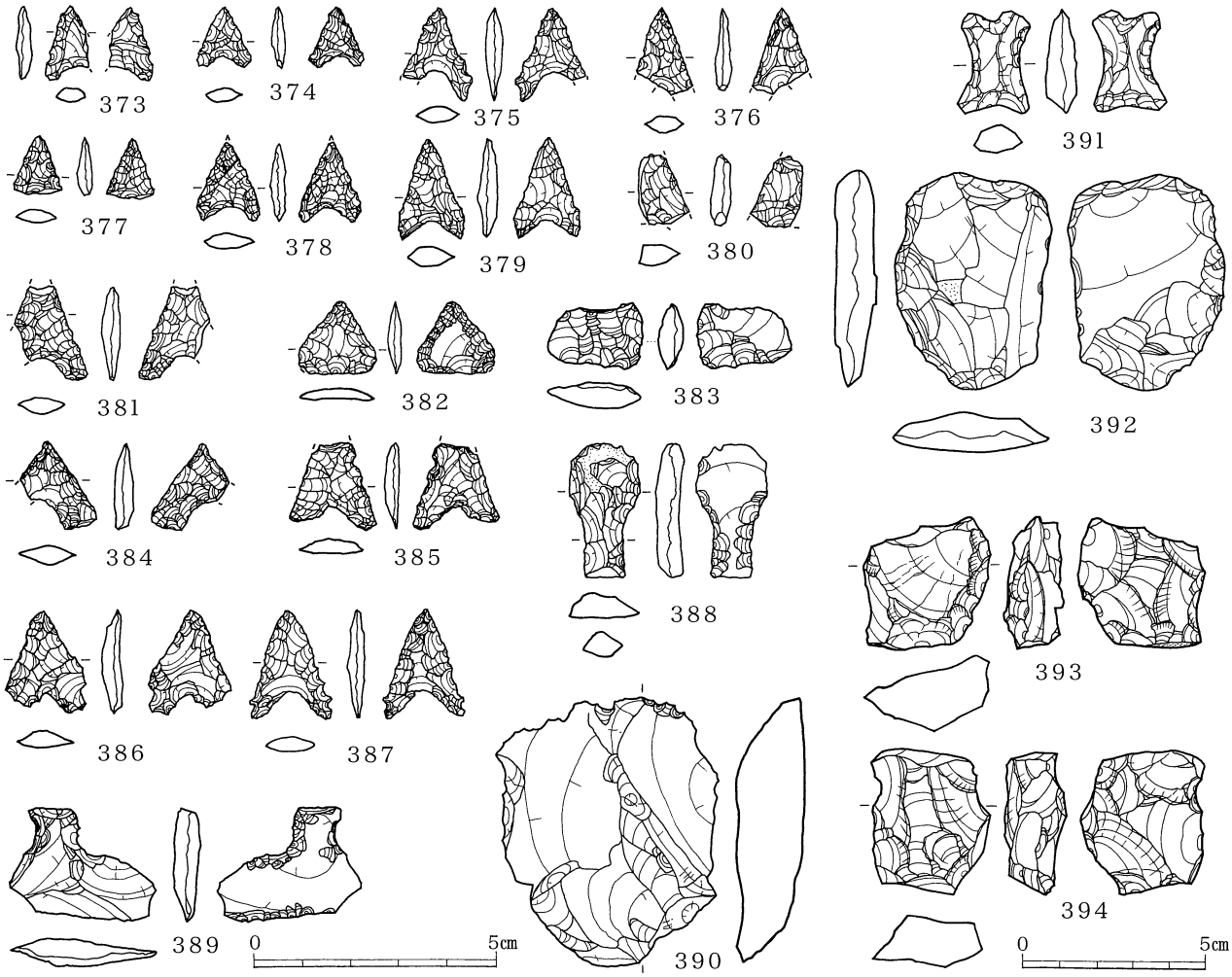


第58図　黒曜石・安山岩ほか製石器群実測図

器)」であり、脚部に相当すると考えられる。両面ともに部分的に磨かれている。352は石錐であり、錐部を欠いている。353はスクレイパーである。354は横長の石匙であり、下部が欠損している。355は石槍（尖頭器）の未製品と考えられる。このチャート製石器群には石核が見つからなかった。石核から剥片が剥離された状態または製品の状態で遺跡に持ち込まれたのかもしれない。

②黒曜石・安山岩ほか製石器群

356～372はチャート以外の黒曜石・安山岩などを石材として使用している小型の石器群である。356～364は打製石鏃である。356～358は形状が三角形で抉りをもつ。石材は356は腰岳産黒曜石、357は桑ノ木津留産黒曜石、358は白色珪岩である。359～364は安山岩またはサヌカイト（ガラス質安山岩）である。(安山岩類は石質から判断すると複数の産地が推定できる。）この石鏃群は有脚また



第59図　姫島産黒曜石製石器群実測図

は抉りがあるもので構成され、平基の石鏃が確認されなかった。364は欠損の様子から左右の脚の形状が著しく異なっていたことが推定できる。365は楔形石器であり、石材は白色珪岩である。366は石匙である。形状が縦長であり、石材はホルンフェルスである。367・368はスクレイパーで、いずれも半円形で鋭い刃部をもつ。石材は367は珪長岩、368はホルンフェルスである。369～371は石核である。石材は369は玉髄（めのう）、370は安山岩、371は小国産黒曜石、372は桑ノ木津留産黒曜石の原石と考えられる。

（③姫島産黒曜石・ハリ質安山岩製石器群以外の）複数産地の黒曜石あるいは安山岩（サヌカイト）はいずれも九州内外の遠隔地石材である。

③姫島産黒曜石・ハリ質安山岩製石器群

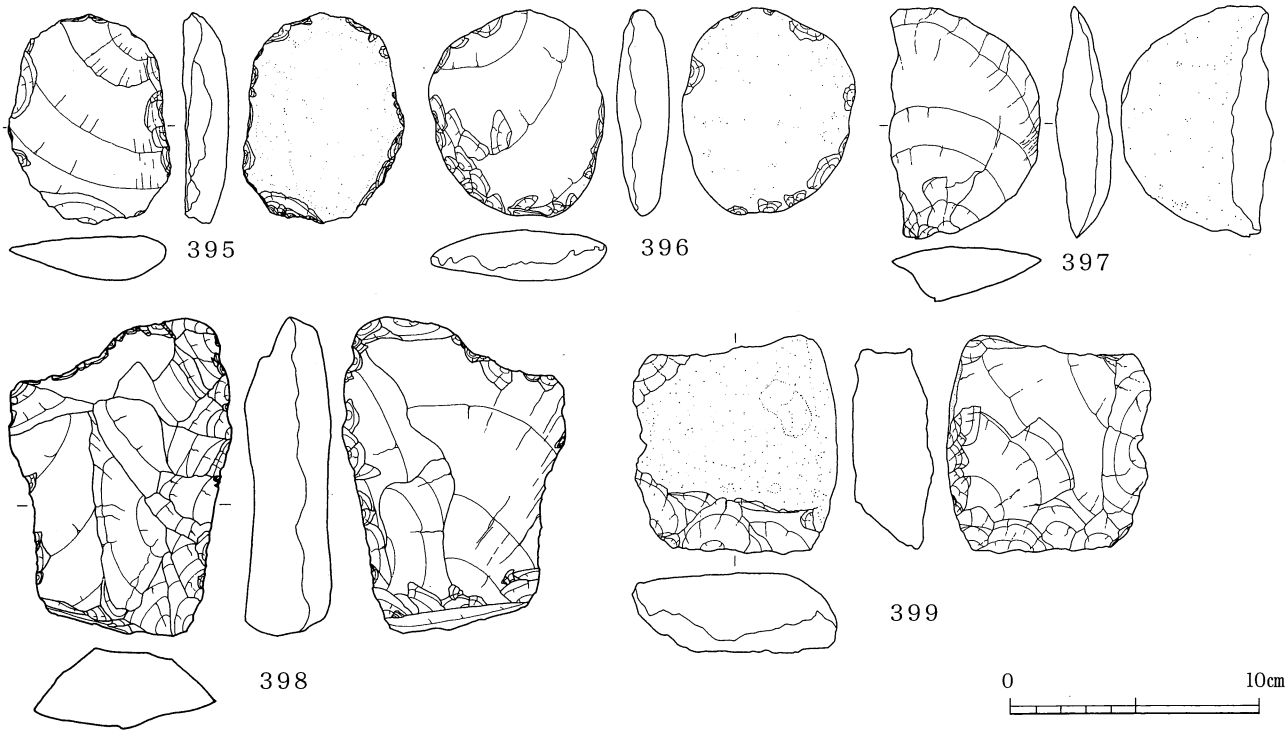
373～394は姫島産の黒曜石またはハリ質安山岩を石材として使用している小型の石器群である。このグループは②黒曜石・安山岩はか製石器群に含まれるべきであるが、出土数が他と比べて非常に多いので一群を設けることにした。373～387は打製石鏃である。形状はバリエーションに富んでいるが、①チャート製石器群、②黒曜石・安山岩ほか製石器群と比較すると小型のものが多く、側縁も鋸歯状を意識して加工されているものが多い。388は錐部が欠損しているが石錐と考えられる。頭部は円形であり、錐部の断面は菱形に近い。389は石匙である。形状は横長であり、354・366と比較する

とやはり小型である。390は表皮の除去に伴う剥片と推定される。表面は礫面（自然面）であり、一部先行剥離面が残される。391は異形石器である。中央部がくびれ、上端に抉り、下端には浅い抉りをもつ。石材はハリ質安山岩である。392はスクレイパーである。刃部を一側縁に設けている。石材はハリ質安山岩である。393・394は石核である。これらは表皮（自然面）の様子や剥離面の質感などから同一の母岩から剥離され、それぞれ石核として使用されたと推定される。姫島産の黒曜石の利用は本遺跡において突出しており、ハリ質安山岩も含めて東北九州からの流入があり、多用されていたことがわかる。

第25表　縄文石器観察表（1）

長・幅・厚＝cm　重量＝g

遺物番号	出土位置	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　材	備　考
336	A	石鏃	1.8	1.7	0.4	0.6	チャート	
337		石鏃	1.9	1.5	0.4	0.5	チャート	
338	A	石鏃	1.6	1.5	0.4	0.7	チャート	
339	SI26	石鏃	2.4	1.5	0.4	1.0	チャート	
340	SI8	石鏃	(1.5)	(1.5)	(0.5)	1.0	チャート	
341	散礫1	石鏃	1.8	1.5	0.3	0.7	チャート	局部的に磨かれる
342	A	石鏃	2.0	1.7	0.4	1.3	チャート	
343	SA2	石鏃	1.8	1.5	0.4	0.7	チャート	
344	A	石鏃	(1.3)	1.4	0.4	0.4	チャート	
345	SE3	石鏃	2.4	2.0	0.7	2.9	チャート	未製品か？
346	A	石鏃	1.7	1.6	0.5	1.9	チャート	
347	A・表採	石鏃	1.9	1.8	0.4	1.3	チャート	
348	SE2	石鏃	1.7	1.3	0.3	0.5	チャート	局部的に磨かれる、五角形
349	A	石鏃	(1.6)	(1.3)	(0.3)	0.5	チャート	
350	SE2	石鏃	(2.7)	2.1	0.5	1.9	チャート	
351	散礫1	トロトロ石器	(1.6)	(1.5)	(0.4)	0.8	チャート	
352	A	石錐	3.7	2.0	1.1	5.2	チャート	
353	A	スクレイパー	5.1	1.9	1.0	10.7	チャート	
354	A	石匙	6.4	1.5	1.1	17.2	チャート	354のみ緑色系、他は白黒の格子系
355	トレンチ3	尖頭器	6.1	3.2	0.9	16.2	チャート	
356	SA9	石鏃	(1.7)	(1.8)	0.3	0.4	腰岳産黒曜石	
357	A	石鏃	(1.6)	2.2	0.3	0.5	桑ノ木津留産黒曜石	
358	A	石鏃	1.9	2.3	0.4	1.0	白色珪岩	
359	A	石鏃	1.7	1.3	0.3	0.4	安山岩	
360	SA2	石鏃	(1.6)	1.5	0.4	1.3	安山岩	
361	SA4	石鏃	2.1	1.8	0.5	1.2	安山岩	
362	A・表採	石鏃	2.0	1.5	0.3	0.7	安山岩	
363	SA4	石鏃	2.3	1.4	0.4	0.7	安山岩	
364	散礫1	石鏃	(2.8)	(1.9)	0.3	1.2	安山岩	
365	SA5	楔形石器	2.7	1.7	0.6	3.3	白色珪岩	
366	SA7	石匙	3.0	5.4	1.4	18.1	ホルンフェルス	
367	A	スクレイパー	6.8	5.1	1.7	57.5	珪長岩	
368	A	スクレイパー	7.3	3.4	1.6	29.2	ホルンフェルス	
369	SA5	石核	2.8	2.6	1.1	7.6	玉髄	
370	SA5	石核	3.3	2.5	2.2	18.9	安山岩	
371	散礫2	石核	3.1	2.8	1.6	11.5	小国産黒曜石	
372	SA	原石	2.4	2.0	1.7	10.1	桑ノ木津留産黒曜石	表皮は滑らかで光沢がある
373	A	石鏃	(1.5)	(0.9)	(0.3)	0.3	姫島産黒曜石	
374	A	石鏃	1.3	1.1	0.3	0.3	姫島産黒曜石	
375	A	石鏃	(1.5)	(1.5)	0.4	0.5	姫島産黒曜石	
376	SC	石鏃	(1.8)	(1.2)	(0.4)	0.5	姫島産黒曜石	
377	A	石鏃	(1.3)	(1.0)	(0.3)	0.3	姫島産黒曜石	
378	SA5	石鏃	1.6	1.3	0.3	0.5	姫島産黒曜石	
379	A	石鏃	2.1	1.3	0.4	0.6	姫島産黒曜石	
380	散礫1	石鏃	(1.5)	(1.0)	(0.4)	0.7	姫島産黒曜石	
381	A	石鏃	(1.9)	(1.5)	(0.4)	0.8	姫島産黒曜石	
382	SE3	石鏃	1.5	1.7	0.3	0.5	姫島産黒曜石	
383	A	剥片	1.4	2.0	0.6	1.2	姫島産黒曜石	
384	散礫1	石鏃	(1.8)	(1.6)	(0.4)	0.7	姫島産黒曜石	
385	SC	石鏃	(1.8)	(1.8)	(0.3)	0.7	姫島産黒曜石	
386	SI8	石鏃	2.2	1.7	0.4	0.9	姫島産黒曜石	
387	SC43	石鏃	2.2	1.7	0.3	0.8	姫島産黒曜石	
388	SE3	石錐	2.8	1.5	0.6	2.2	姫島産黒曜石	
389	A	剥片	2.3	3.0	0.6	2.7	姫島産黒曜石	
390	A	剥片	5.6	4.6	1.4	31.8	姫島産黒曜石	
391	A	異形石器	2.1	1.5	1.1	1.9	ハリ質安山岩	
392	A	スクレイパー	4.5	3.3	0.9	15.3	ハリ質安山岩	
393	SE3	石核	3.6	3.5	1.6	18.8	姫島産黒曜石	
394	SE3	石核	4.0	3.4	1.7	18.6	姫島産黒曜石	



第60図　尾鈴山酸性岩類製石器群実測図

④尾鈴山酸性岩・凝灰岩製石器群（スクレイパー・剥片類）

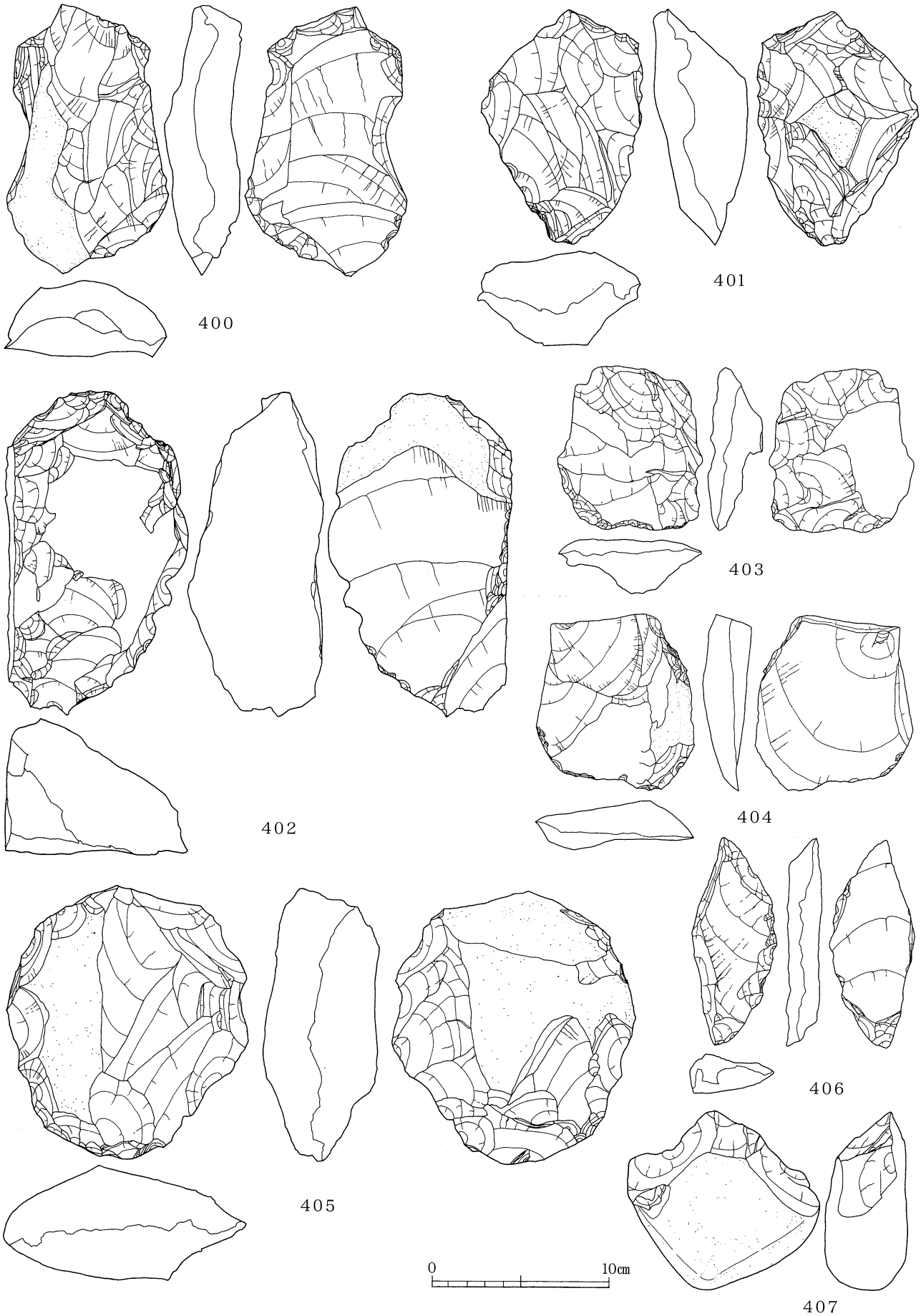
395～399は尾鈴山酸性岩・凝灰岩を石材として使用している大型の石器群である。395～397は表皮に伴う剥片と考えられる。395は除去後にも加撃されている。396はスクレイパーとしての用途があった可能性がある。397は母岩は磨石として利用されたていたのかもしれない。398は大型剥片が加工されているが器種・用途は不明である。399は表皮を利用したスクレイパーであり、二側縁を刃部としている。背面には弱い磨面がある。

⑤ホルンフェルス製石器群（石核・スクレイパー類）

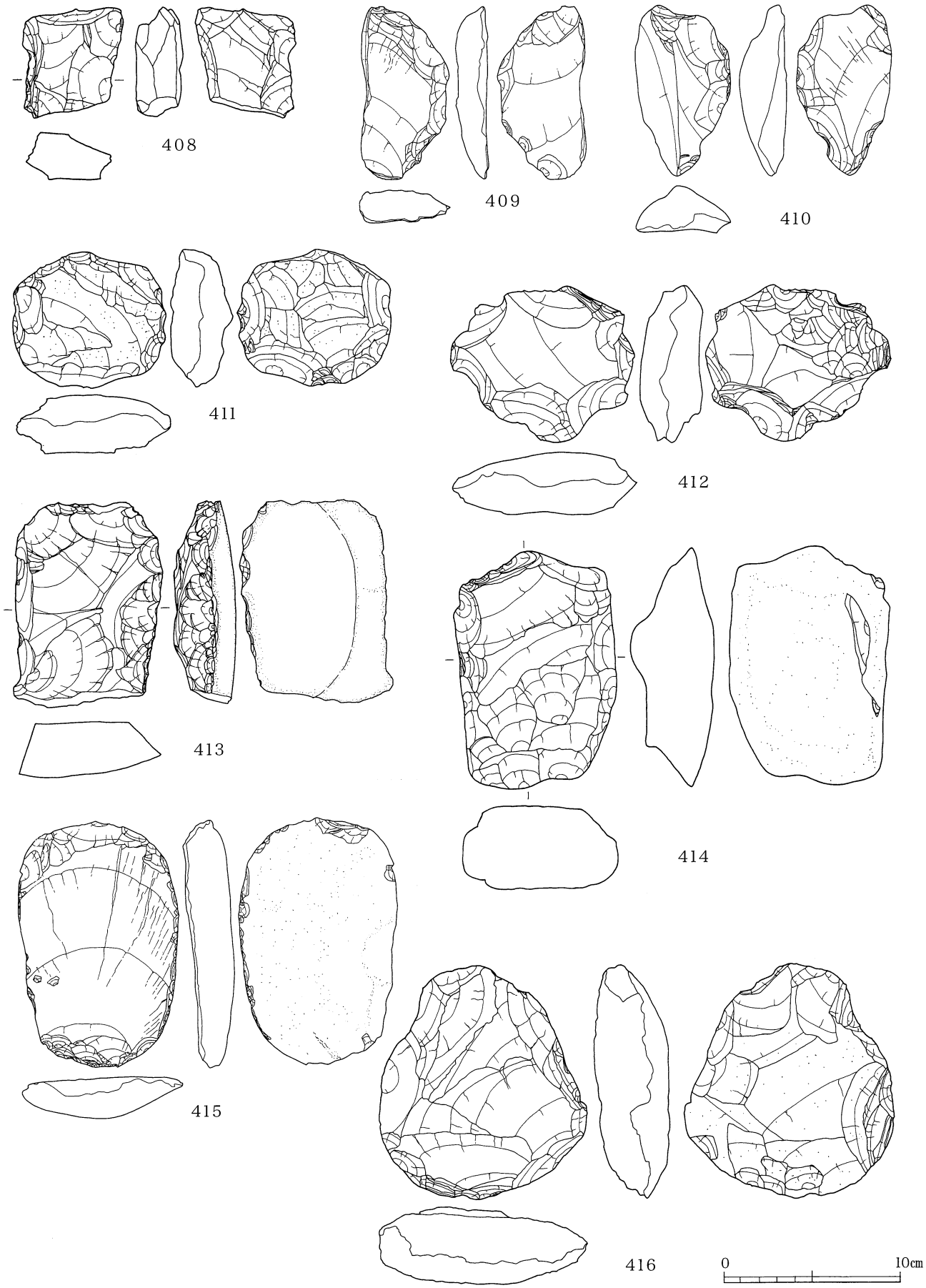
400～416はホルンフェルスを石材として使用している大型の石器群である。器種は石核・スクレイパー等に分類しているが形状や用途がはっきりとしないものもある。使用している石材および石材の質感は次の⑥石斧類とかなり近いことがわかる。石斧としての利用を前提とした未製品あるいは失敗品、石斧的に使用されたものが含まれているかもしれない。

⑥ホルンフェルス・頁岩製石器群（石斧類）

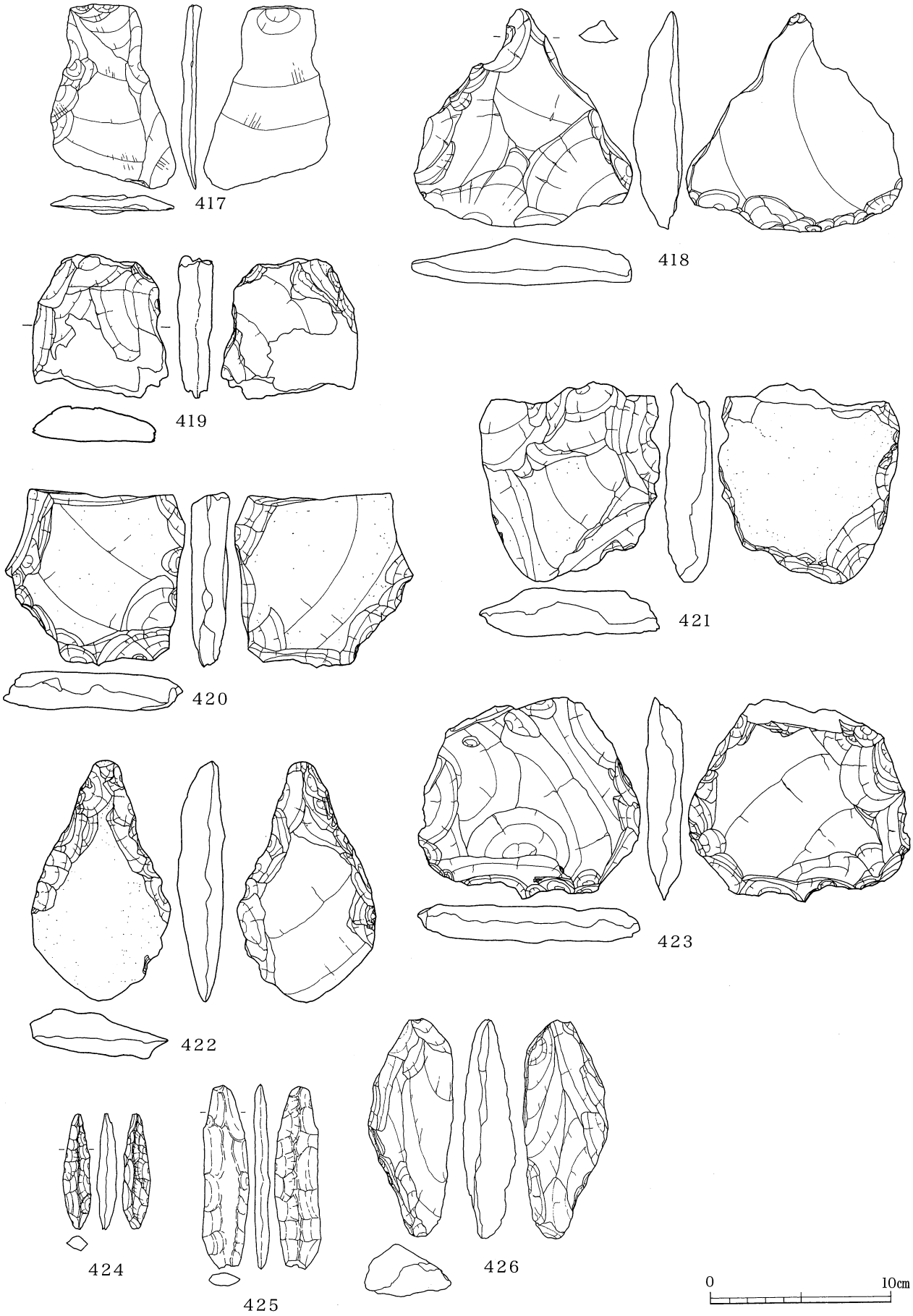
417～447はホルンフェルス・頁岩を石材として使用している石斧類（未製品等も含んでいる）、または石斧の可能性のある石器群である。観察表では器種を417は二次加工ある剥片、418～423は礫器に分類している。石斧類は刃部や基部等の形状や打製・磨製等の製作法などがバリエーションに富んでいるため、縄文石器計測表とは別に形状についての観察表（第26表　石斧類形状観察表）にまとめたので参照されたい。なお、石材の分類においてホルンフェルスと頁岩の境界はあいまいな部分があり、



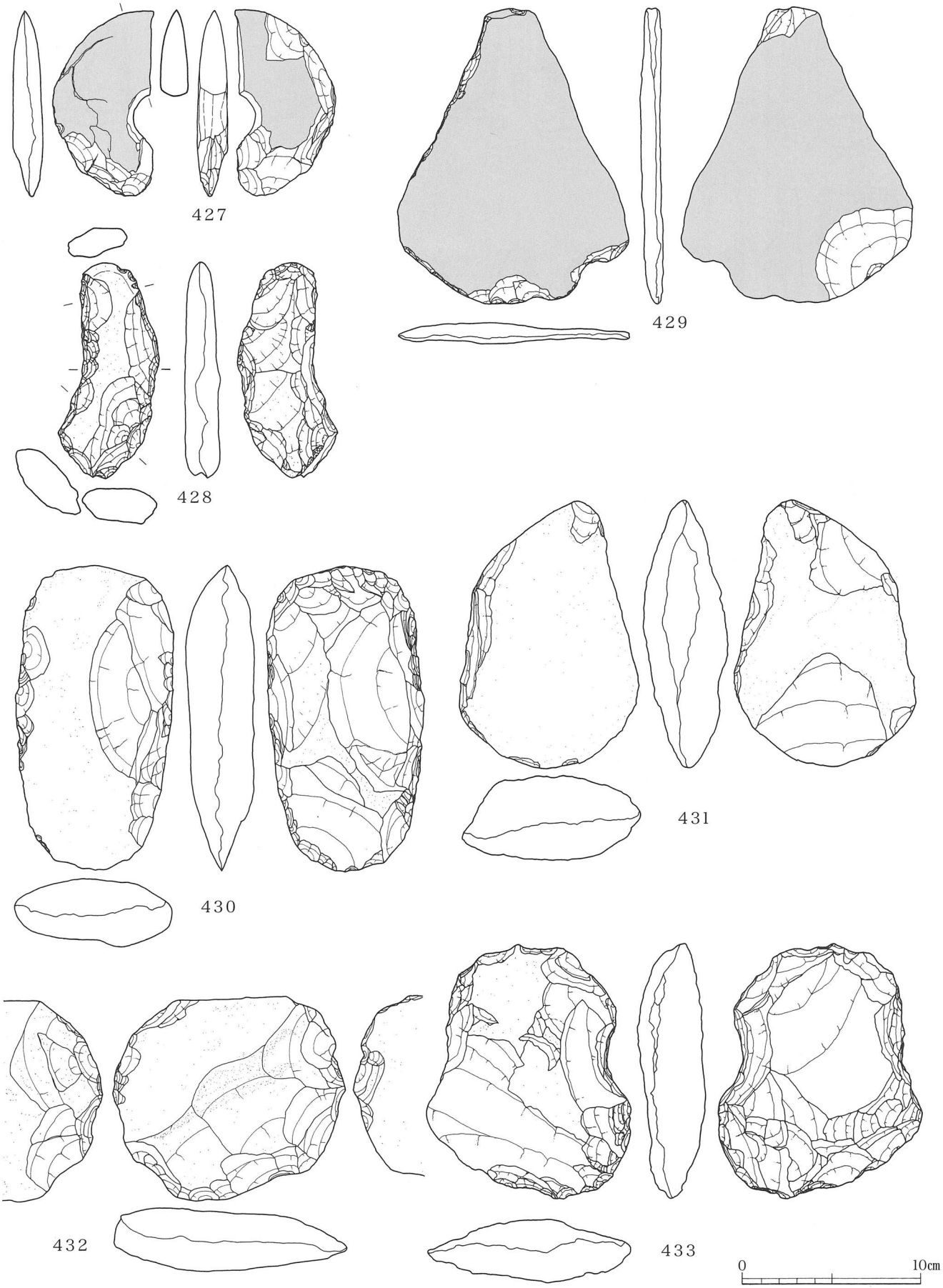
第61図　ホルンフェルス製石器群実測図（1）



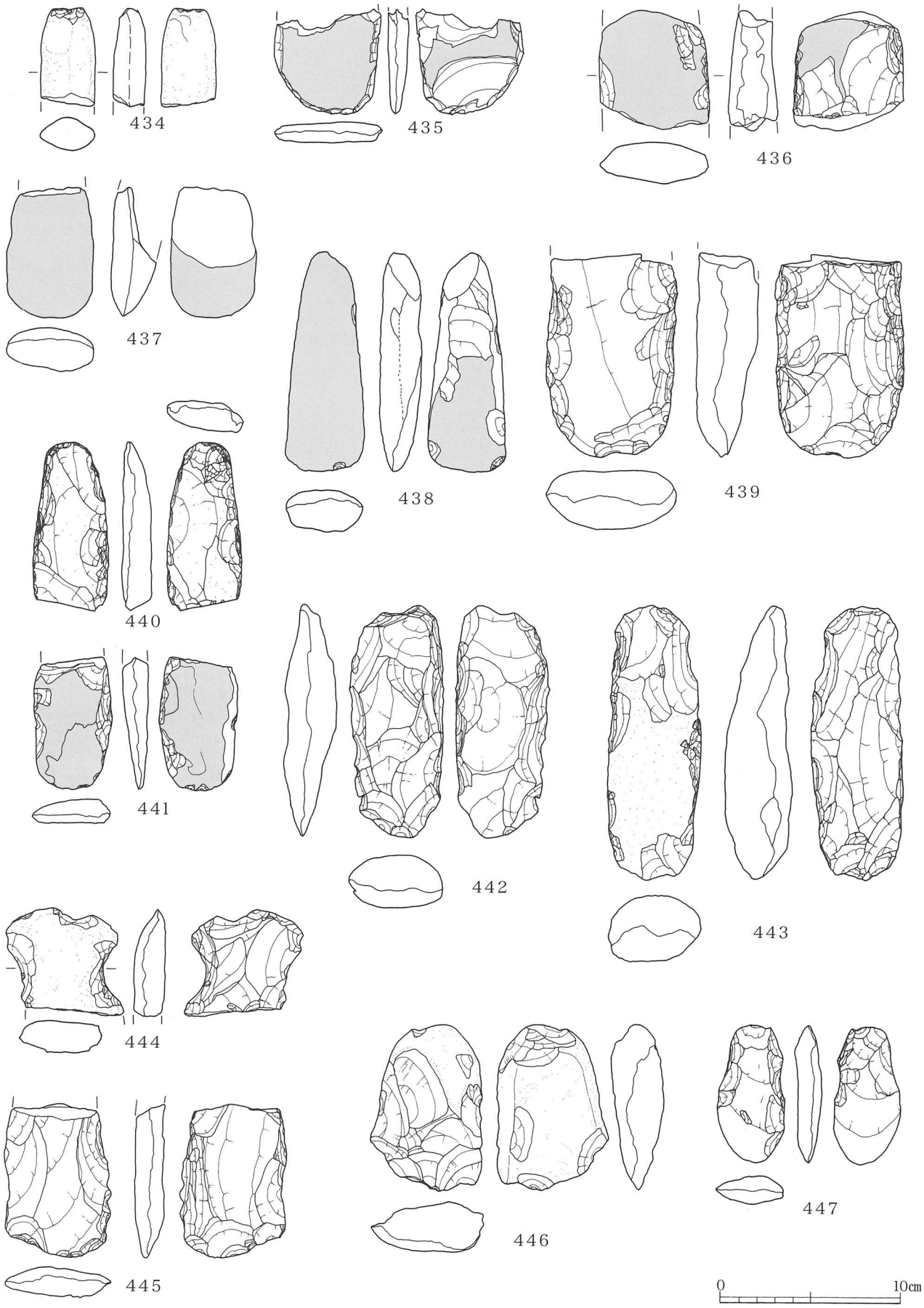
第62図　ホルンフェルス製石器群実測図（2）



第63図　ホルンフェルス・頁岩製石器群実測図（1）



第64図　ホルンフェルス・頁岩製石器群実測図（2）



第65図　ホルンフェルスほか製石斧類実測図

ここでもはっきりしないものがある。また、石斧類は縄文時代の遺物として掲載したが、一部は弥生時代以降と考えられるものが含まれている可能性がある。

第26表　石斧類形状観察表

遺物番号	素材	技法	刃形状1	刃形状2	基部形状	石　質	備　考
427	剥片	磨製	両刃	円盤状刃		やや硬い	環状石斧
428	礫	打製			曲がっている	硬い	
429	剥片	打製？	両刃	円刃	狭くなっている	硬いが表面は剥落多い	厚さは非常にうすく、扇状に側縁が開く
430	礫	打製	片刃	円刃		硬い	石斧未製品、図のドット面はツブレ
431	礫	打製	片刃	円刃	尖っている	表面は風化、剥落多い	刃部磨痕
432	剥片	打製	両刃	円刃		硬いが表面は剥落	
433	礫	打製	片刃	斜刃	抉りがある	やや硬い	
434	礫	磨製？				硬い	打欠石錘の可能性あり
435	剥片	磨製	片刃	円刃		やや硬い	厚さは非常にうすい
436	礫	磨製				やや硬い	
437	礫	磨製	片刃	円刃		やや硬い	
438	礫	磨製	両刃	円刃		硬い	
439	礫	打製	片刃	円刃		硬い	未製品か？
440	剥片	打製			両頭に刃をもつ？	硬い	厚さはうすい
441	剥片	局部磨製	両刃	円刃		脆い	厚さはうすい
442	剥片	打製	両刃	円刃		脆い	刃部弱い磨痕
443	礫	打製				硬い	刃部はやや「のみ状」
444	礫	打製			抉りがある	硬い	有肩打製石斧、弥生以降か？
445	剥片	打製	片刃	円刃		脆い	厚さはうすい
446	礫	局部磨製	片刃	直刃？		硬い	礫器的な刃部
447	礫	磨製	片刃	円刃	弱い抉りがある	硬い	厚さはうすい

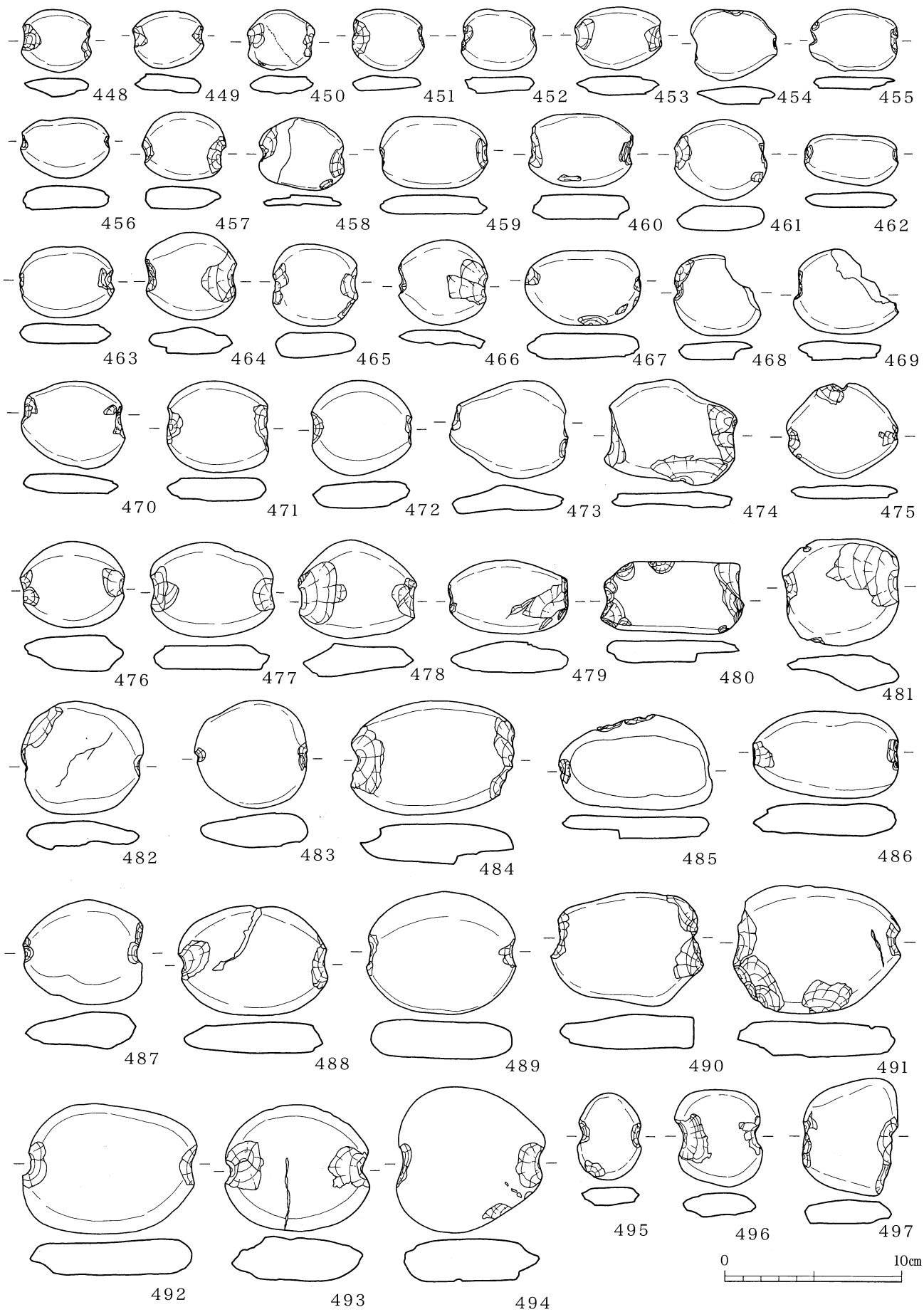
※　石質（硬さ）については、触感と叩いたときの「音の高低・清濁」も考慮した。
また、刃形状の判断についてはあいまいな部分がある。

⑦砂岩・頁岩製石器群（石錘類）

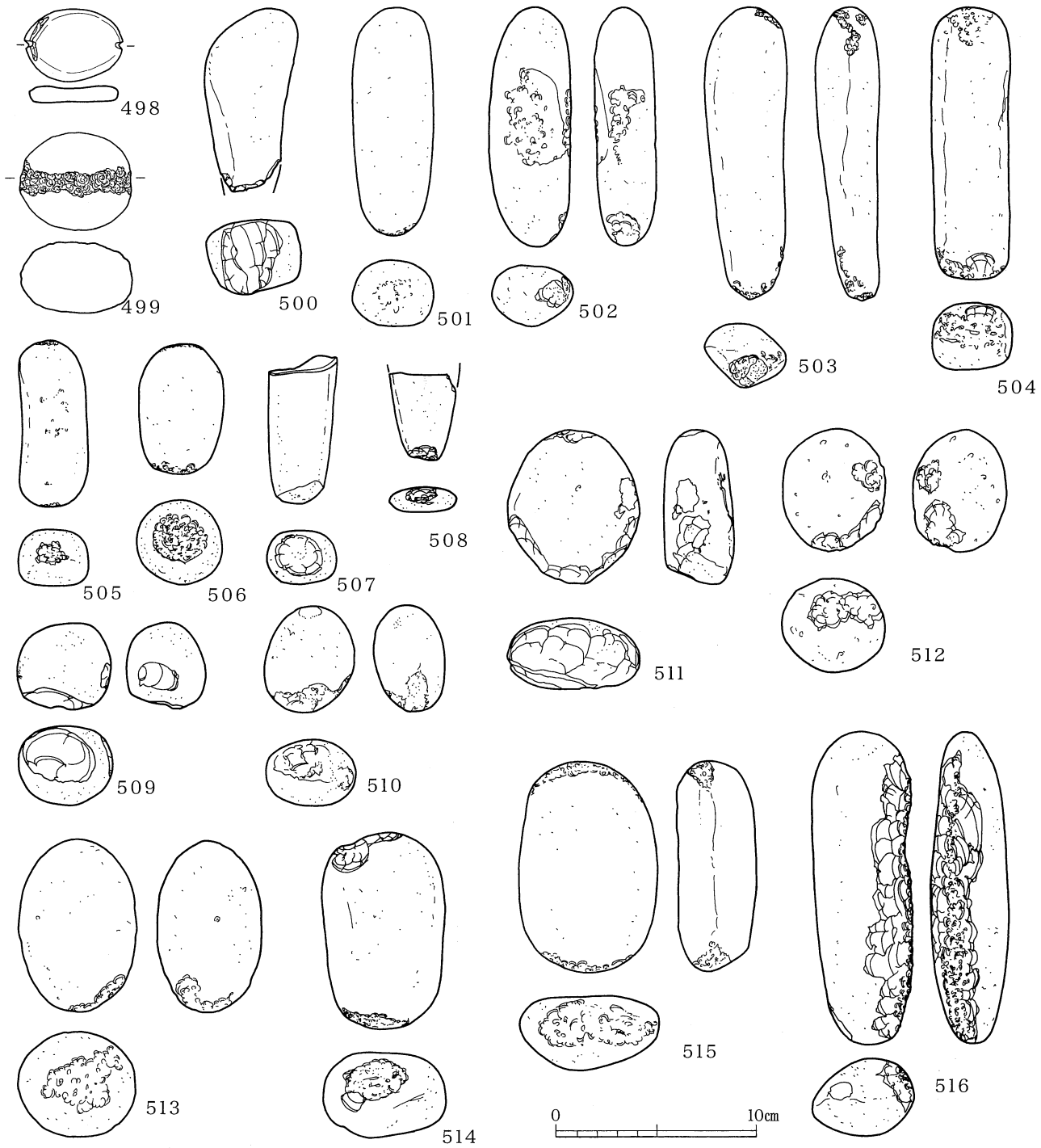
448～499は砂岩・頁岩を石材として使用している石錘類である。448～497は打欠石錘である。448～494は長軸を打ち欠き、495～497は短軸を打ち欠いている。長軸打欠石錘の重量は15ｇ～240ｇまでの非常に軽いものからかなり重いものまで出土している。魚種・漁法・漁場などにバリエーションがあったことが推定できる。475・480・485・491は短軸側にも打欠を１ヵ所もち、計３ヵ所の打欠がある。485は背面に磨面をもつ。498は長軸に切目をもつ切目石錘である。499は卵形の砂岩の長軸を連続して打ち欠いた有溝石錘である。他の石錘が扁平な礫を使用しているのと比較すると特異的である。

⑧尾鈴山酸性岩製・砂岩・頁岩製石器群（敲石類）

500～516は尾鈴山酸性岩・砂岩・頁岩を石材として使用している敲石類である。形状が500～505・507・508・516は棒状、他は塊状であり、いずれも礫（礫塊）を素材にしている。また、敲打を両端で行っているもの（503～506・511・514・515）、敲打を側面でも行っているもの（502・509・512・516）、磨面をもつもの（503・514）など多様である。



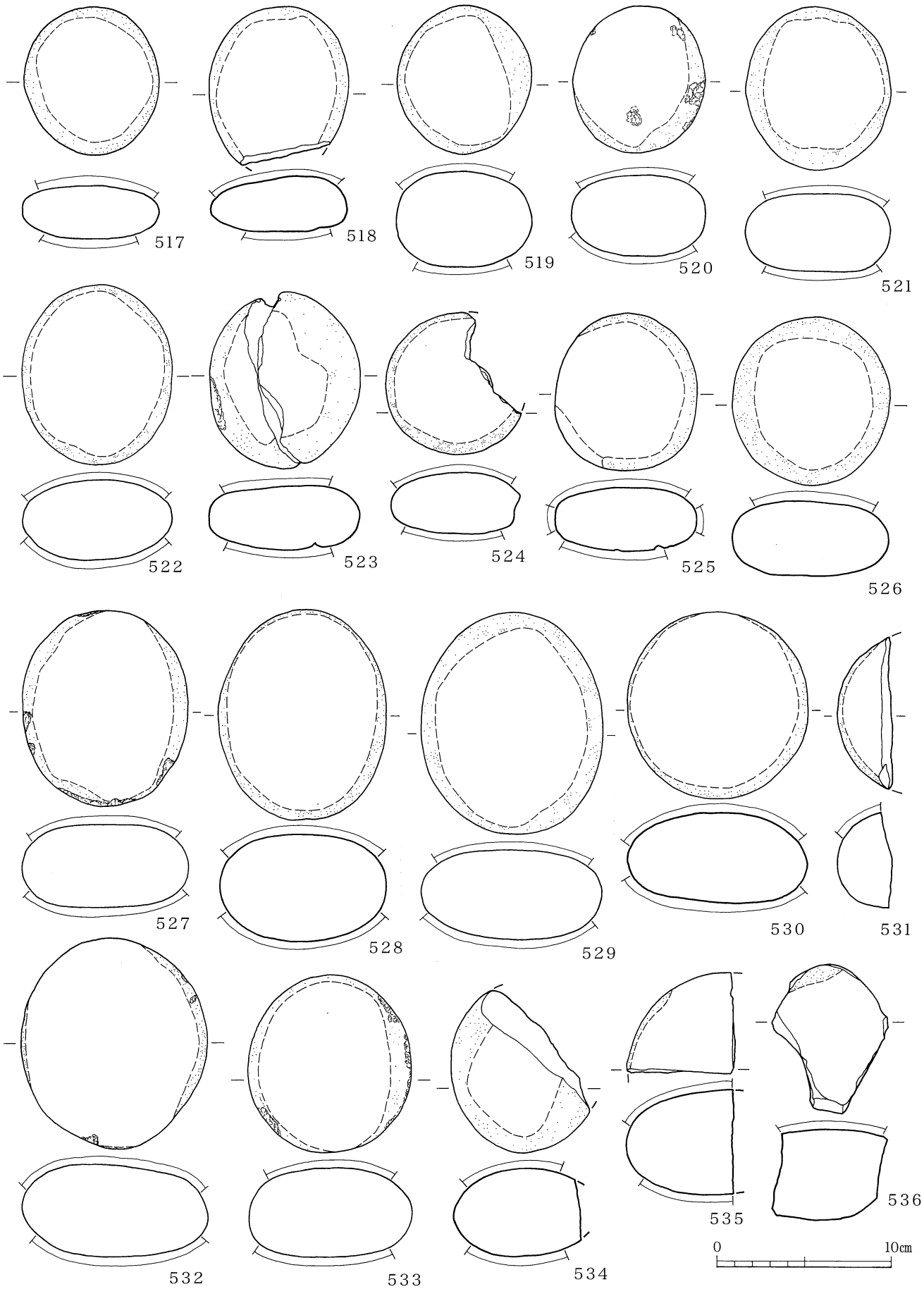
第66図　打欠石錘実測図



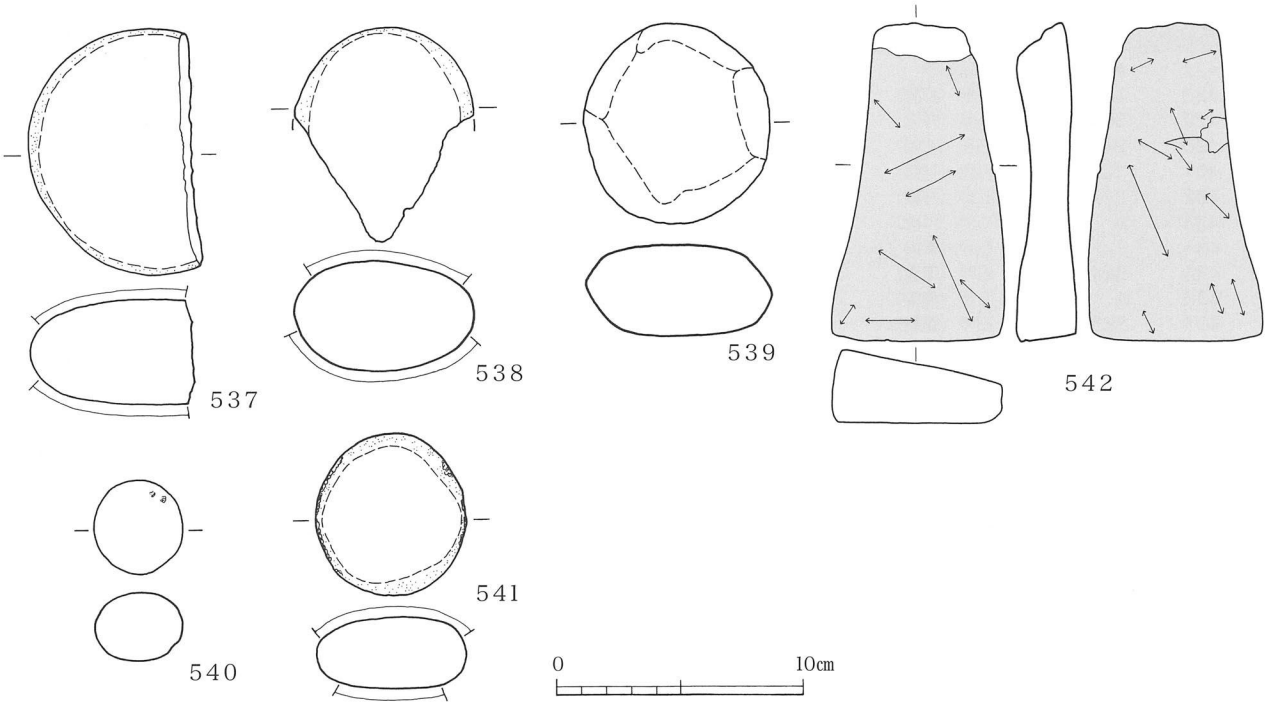
第67図　石錘類および敲石実測図

⑨尾鈴山酸性岩製・砂岩・頁岩製石器群（磨石・砥石類）

517～541は尾鈴山酸性岩・砂岩を石材として使用している磨石類であり、542は頁岩を石材として使用している砥石である。磨石はほとんどが扁平な円礫の表裏面を磨面としている。重量は540のようにかなり軽量なものから527・528・532のように1000ｇを超えているものもあり、重量の差は対象物の違いを表しているかもしれない。また、520・523・532のように周縁に敲打痕をもつものもある。542の砥石は表裏だけでなく、四面全てが使用面になっていたと考えられる。


517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
0
10cm

第68図　磨石実測図



第69図　磨石・砥石実測図

第27表　縄文石器観察表（2）

長・幅・厚＝cm　重量＝g

遺物番号	出土位置	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　材	備　考
395	SC	２次加工のある剥片	9.1	8.1	3.0	124.9	凝灰岩	
396	散礫１	スクレイパー	8.3	7.0	2.2	141.3	尾鈴山酸性岩	
397	SE3	微細剥離のある剥片	9.2	6.0	2.2	118.5	尾鈴山酸性岩	
398	A	不明石器	12.8	8.8	3.5	416.2	尾鈴山酸性岩	
399	A	スクレイパー	8.8	8.2	3.2	319.4	尾鈴酸性岩	
400	SC19	石核	15.2	9.0	4.3	590.5	ホルンフェルス	
401	A	石核	13.2	9.1	5.3	529.0	ホルンフェルス	
402	散礫１	石核	18.1	10.3	7.6	1440.0	ホルンフェルス	
403	SI26	スクレイパー	8.4	6.5	1.8	160.9	ホルンフェルス	
404	SC37	２次加工のある剥片	9.8	8.8	2.7	217.4	ホルンフェルス	
405	B	石核	15.3	13.6	6.4	1350	ホルンフェルス	
406	散礫３	スクレイパー	11.6	4.8	2.2	102.2	ホルンフェルス	
407	A	礫器	10.0	10.8	4.7	562.6	ホルンフェルス	石斧？
408	A	石核	6.2	5.7	2.6	109.2	ホルンフェルス	石斧？
409	散礫１	スクレイパー	9.6	4.9	1.8	102.3	ホルンフェルス	
410	SA5	スクレイパー	9.5	5.3	2.7	113.0	ホルンフェルス	
411	A	石核	7.7	8.6	3.3	272.0	ホルンフェルス	
412	A	石核	8.8	10.4	3.5	349.1	ホルンフェルス	
413	SE	石核	11.3	7.9	3.5	455.4	ホルンフェルス	
414	A・表採	石核	13.3	9.1	4.7	749.0	ホルンフェルス	
415	A	スクレイパー	13.8	8.9	2.2	376.8	ホルンフェルス	
416	散礫２	石核	13.2	11.7	4.3	762.5	ホルンフェルス	
417	散礫１	二次加工ある剥片	10.3	6.9	1.1	56.5	ホルンフェルス	剥片？
418	SA2	礫器	10.6	12.1	2.4	289.3	ホルンフェルス	
419	SC26	礫器	7.9	7.6	1.9	120.0	頁岩	石斧刃部？
420	SA7	礫器	9.7	9.9	2.1	295.8	頁岩	石核？
421	SA7	礫器	11.1	10.0	2.7	341.6	頁岩	石核？
422	A・表採	礫器	13.4	7.7	2.2	219.6	ホルンフェルス	
423	A・表採	礫器	11.3	12.3	2.1	374.5	ホルンフェルス	石核？
424	A		6.3	3.8	1.1	10.1	頁岩	
425	A		10.1	2.5	0.8	30.9	頁岩	
426	SI		12.1	4.7	2.9	146.9	頁岩	２次加工ある剥片？

第28表　縄文石器観察表（3）

長・幅・厚＝cm　重量＝g

遺物番号	出土位置	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　材	備　考
427	A・表採	環状石斧	(10.4)	(5.7)	(1.7)	107.0	頁岩	
428	SA13	石斧（打製）	12.1	5.7	2.0	159.3	ホルンフェルス	
429	SE3	石斧（打製）	16.5	13.0	1.2	222.2	ホルンフェルス	
430	SE3	石斧（打製）	17.2	8.9	3.8	722.5	ホルンフェルス	
431	SC26	石斧（打製）	15.0	10.0	4.7	756.1	頁岩	
432	SA2	石斧（打製）	11.5	13.0	3.6	627.4	ホルンフェルス	
433	A	石斧（打製）	14.4	11.5	3.6	619.3	ホルンフェルス	
434	トレンチ8	石斧（磨製？）	5.5	3.0	1.8	41.9	ホルンフェルス	
435	SE4	石斧（磨製）	(5. 8)	5.9	1.1	39.7	頁岩	
436	A	石斧（磨製）	6.7	6.1	2.4	133.4	ホルンフェルス	
437	SE3	石斧（磨製）	7.3	4.8	2.5	94.0	ホルンフェルス	
438	B	石斧（磨製）	12.0	4.3	2.3	165.2	ホルンフェルス	
439	SA5	石斧（打製）	11.2	7.3	3.4	396.2	ホルンフェルス	
440	SE2	石斧（打製）	9.3	4.1	1.7	78.4	ホルンフェルス	
441	SC19	石斧（局部磨製）	7.4	4.4	1.4	50.7	頁岩	
442	A	石斧（打製）	12.9	5.2	2.9	193.8	頁岩	
443	A	石斧（打製）	15.0	5.2	3.7	352.3	ホルンフェルス	
444	B	石斧（打製）	5.9	6.5	1.8	81.4	ホルンフェルス	
445	A	石斧（打製）	8.5	6.0	1.7	104.6	頁岩	
446	A・表採	石斧（局部磨製）	9.2	6.1	2.3	183.3	ホルンフェルス	
447	散礫1	石斧（磨製）	7.6	3.7	1.6	46.3	ホルンフェルス	
448	A	石錘	3.1	4.0	1.1	21.7	砂岩	
449	A	石錘	3.3	4.0	1.1	16.6	頁岩	
450	SA5	石錘	3.4	3.5	1.0	18.2	頁岩	
451	A	石錘	3.5	4.1	8.5	16.7	砂岩	
452	SA2	石錘	3.5	4.3	(1.0)	22.3	頁岩	
453	A	石錘	3.6	4.9	1.3	28.0	頁岩	
454	SE4	石錘	4.1	4.9	1.1	23.2	砂岩	
455	A	石錘	3.5	5.0	8.0	15.5	頁岩	
456	A	石錘	3.4	4.8	1.4	34.2	頁岩	
457	SA9	石錘	3.9	4.2	1.3	35.3	砂岩	
458	A	石錘	4.1	4.8	0.6	15.2	頁岩	
459	SE3	石錘	4.1	5.9	1.1	47.0	砂岩	
460	A・表採	石錘	4.2	5.9	1.4	52.6	頁岩	
461	SI49	石錘	4.5	4.9	1.4	50.0	砂岩	
462	トレンチ6	石錘	2.9	5.3	1.0	19.7	砂岩	
463	SA1	石錘	5.0	5.3	1.2	41.3	砂岩	
464	A・表採	石錘	5.0	(5.2)	1.6	51.9	砂岩	
465	A・表採	石錘	4.7	4.8	1.5	49.2	砂岩	
466	SE4	石錘	4.8	4.9	0.7	31.4	砂岩	
467	A	石錘	6.5	4.3	1.5	60.8	頁岩	
468	SH	石錘	4.6	4.9	1.0	25.6	砂岩	
469	A	石錘	4.9	6.0	1.2	36.6	頁岩	
470	A・表採	石錘	5.0	5.9	1.2	48.9	頁岩	
471	SH	石錘	5.2	5.7	1.4	67.4	砂岩	
472	SA1	石錘	5.4	5.7	1.5	61.8	砂岩	
473		石錘	5.5	6.7	1.6	62.8	頁岩	
474	SN1	石錘	6.0	7.6	1.0	44.5	頁岩	
475	SI49	石錘	5.4	6.2	0.8	37.3	頁岩	打欠3箇所
476	A	石錘	5.8	5.8	2.0	82.2	砂岩	
477	B	石錘	5.4	6.7	1.4	81.9	砂岩	
478	A・表採	石錘	5.6	6.7	1.9	87.1	砂岩	
479	トレンチ8	石錘	6.1	6.6	1.9	64.3	頁岩	
480	SC	石錘	4.2	8.2	1.3	67.3	頁岩	打欠3箇所
481	トレンチ7	石錘	2.9	5.3	1.0	93.0	砂岩	
482	散礫3	石錘	6.4	6.9	1.9	108.3	頁岩	
483	A・表採	石錘	6.1	6.4	1.9	105.6	頁岩	
484	A	石錘	6.4	9.2	2.3	190.2	砂岩	
485	A	石錘	5.4	8.7	1.3	82.0	頁岩	打欠3箇所・磨面
486	SC	石錘	4.9	8.3	1.9	111.8	頁岩	
487	SE3	石錘	6.0	6.3	2.0	106.3	砂岩	
488	SE4	石錘	6.3	8.4	1.8	148.3	砂岩	
489	SD3	石錘	7.1	8.0	2.2	193.4	砂岩	
490	散礫4	石錘	6.4	7.5	1.8	154.9	砂岩	
491	SN1	石錘	7.8	8.8	2.0	186.9	砂岩	打欠3箇所
492	SC	石錘	7.4	9.9	2.0	207.2	砂岩	
493	散礫3	石錘	7.1	8.2	2.5	213.5	砂岩	
494	A・表採	石錘	8.2	8.4	2.4	241.6	砂岩	
495	A	石錘	4.9	3.1	1.0	27.4	砂岩	短軸
496	SI49	石錘	5.5	4.9	1.4	54.5	頁岩	短軸
497	SA9	石錘	6.6	5.4	1.3	76.7	砂岩	短軸
498	SE3	石錘（切目）	3.6	4.9	8.5	21.3	頁岩	
499	SC	石錘（有溝）	4.9	5.4	3.6	132.8	砂岩	

第29表　縄文石器観察表（4）

長・幅・厚＝cm　重量＝g

遺物番号	出土位置	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　材	備　考
500	SA5	敲石	9.2	4.7	3.7	221.3	頁岩	
501	A	敲石	11.4	4.0	3.3	242.2	砂岩	
502	SA8	敲石	11.9	4.1	3.1	214.8	砂岩	側面敲打
503	SC8	敲石	14.6	4.1	3.2	233.4	砂岩	両端敲打・磨面
504	B	敲石	4.0	13.5	3.3	310.1	砂岩	両端敲打
505	SC	敲石	8.3	3.5	2.9	146.1	砂岩	両端敲打
506	A・表採	敲石	6.5	4.3	4.2	162.0	尾鈴山酸性岩	両端敲打
507	A	敲石	7.4	3.4	2.7	96.0	砂岩	
508	SE3	敲石	4.4	3.3	1.2	25.2	頁岩	
509	SC41	敲石	4.3	4.7	4.0	118.3	頁岩	側面敲打
510	SE1	敲石	5.3	4.4	3.3	94.5	砂岩	
511	SE3	敲石	7.7	6.6	3.5	215.5	砂岩	両端敲打
512	SE3	敲石	6.2	5.0	4.7	180.7	尾鈴山酸性岩	側面敲打
513	SA7	敲石	8.9	5.9	5.2	356.6	尾鈴山酸性岩	
514	SE3	敲石	9.8	6.0	4.3	405.7	頁岩	両端敲打・磨面
515	A	敲石	10.5	6.9	3.7	411.3	砂岩	両端敲打
516	B	敲石	15.6	5.0	3.9	439.9	頁岩	側面敲打
517	SC19	磨石	8.5	7.7	3.1	273.1	砂岩	
518	SE3	磨石	9.1	7.9	3.2	314.1	砂岩	
519	SC19	磨石	8.5	7.7	5.5	476.5	砂岩	
520	SI8	磨石	8.4	7.6	4.6	423.1	尾鈴山酸性岩	敲打痕
521	散礫	磨石	9.4	8.4	4.5	460.7	砂岩	
522	SA1	磨石	10.3	8.6	4.6	608.8	尾鈴山酸性岩	
523		磨石	10.1	8.6	3.7	423.3	砂岩	敲打痕
524	A	磨石	8.1	7.7	3.5	268.4	尾鈴山酸性岩	
525	SI32	磨石	9.0	8.1	3.7	383.3	尾鈴山酸性岩	
526	A	磨石	9.6	9.0	4.3	539.4	尾鈴山酸性岩	
527	SA4	磨石	12.7	10.4	5.1	1010	尾鈴山酸性岩	
528	SC	磨石	12.1	9.6	6.2	1027.8	尾鈴山酸性岩	
529	A	磨石	11.2	9.5	4.8	805.7	尾鈴山酸性岩	
530	SE3	磨石	10.7	10.3	5.2	852.7	尾鈴山酸性岩	
531	散礫	磨石	8.6	3.3	5.5	157.3	尾鈴山酸性岩	
532	SA7	磨石	11.5	10.6	5.3	1006.7	尾鈴山酸性岩	敲打痕
533	SE3	磨石	10.2	9.3	5.1	683.4	尾鈴山酸性岩	
534	SE3	磨石	9.3	7.9	5.0	396.0	砂岩	
535	SB1	磨石	5.9	6.3	6.1	280.0	砂岩	
536	SC	磨石	6.6	8.6	5.2	356.0	尾鈴山酸性岩	
537	A	磨石	9.9	7.0	4.3	471.0	砂岩	
538	SN1	磨石	8.6	7.3	4.5	272.0	砂岩	
539	B	磨石	8.1	7.5	3.7	334.9	尾鈴山酸性岩	
540	SA5	磨石	3.8	3.6	2.9	51.1	砂岩	
541	SA7	磨石	6.7	10.6	2.9	167.3	尾鈴山酸性岩	全面磨面
542	SE3	砥石	12.7	7.0	2.9	265.8	頁岩	全面磨面

■　縄文石器の石材分類

チャート　：堆積岩。珪質で緻密で硬いもの。黒～灰～暗緑色まで混入物によって変化がある。

黒曜石　：火成岩。ガラス質の火山岩であり、黒色～灰色までがある。透明感にもかなりの格差があり、斑晶や鉱物によって産地が同定される。

安山岩　：火成岩。灰色、緻密で硬いものが多い。叩くと澄んだ金属を発するものもある。

尾鈴山酸性岩：溶結凝灰岩。白色・灰色・淡黄色のレンズ構造をもつ。

頁　岩　：堆積岩。層理構造が確認できるもの。緻密で硬いものが多いと層方向に脆いものがある。

ホルンフェルス：接触変成岩。表（礫）面が粉を吹いた状態であり、割口が黒紫色系をしているもの。緻密で硬いものが多い。風化が著しいものもこれに含めた。

砂　岩　：堆積岩。肉眼で砂粒が確認できるもの。砂粒の粒度にかなり細かいものがある。

その他　：白色珪岩・珪長岩・玉髄（めのう）・凝灰岩など。

第３節　弥生時代の遺構と遺物

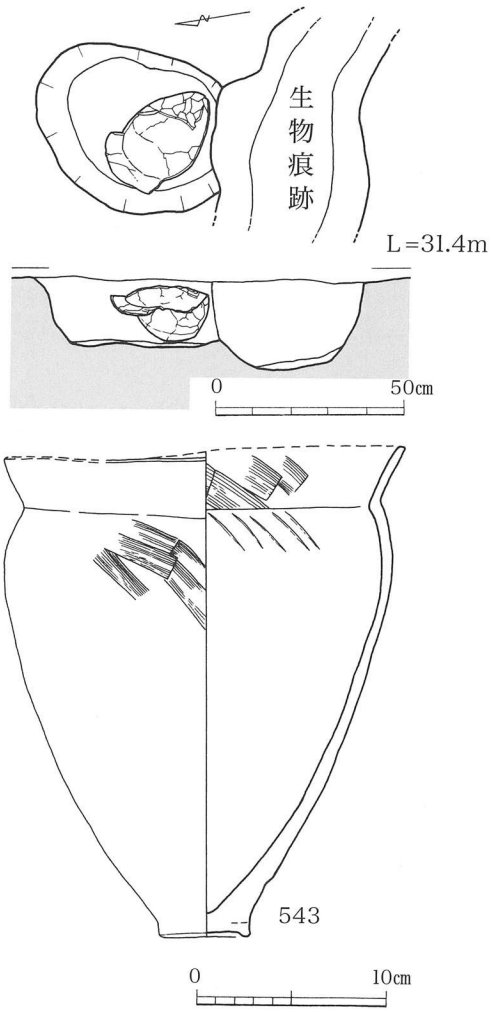
弥生時代後期後半の土器集中、土坑各１基が確認された。このほか、A2区東～北端に広がる黒色土中や遺構検出面での採集資料中に、後期の甕底部が散見された。表採の有肩打製石斧（444）も該期の可能性がある。

【　土　坑　】（第70図・図版４）

土坑はA2区で検出された。土坑周辺に住居等、弥生から古墳時代の遺構はなく、また遺物の分布もほとんどない。土坑は、長軸方向の一部に撹乱を受けている。長径55cm＋α、短径45cmの平面楕円形で、床面は平坦である。壁と床面の境は比較的明瞭であった。土坑埋土は周辺の土色に比べやや暗い程度であり、認識は困難を極めた。竪穴などに付随する土坑である可能性も考え精査したが、土坑周辺に生物痕跡（第７節）が確認されたばかりであった。甕（543）は土坑中に横倒しになった状態で出土した。

出土遺物　（第70図・図版22）

甕（543）１点のみである。内面頸部下には工具痕が明瞭に残る。このほか埋土中に旧石器が含まれていた。



第70図　土坑および出土遺物実測図

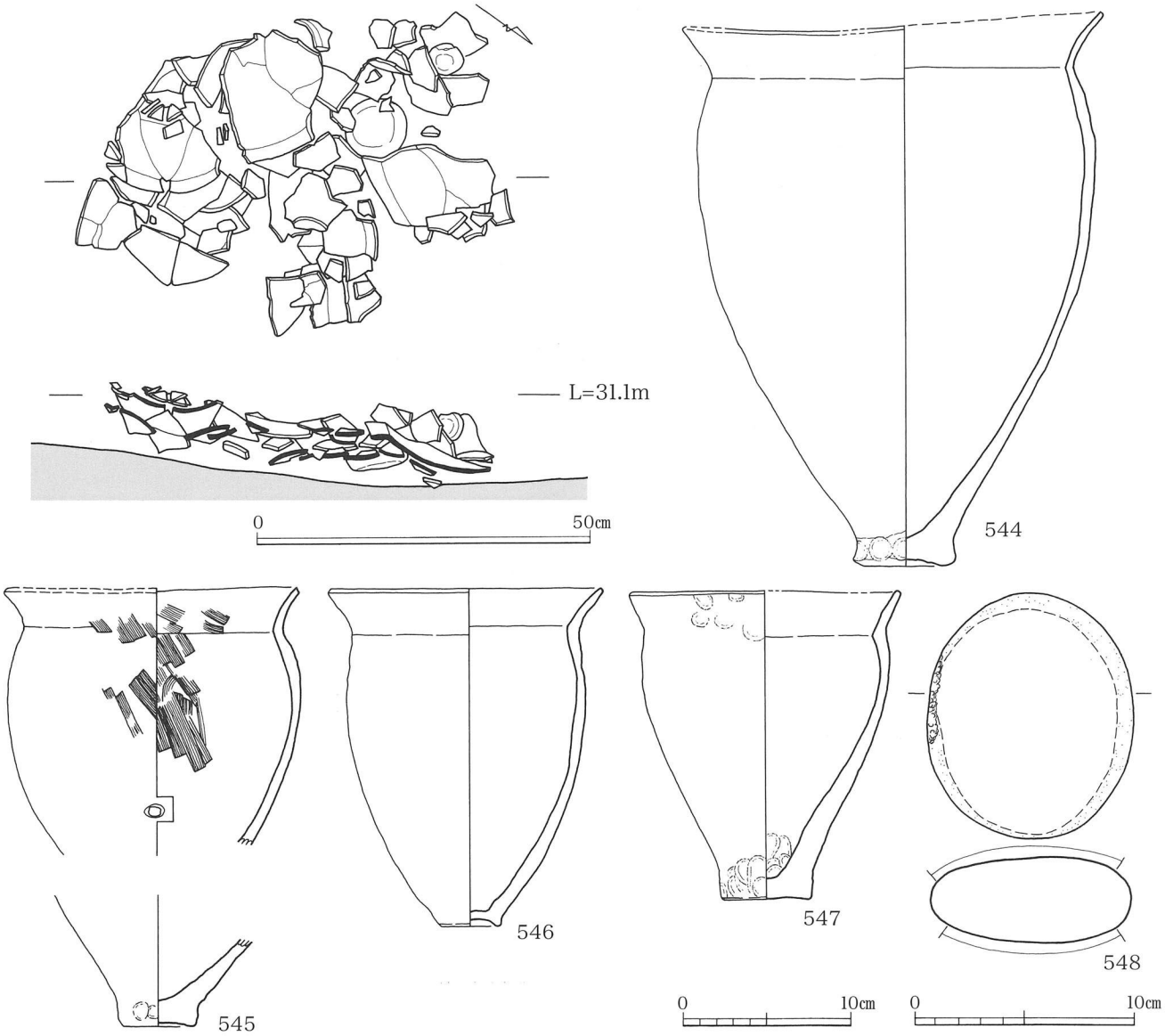
第30表　弥生時代出土遺物観察表

No.	位置	器種	部位	法量（cm） 口径	器高	胴径	底径	胎土	調整 内面	外面	色調	備考
597	土坑	中甕	完形	21.5	26.4	20.8	4.8	φ1～5㎜の灰褐・灰白・黄褐色粒を含む	口縁ハケ　胴部上半器具ナデ　胴部～底部ナデ	口唇～口縁ナデ　胴部上半ハケ　胴部下半縦ナデ　脚部指頭痕	内面：にぶい黄橙色　外面：にぶい黄色	内面頸部下に斜方向の器具痕。外面口縁～胴部上半にスス付着、内面胴部～底部にコゲ付着。
543	土器集中	大甕	口縁から胴部	25.0	33.4	24.0	6.2	φ1～6㎜のにぶい赤褐・黒灰白色粒を多く含む	口縁～底部ナデ　底部付近コゲ付着あり	口唇部横ナデ　胴部ナデ　脚部指頭痕＋ナデ	内面：橙色　外面：浅黄色	最大径は肩下で、口径に近い。外面肩～胴部にスス付着。
544	〃	中甕	底部のみ	17.4	(23.5)	17.6	4.4	φ1～5㎜の暗赤褐・褐灰色粒を含む	口縁～底部斜方向ハケメ　底部付近ナデ	口唇部横ナデ　胴部斜方向のハケメ＋ナデ　脚部指頭痕＋ナデ	内面・外面：にぶい黄橙色	最大径は肩下で、口径に近い。胴下半部に1.2×0.7cmの孔あり。
545	〃	中甕	完形	16.4	20.3	14.4	3.4	φ1～7㎜の黄褐・灰褐・灰白色粒含む	口縁～底部ナデ	口唇部横ナデ　口縁～底部ナデ	内面・外面：にぶい橙色	最大径は口径。外面スス付着、内面胴部下半～底部コゲ付着。
546	〃	中甕	完形	16.0	18.6	15.0	5.1	φ1～3mmの灰白・灰・褐・茶褐色粒を多く含む	口縁横ナデ　胴部～底部斜方向ナデ　底部指頭痕	口唇横ナデ　口縁下半～底部斜方向ナデ　口縁・底部指頭痕	内面：にぶい橙色　外面：橙色	最大径は口径。

			石材	長	幅	厚	重量	備考
547	〃	磨石	尾鈴山酸性岩類	11.1	9.1	3.9	599.2	

【　土器集中　】　（第71図・図版４）　表土直下で土器の集中箇所が確認された。明確な掘り込みはなく、地山が浅くくぼむ程度である。集中箇所は甕４個体の破片が横積みになった状態であり、破片中には磨石1点（548）が含まれていた。

出土遺物　（第71図・図版22）　甕は器高30cm超と想定される大甕（544）、器高約25cmの中甕（545・546）、器高20cm前後の小甕（547）に分けられる。545の胴部下位には焼成後に貫通された孔が１つある。小甕は器高に対し底部付近が分厚い。

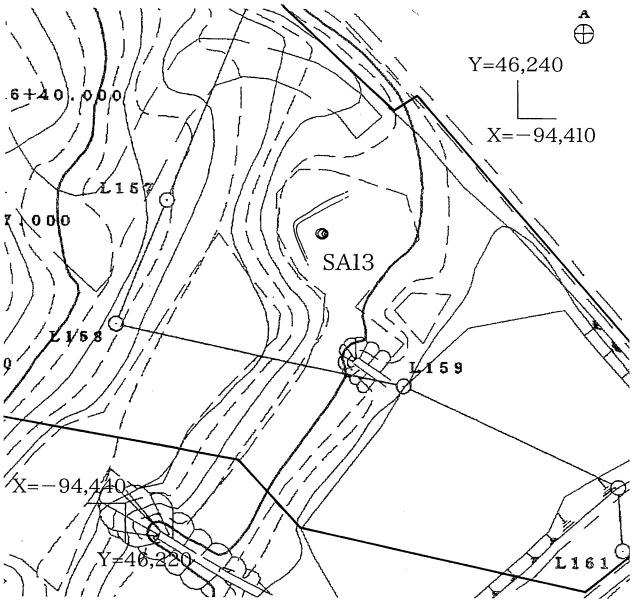


第71図　土器集中検出状況および出土遺物実測図

第４節　古墳時代から古代の遺構と遺物

古墳１基・馬具の入る土坑１基・竪穴住居９軒・溝１条・そのほか該期の可能性のある土坑・ピット群が検出された。出土遺物から、中期後半から後期初頭と後期後半の２群に分けられる。

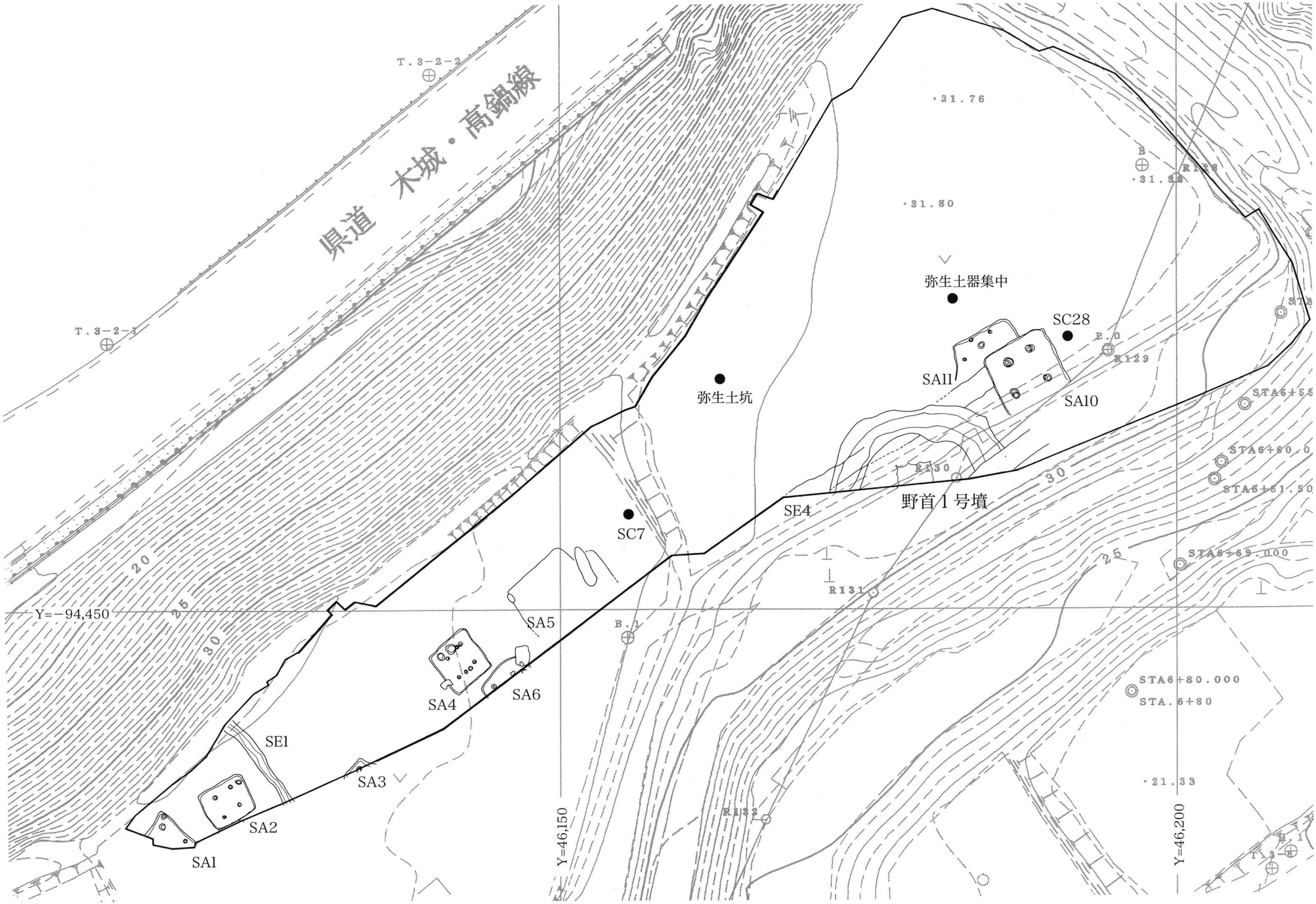
該期の遺構・遺物は、丘陵平坦面から斜面部にわたって確認された。住居の占地位置については、丘陵平坦面のＡ区で標高約35m、斜面部のB区SA13付近で標高約20mと、かなりの比高差がある中にひろがる。



第72図　B区古墳時代遺構分布図（S=1/400）

第31表　古墳時代住居一覧

時期	遺構	立地	床面積(㎡)	主軸	柱穴(本)	遺物	備考
中期	ＳＡ６		(11.2)	N-40°-W	(2)	甕	
後半	ＳＡ１	Ａ１区	(8.0)	N-48°-W	(1)	甕	
～	ＳＡ２		20.1	N-30°-W	4	甕・壺・坏	中期から後期まで時期幅あり
後期							
初頭	ＳＡ４		25.3	N-35°-W	7	甕・坏ほか	床面中央に焼土
	ＳＡ３		(1.9)	N-50°-W	(1)	−	
	ＳＡ5		49.7	N-38°-W		須恵器坏・土師器甕・壺・甑・坏	遺構プランは不明確
後期	ＳＡ13	Ｂ区	(22.2)	N-33°-W	(1)	甕ほか	埋甕あり
後半	ＳＡ11	Ａ２区	(19.1)	N-10°-W	(−)	−	
～	ＳＡ10		(37.0)	N-12°-W	4	甕・坏ほか須恵器甕	埋甕あり
終末							

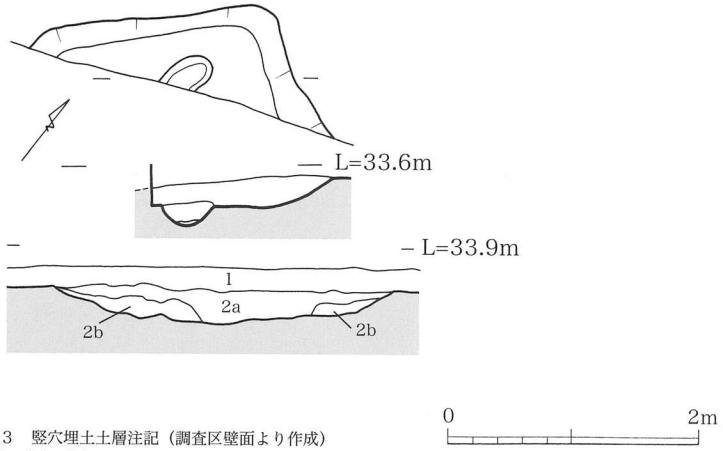


第73図　A区古墳時代遺構分布図（S=1/400）

1　集　落

【　SA3　】(第74図)

A１区壁際で検出され、竪穴一隅のみの調査となった。１コーナーの形状から方形プランの住居と想定され、主柱穴は１本のみ確認された。埋土は暗褐色土であり、床面付近になるとやや黒みを増す。土師器小片がごく少量含まれていたが、時期を判別しうるものはない。遺構配置から推して、中期後半から後期初頭か。



SA３　竪穴埋土土層注記（調査区壁面より作成）
１　層：表土
２a 層：暗褐色土　硬くしまる。褐色土のブロックを含む。
２b 層：黒褐色土　硬くしまる。黒色土ブロックを含む。

第74図　SA３実測図

【　SA6　】(第75図)

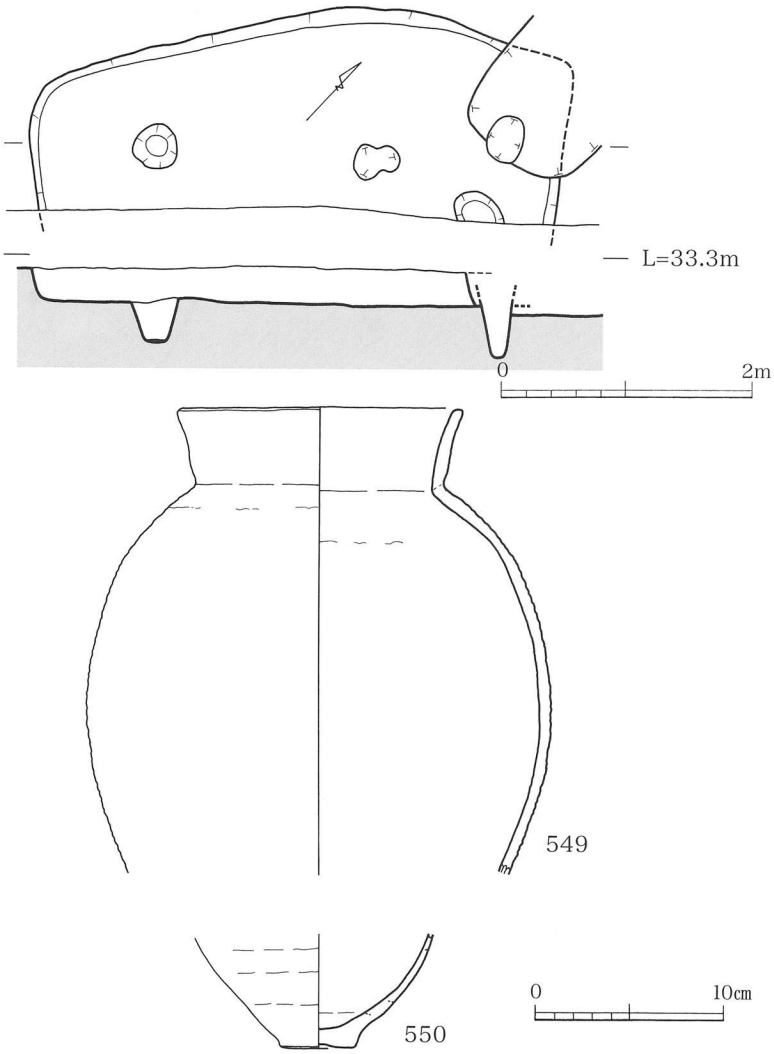
A１区中央南側で検出され、住居南側は調査区外に延びる。0.5m北側にSA4が近接して立地する。柱穴は2本確認され、床面からの深さ0.35m前後である。遺物から、中期後半である。

SA6出土遺物（第75図・図版24）

549・550は竪穴床面直上より出土した甕である。549は長胴で胴部には横方向のタタキがみられる。また、内外面頸部の屈曲は強い。550は底部で平底である。

【　SA1　】(第76図・図版６)

A１区西端に位置し、住居竪穴南西半分は調査区外にのびる。竪穴埋土を切って別時期の柱穴２本が掘り込まれる。竪穴の平面形は方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は、床面で１本のみ確認された。埋土は、竪穴・柱穴ともに暗褐色土であり、わずかに炭化物粒・焼土粒を含む。遺物から、中期後半から後期初頭である。



第75図　SA6および出土遺物実測図

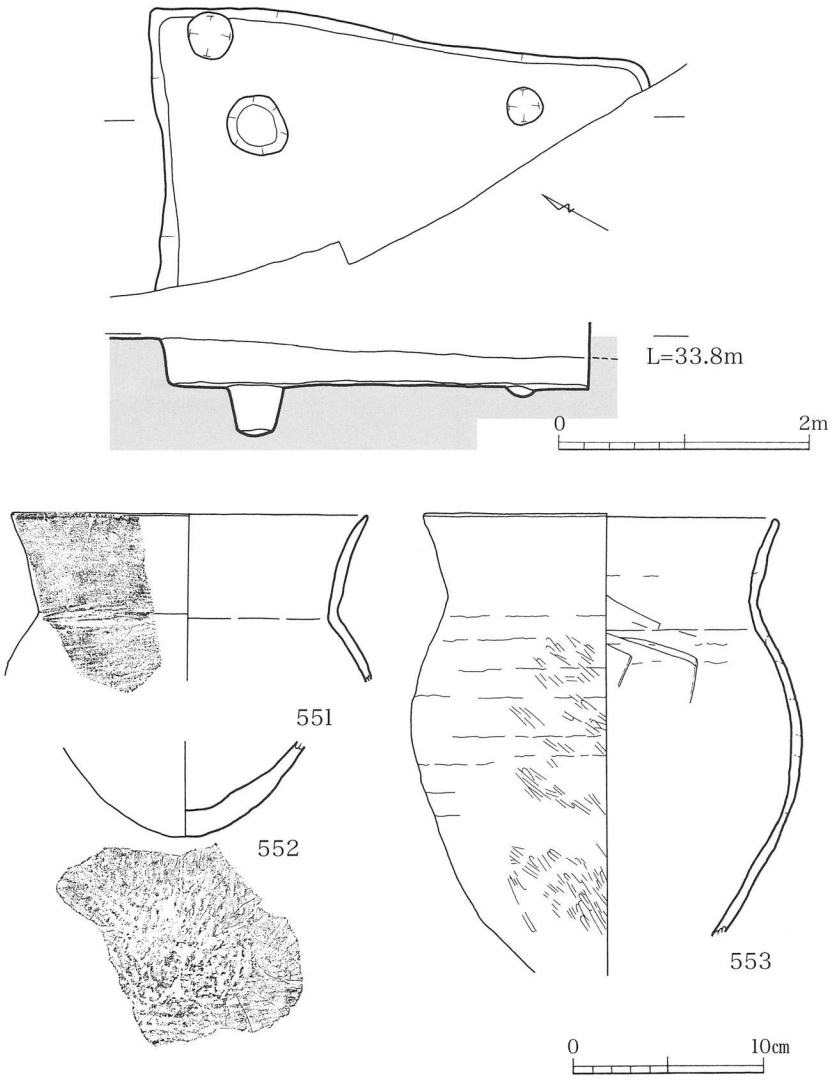
SA１出土遺物（第76図）

551・553は床面直上より出土し、胴の張った甕である。552は柱穴埋土より出土し、側面の張るレンズ状をした甕底部である。このほか、埋土上部から下部にかけて土器小片多数や縄文石器・礫を含んでいた。

【　SA2　】（第77図・図版６）

Ａ１区西端に立地し、南西に近接してSA１が位置する。竪穴主軸は溝SE１の向きと一致する。竪穴の平面形は東西に長い方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は床面で4本確認された。埋土は１～４層に分けられ、竪穴中央部に向かって黒みを増した。

埋土中には土師器・縄文土器、石器がまんべんなくみられた。土師器片には接合関係があまり認められない。遺物から、中期



第76図　SA１および出土遺物実測図

第32表　古墳時代住居出土遺物観察表（１）

No.	器種	部位	法量（cm） 口径	器高	胴径	底径	胎土	調整 内面	調整 外面	色調	備考
549	SA6 甕	底部欠	15.2	－	24.9	－	φ１～4㎜の灰・灰白色粒を含む	風化著しいがナデか？	口縁ナデ？　胴部横方向平行タタキナデ	内面・外面：橙色	外面胴部全面にスス付着。
550	SA6 壺	底部のみ	－	－	－	4.1	φ１～4㎜の褐・灰褐・灰白色粒を含む	縦方向器具ナデ		内面・外面：にぶい黄橙色	
551	SA1 甕	口縁から頸部	19.1	－	－	－	φ1～4㎜の褐灰・灰褐色粒を含む	横ナデ	口唇横ナデ　口縁～タタキ後横ナデ	内面・外面：にぶい黄橙色	内面頸部は稜が立つ。外面にスス付着。
552	SA1 甕	底部のみ	－	－	－	－	φ１～3.5㎜の灰白・黄灰・灰黄褐色・暗褐を含む	縦・斜方向ナデ	平行タタキ後ナデ	内面・外面：にぶい黄橙色	丸底。外面にスス付着。
553	SA1 甕	底部欠	18.8	－	20.8	－	φ１～6㎜の灰・茶褐、φ１～3㎜灰白色粒を多く含む	口唇横ナデ　胴部器具ナデ＋ナデ	口縁横ナデ　胴部斜方向ヘラミガキ	内面・外面：にぶい橙色	内面頸部に器具痕残る。外面にスス付着。
554	SA2 壺	口縁から頸部	11.4	－	－	－	φ1～3㎜の灰白・にぶい褐色粒を多く含む	横ナデ	ナデ	内面：にぶい黄橙色　外面：浅黄橙色	頸部に貼付突帯。突帯上には工具による刻みあり。口唇付近にスス付着。
555	SA2 壺	頸部	－	－	－	－	φ1～3㎜の灰白・褐色粒を多く含む	ナデ	ナデ	内面：にぶい黄橙色　外面：	頸部に貼付突帯。突帯上には工具による刻みあり。外面一部にスス付着。
556	SA2 甕	口縁から頸部	18.2	－	－	－	φ1～3㎜の灰白・赤褐色粒を含む	横ナデ	横ナデ	内面・外面：橙色	内面頸部下に工具痕？あり。外面にスス付着。
557	SA2 坏	口縁のみ	－	－	－	－	φ１～3㎜の浅黄橙・褐灰・明赤褐色粒を含む	横ナデ	横ナデ＋斜方向ナデ	内面・外面：橙色	

第33表　古墳時代住居出土遺物観察表（2）

No	位置	器種	部位	法量（cm）				胎土	調整		色調	備考
				口径	器高	胴径	底径		内面	外面		
558	SA4	坏	完形	13.8	5.0	14.0	－	φ1～4㎜の灰白・灰赤・赤灰色粒を含む	ヘラミガキ	口唇ナデ　ほかヘラミガキ	内面：橙色 外面：にぶい橙色	
559	SA4	坏	完形	13.7	6.5	13.8	－	φ1～4㎜の灰白、φ1～2㎜の灰褐・褐灰・にぶい黄橙色粒を含む	ミガキか	ヘラミガキ＋ナデ	内面・外面：にぶい黄橙色	
560	SA4	高坏？	底部	－	－	－	11.4	φ1～4㎜の灰褐・灰白色粒を含む	ナデ	ナデ　脚部付け根に指頭痕	内面：にぶい黄橙色　外面：橙色	上げ底。
561	SA4	甕	口縁から頸部	24.0	－	24.4	－	φ1～5㎜の灰白・黄灰・褐色粒を含む	ナデ	口唇ナデ　口縁～胴部横・斜方向タタキ	内面・外面：橙色	外面胴部にスス付着。外面の風化著しい。
562	SA4	甕	口縁から頸部	26.3	－	－	－	φ1～5㎜の黄褐・褐・灰褐色粒を含む	ナデ	ナデ	内面・外面：にぶい黄橙色	頸部に貼付突帯。突帯上には工具による刻みあり。外面にスス付着。
567	SA5	甕	完形	18.3	24.2	20.0	－	φ1～1.5㎜の褐・暗褐・黒灰色粒を多く含む	口縁横ナデ　胴部～底部ナデ	口縁横ナデ　頸部に指頭痕　胴部ナデ＋斜～横方向器具ナデ　底部器具ナデ＋ナデ	内面：にぶい橙色 外面：明黄褐色	最大径は胴部中位。外面胴部中位・口縁の一部にスス付着、内面胴部中位～底部コゲ付着。
568	SA5	甕	口縁から頸部	21.8	－	20.6	－	φ1～7㎜の褐灰、φ1～4㎜の暗赤褐・赤灰などを含む	口縁～胴部斜方向ナデ	口唇横ナデ　口縁～胴部ナデ	内面・外面：にぶい橙色	最大径は胴部上位から中位にかけて。
569	SA5	甕	口縁から頸部	17.4	－	21.3	－	φ1～5㎜の黄褐・灰褐・灰白・光沢ある黒色粒を含む	口縁～胴部ナデ	口縁横ナデ　胴部斜方向タタキメ	内面：灰黄褐色 外面：にぶい黄褐色	最大径は胴部やや上位で、いわゆるダラ甕。
570	SA5	甕	完形	15.1	21.4	19.1	5.6	φ1～4㎜の茶褐・灰・灰白色粒を多く含む	口縁横ナデ　胴部～底部斜方向～横ナデ　胴部下半～底部ナデ＋ヘラミガキ	口縁横ナデ　頸部縦・横ヘラミガキ　胴部～底部斜方向ヘラミガキ	内面・外面：にぶい黄橙色	最大径は胴部やや上位で、器形はイチゴ形。底部内面に凹凸あり。
571	SA5	甕	底部欠	19.8	－	22.4	－	φ1～5㎜の赤灰・暗赤灰粒を含む	口唇ナデ　口縁格子状タタキ後ナデ　胴部～底部格子状タタキ	口縁～胴部下半斜方向ナデ	内面：にぶい黄橙色　外面：にぶい橙色	最大径は胴部中位。
572	SA5	甕	口縁のみ	21.7	－	－	－	φ1～5㎜の灰・灰白・茶褐・褐色粒を多く含む	横ナデ	横ナデ	内面：浅黄橙色 外面：にぶい橙色	外面にスス付着。
573	SA5	壺	口縁から頸部	16.3	－	－	－	φ1～4㎜の褐灰・灰白・黒褐粒、φ1㎜以下の赤褐色粒含む	口縁斜方向ナデ　頸部に指頭痕	口縁横ナデ	内面・外面：にぶい橙色	外面にスス付着。
574	SA5	甕	胴部から底部	－	－	－	－	φ1～5㎜の褐・灰白・黄褐色粒を含む	ナデ	ナデ	内面・外面：にぶい黄橙色	外面胴部下半にスス付着。
575	SA5	壺	口縁から頸部	17.8	－	－	－	φ1～4㎜の赤褐・褐灰・光沢ある透明粒を含む	口唇横ナデ　口縁ナデ	口縁横ナデ	内面：にぶい黄橙色　外面：にぶい橙色	
576	SA5	甕	胴部から底部	－	－	－	－	φ1～5㎜の灰褐・灰白・黄褐色粒を含む	ナデ	ナデ	内面・外面：にぶい黄橙色	平底に近い丸底。胴は張ると予想される。外面にスス付着。
577	SA5	甕	底部	－	－	－	－	φ1～5㎜の褐・灰白・灰褐色粒を含む	ナデ	ナデ	内面：にぶい橙色 外面：にぶい黄橙色	
578	SA5	小形丸底壺	胴部から底部	－	－	9.6	4.4	φ1～7㎜の灰黄褐・褐灰・灰白・橙色粒を多く含む	ナデ	ナデ　底部指頭痕	内面・外面：浅黄橙色　外面：にぶい橙色	
579	SA5	甕	底部のみ	－	－	－	－	φ1～7㎜の褐、φ1～2㎜の灰白・灰色粒を多く含む	斜方向～横ナデ　指頭痕	斜方向～横ナデ	内面・外面：橙色	底部外面に凹部がある。
580	SA5	甕	口縁のみ	－	－	－	－	φ1～3㎜の灰白・にぶい赤褐、φ1㎜以下の橙・灰赤色粒を含む	口縁横ナデ	口縁横ナデ	内面・外面：にぶい黄橙色	
581	SA5	甑	口縁のみ	－	－	－	－	φ1～3㎜の灰・灰白・褐色粒を多く含む	口縁横ナデ	口縁横ナデ	内面・外面：浅黄橙色	
582	SA5	甕	口縁のみ	－	－	－	－	φ1～4㎜の茶褐・灰白色粒を多く含む	口縁横ナデ？	不明	内面・外面：浅黄橙色	外面にスス付着。
583	SA5	？	？	－	－	－	－	φ1～3㎜の褐・黄褐色粒を含む	ナデ	ミガキ	内面：浅黄橙色 外面：にぶい黄橙色	
584	SA5	甕	口縁ほか	－	－	－	－	φ1～5㎜のにぶい赤褐、φ1～2㎜の灰白・光沢ある黒色粒を含む	横ナデ	口唇ナデ　格子状タタキ後ナデ		
585	SA5	甕	胴部のみ	－	－	－	－	φ1～3㎜の灰褐・灰白・明赤褐、φ1㎜以下の光沢ある黒色粒を多く含む	ナデ	格子状タタキ後部分的に器具ナデ？	内面：浅黄橙色 外面：にぶい黄橙色	

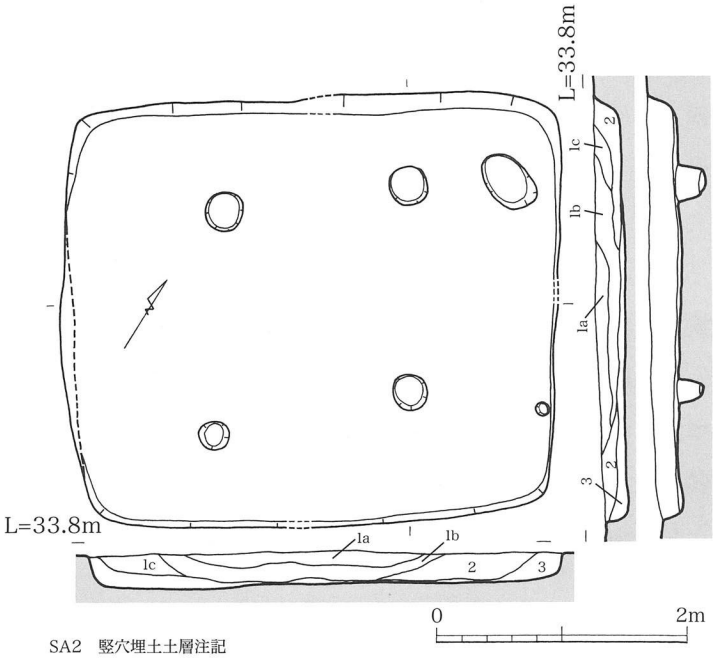
後半から後期初頭である。なお、竪穴中央部の黒褐色土中には、割礫が多く含まれていた。礫には赤化したものも多い。

SA2出土遺物（第77図）

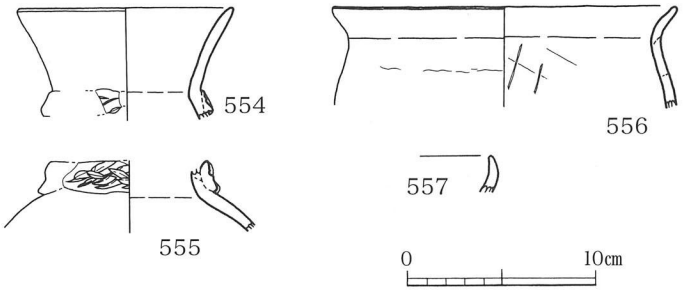
554～556はいずれも床面直上より出土した。554・555は頸部付け根に刻み目突帯をもつ壺、557は坏、556は甕であり、古墳中期から後期まで時期幅が存在する。

【　SA4　】（第78図・図版6）

A1区中央で検出され、0.5m南にSA6が位置する。竪穴の平面形は方形である。埋土は暗い褐色土を基本とし、色調から4層に分けられる。各層ともに少量の炭化物を含む。床面はおおむね平坦で、中央部には焼土層が広がる。柱穴は地山掘削面まで下げた段階で7本確認され、うち4本が主柱と考えられる。主柱穴間の芯々距離は1.6～1.8mで、対角線上にやや歪な平行四辺形の配置をとる。柱掘方は直径25cm程の円形プランで、深さは床面より30cmほどである。断面形は上端が大きく広がる。遺物から、中期後半から後期初頭である。なお、竪穴床面により削平された土坑2基が確認され、遺物から縄文早期のものである。



SA2　竪穴埋土土層注記
1a層：黒褐色土　　粒子は粗い。赤化礫を多量に含む。
1b層：黒褐色土　　1a層よりも粒子は細かい。赤化礫を含む。
1c層：黒褐色土　　1b層にくらべやや暗い。赤化礫は少ないながら含む。
2　層：暗褐色土　　粒子は粗く、柔らかい。
3　層：にぶい褐色土　粒子は細かい。地山に近い
※各層の細分については、a～bを付して表した。
たとえば大区分では1層であり、細分すると1a～層となる。



第77図　SA2および出土遺物実測図

第34表　古墳時代住居出土遺物観察表（3）

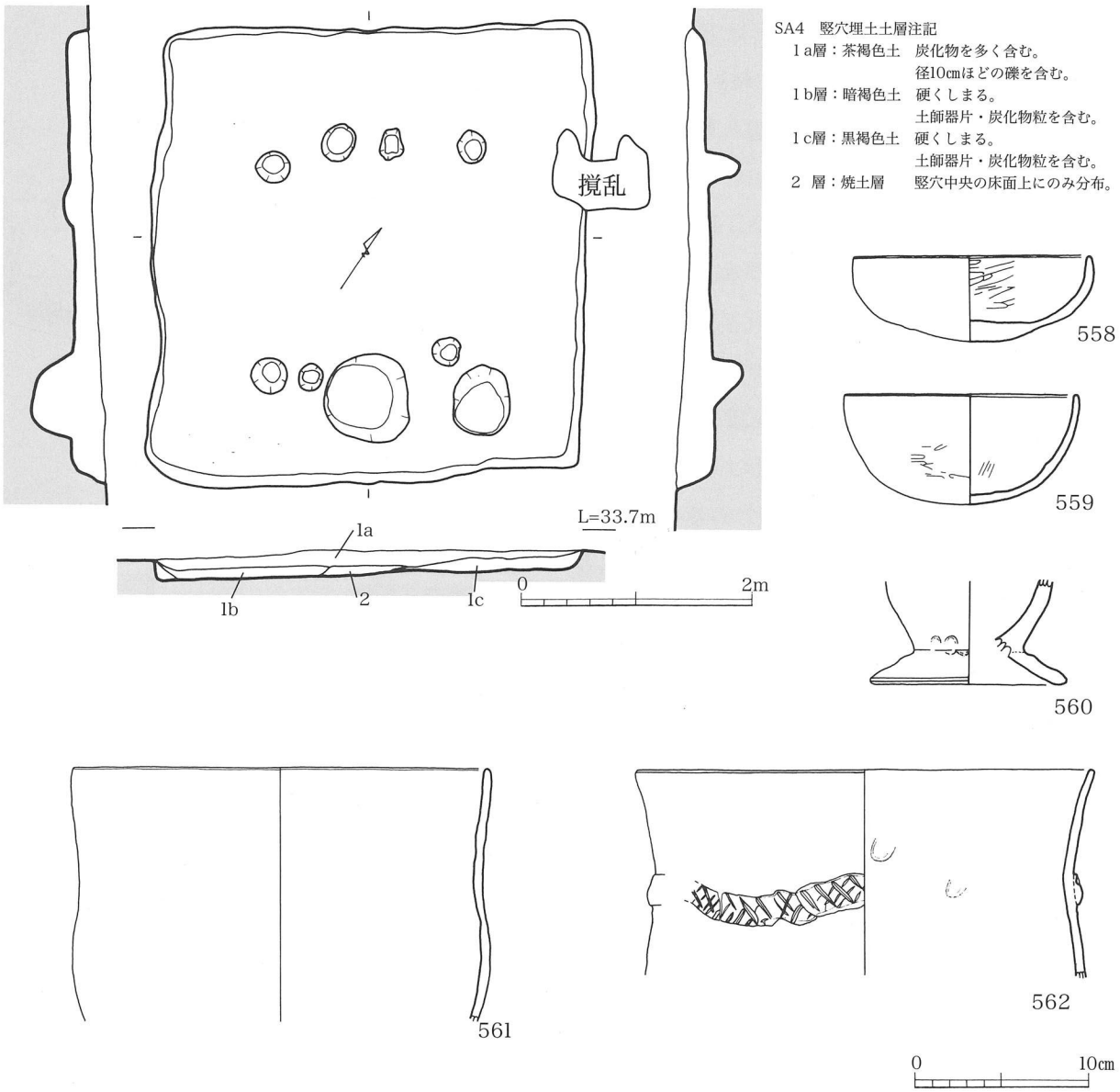
No	位置	器種	部位	法量（cm） 口径	器高	胴径	底径	胎土	調整 内面	外面	色調	備考
586	SA5	坏	完形	16.2	7.2	17.1	2.6	φ1～3mmの灰褐・灰白・褐灰・橙・光沢ある黒色粒を多く含む	ナデ（工具痕が一部残る）	口縁～底部ナデ	内面：にぶい黄橙色 外面：にぶい橙色	焼きひずみが顕著。
587	SA5	須恵器坏	完形	10.6	4.9	13.2	－	φ0.1～0.5mmの褐色粒を多く含む	横ナデ	横ナデ＋回転ヘラ削り	内面・外面：灰オリーブ色	

No		器種	部位	法量（cm） 長	幅	厚	重量	備考
563	SA5	棒状礫	砂岩					
564	SA5	棒状礫	砂岩					
565	SA5	棒状礫	砂岩					
566	SA5	棒状礫	砂岩					黒色の付着物（マンガンか）は自然に付いたもの。

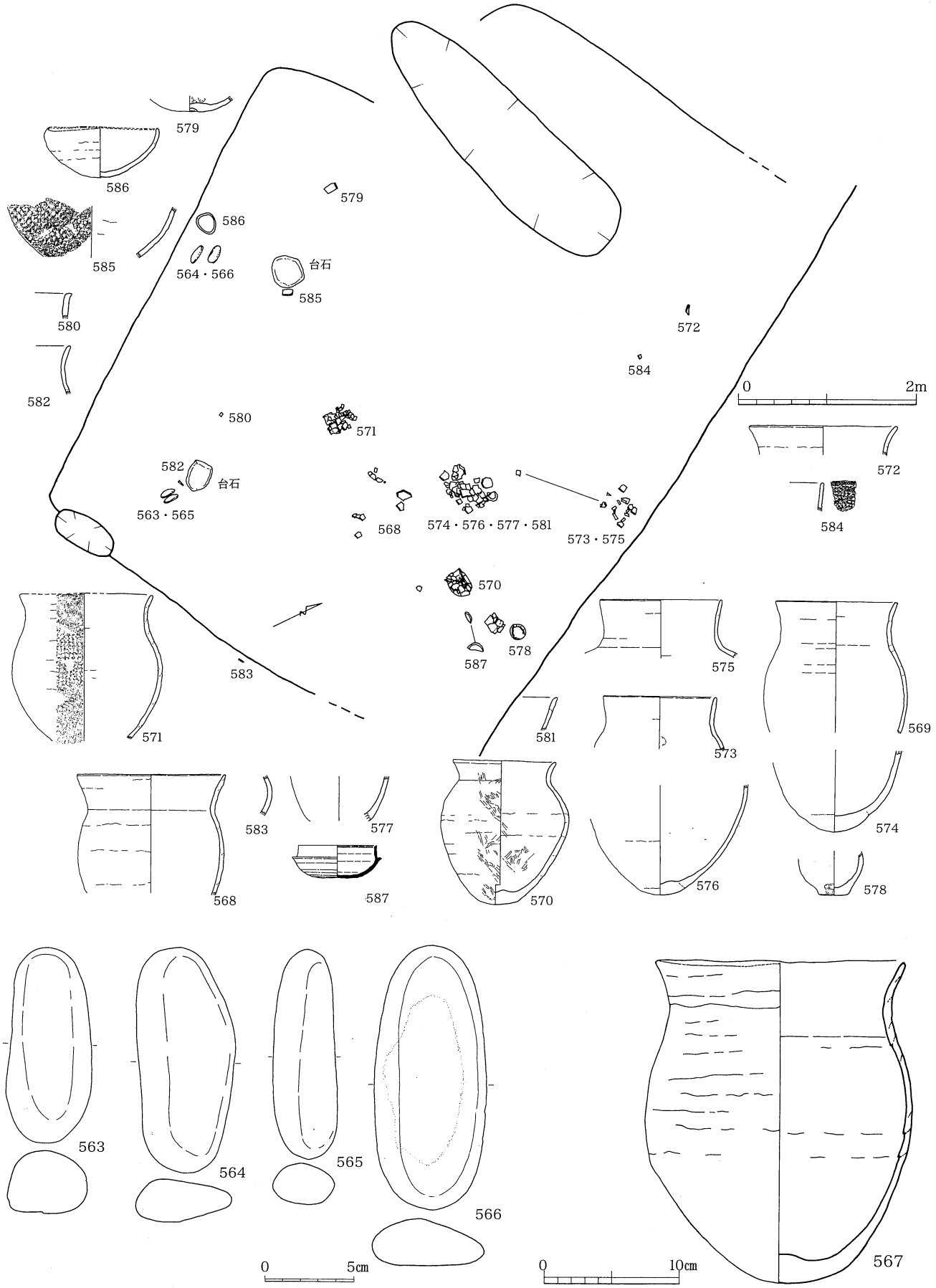
SA4 出土遺物（第78図）　558～562は竪穴床面付近より出土した。558・559は坏である。559の器高は口径の１／２程で体部は深く、口縁部は内湾する。558は559と口径はほぼ同じで、体部はやや浅く、底部は厚い。560は脚台付の甕であろうか。561・562は甕で、562の頸部には一条の刻み目突帯がめぐっている。

【　SA5　】（第79図）　Ａ１区中央に位置し、東端は調査区外にのびている。調査中の不手際により遺構プランを明確にしえていないが、調査中のメモや遺物分布から推して、第79図中の想定線のような一辺5.6～5.7m前後の方形プランであったと推定される。遺物は、とくに竪穴中央から南東隅にかけて、床面直上から土師器甕・壺、須恵器坏がまとまって出土した。完形品が多い。竪穴西よりには棒状礫・台石と思われる平石が出土した。

なお、SA5北側には、SA5に切られた住居１軒があった可能性がある。



第78図　SA4および出土遺物実測図



第79図　SA５遺物出土状況（上段）
SA５出土遺物実測図（下段）

SA5 出土遺物（第79・80図）

須恵器　　坏（587）は、受部が器高に対して高くまたほぼ直立する。TK208並行である。

土師器　　甕（568～573・574・576・577・579・584・585）には大小がみられる。器形は、胴部上半から中央に最大径を持ち、頸部の屈曲は内外面ともに弱く、稜線も不明瞭である。底部は尖底ぎみの丸底で、574のように大きく膨らむもの、570・576のように内面にこぶを持つものがある。571・584・585の外面は、格子目タタキの後ナデである。壺には大小があり、大形（573・575）は口縁付近しかないものの、口縁は直立ぎみに外傾する。小形（578）は平底である。581は口縁のみであるが、直線的に外傾し、口唇は内に向かって横ナデされることから、甑の可能性がある。580も甑か。586は坏で、口径16.2cmに対し器高7.2cmと高く、また体部は外に丸く広がり口縁はやや内傾する。焼き歪みが大きい。

石　器　　563～566は棒状の砂岩礫である。敲打痕・磨痕といった使用痕はみられない。563・565は南西隅付近、564・566は西壁際の竪穴床面から、２点ずつまとまって出土した。このほか、30×25cmほどの平石２点がある。尾鈴山酸性岩類製であり、被熱痕・敲打痕といった使用痕は確認されない。台石であろうか。

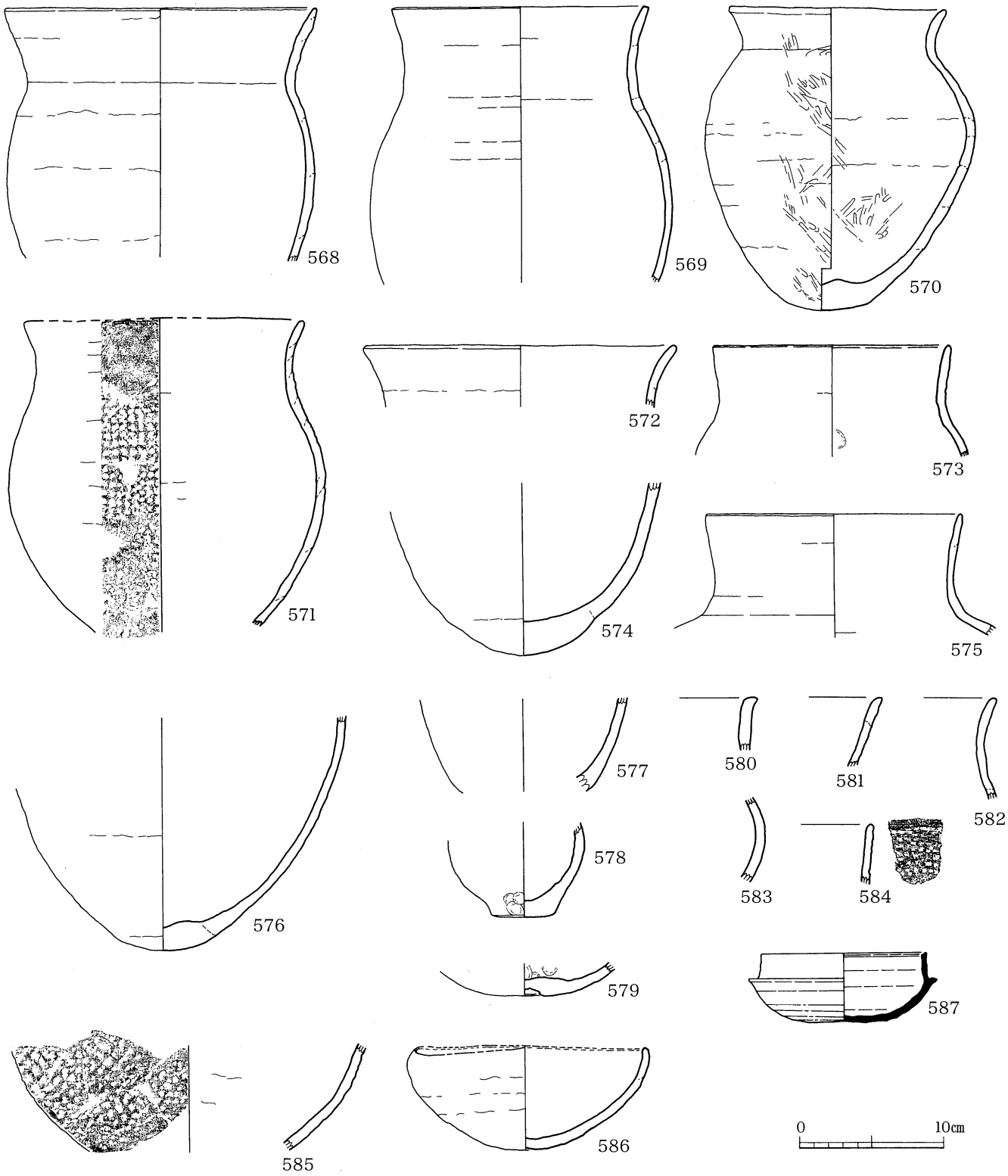
【　SA10　】（第81図・図版６）　A2区中央南、丘陵端側に位置する。南半分は後世の溝によって削平され、南壁の立ち上がりは失われる。床面はおおむね平坦である。主柱穴は地山掘削面まで下げた段階で４本確認された。主柱穴間の芯々距離は2.8mほどで、北側の東西間が2.1mとせまい。対角線上にやや歪な平行四辺形の配置をとる。柱掘方は直径70cm程の円形プランと大きく、深さは床面より40cmほどを測る。断面形は上端が大きく広がるもので、段を持つことから柱材が抜き取られた可能性もある。住居中央からやや北壁よりには、土器埋設炉がある。この甕から、終末期の住居である。

なお、竪穴床面により削平された土坑３基が確認されたが、非常に残存が悪く、時期や性格等は不詳である。

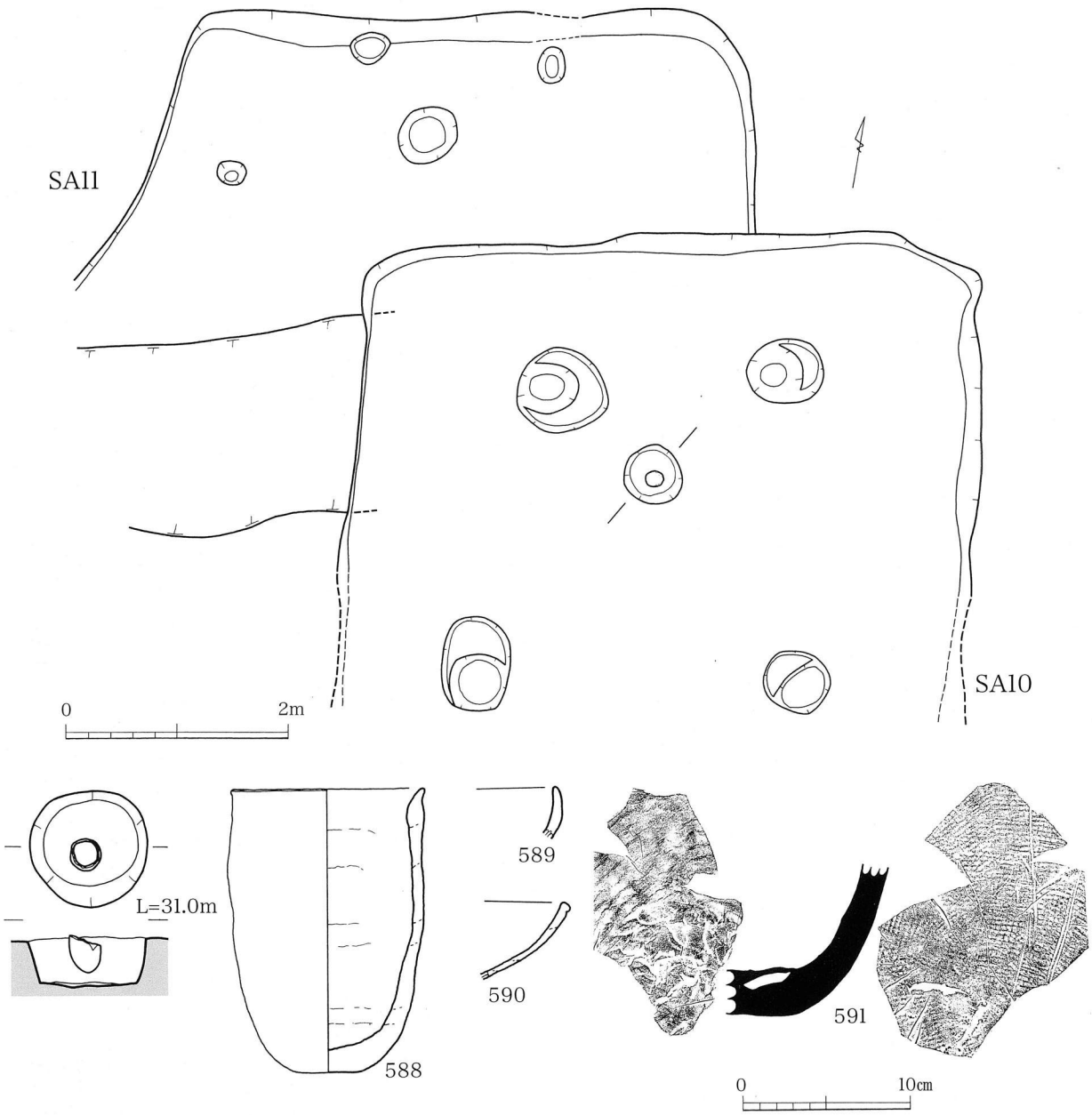
SA10 土器埋設炉（第81図・図版６）　土坑は直径52cmのほぼ円形で、竪穴床掘削面から深さ20cm、ほぼ垂直に掘り込まれ床面は平らである。土坑埋土は暗褐色を呈し、分層はできない。甕（588）は土坑内に、口縁を上にして立位で置かれ、甕底部は土坑床面から５cm浮いた位置にある。甕の口縁は既に失われ、破片が甕内側に倒れ込んでいた。甕内部の堆積土については、乾燥・水洗を実施したがなんら検出されなかった。甕は砲弾形で、胴部は直立し口唇部のみ外反する。内面の接合痕が非常に明瞭に残っている。

SA10 出土遺物（第81図・図版25）　588は埋設された土器である。器形は砲弾形で、長胴である。粘土継ぎ目が顕著に残る。589～591は竪穴埋土中より出土した。590の器形は不明で、皿状のものか。591は須恵器甕の底部であり、焼き歪んでいる。

【　SA11　】（第81図）　A2区中央南、丘陵端側に位置し、SA10に切られている。柱穴は４ヶ所掘り込まれるが、規模等から主柱穴といえるものはない。埋土は暗褐色土であり、遺物などの混入もほとん



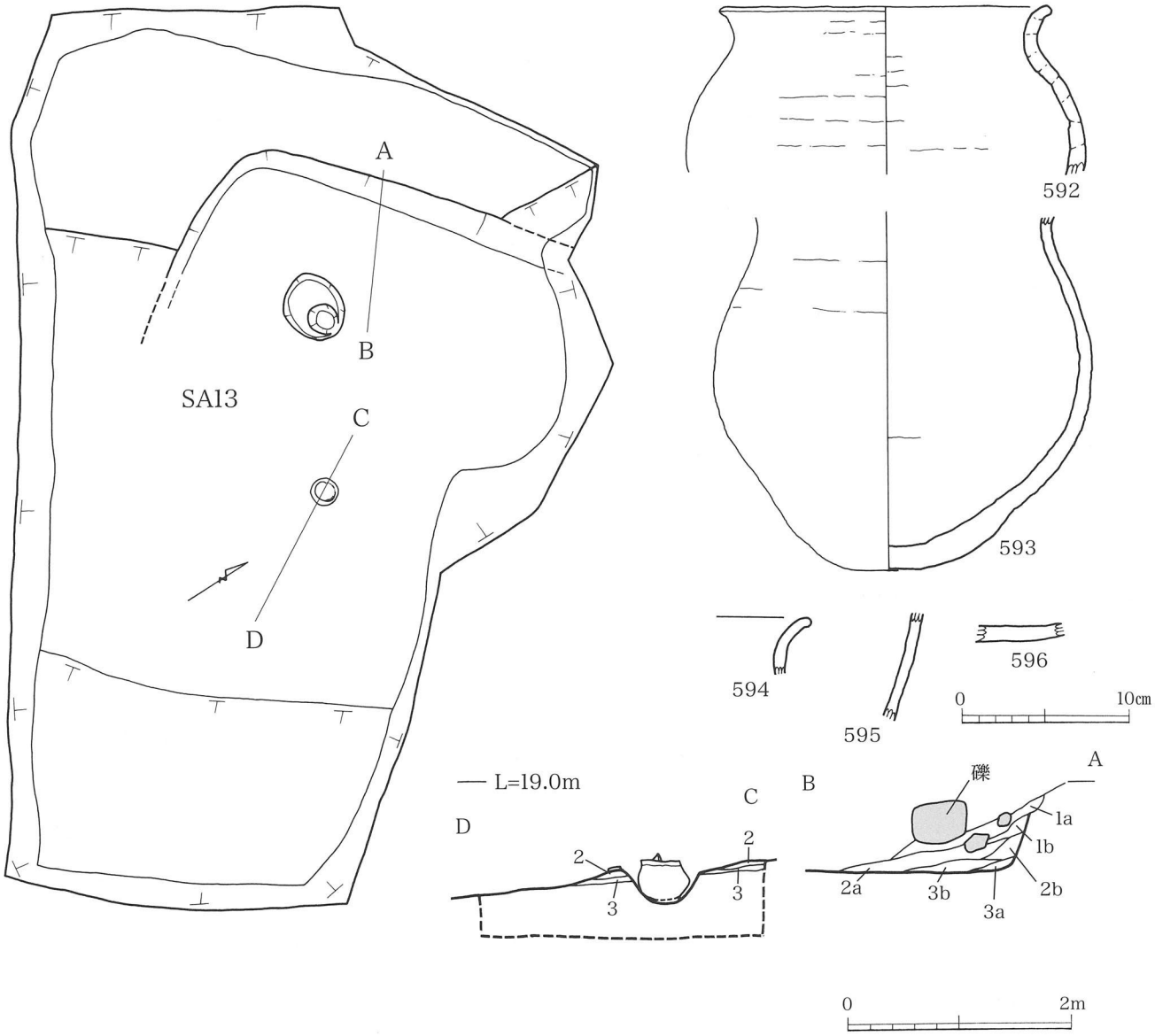
第80図　SA5出土遺物実測図（2）



第81図　SA10・SA11およびSA10土器埋設炉・出土遺物実測図

ど見られなかった。

【　SA13　】(第82図・図版6)　SA13は他の住居群と異なり、B区斜面上のわずかなテラス部分に位置する。北から南に傾斜する斜面であったと推定され、後世の段切りにより、北壁側のみ残存していた。住居位置の標高は約20mで、丘陵頂部からの比高差は15mである。主柱穴は北西隅の1本のみ確認された。竪穴の埋土は比較的明るい褐色土を基本とし、埋土1層中には斜面上から崩落した巨礫が含まれ



SA13　竪穴埋土土層注記
1a層：褐色土　　粒子は粗い。巨礫を含む。
1b層：明褐色土　　1a層よりも粒子は粗い。2～10㎜大の小砂利を多く含む。
2a層：明褐色土　　1層にくらべ粒子は細かい。細粒の砂利を多く含む。
2b層：褐色土　　粒子は粗く、軟らかい。
3a層：にぶい褐色土　粒子は細かい。
3b層：にぶい褐色土　3a層より若干粗粒。土師器片を含む。
※　各層の細分については、a～bを付して表した。
たとえば大区分では1層であり、細分すると1a・1b層となる。

第82図　SA13および土器埋設炉・出土遺物実測図

ていた。巨礫は、斜面部に露出した基盤礫層中のものである。竪穴中央付近には土器埋設炉がある。遺物から古墳時代終末期である。

なお、住居南側は風倒木によって撹乱されていた。

SA13 土器埋設炉（第82図・図版25）　土坑は直径25cmのほぼ円形で、竪穴床掘削面から深さ15cm、甕がちょうど収まるような格好で掘り込まれる。床面はボウル状をする。甕（593）は口縁を上にし

て立位で置かれる。甕の口縁から頸部はない。甕内部の堆積土については、乾燥・水洗を実施したがなんら検出されなかった。甕は球形胴で、胴部中央から下半に最大径がある。胎土は粗く、また接合痕が内外面ともに顕著に残る。

SA13 出土遺物（第82図・図版25）

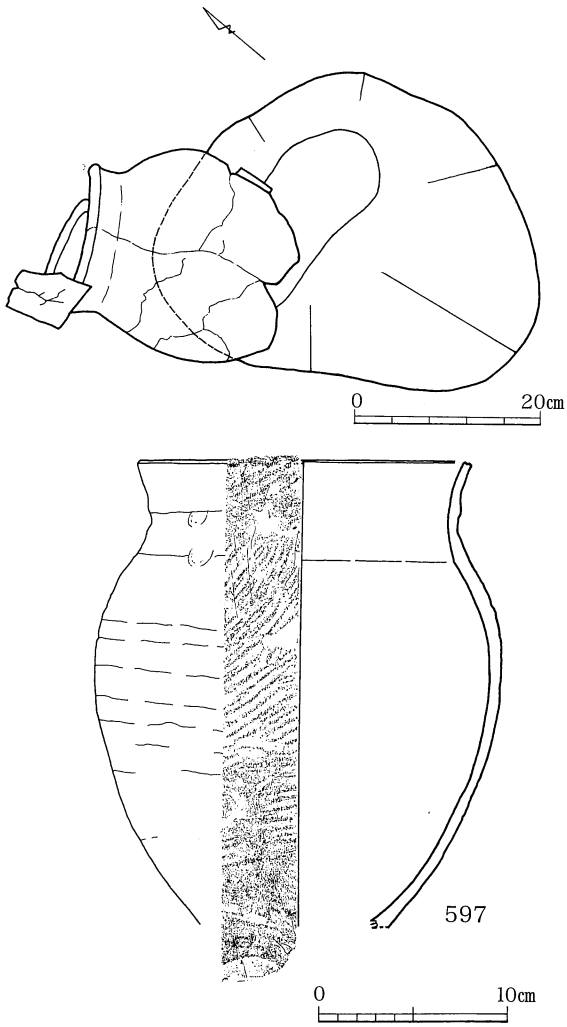
593は土器埋設炉である。592は竪穴床面直上に散在していた。596は竪穴北西隅の床面直上で出土した。594・595は竪穴南の既削平部分からの出土であり、SA13に伴わない可能性もある。

土　坑

該期の土坑として明確なのは、SC１・７・13のみである。このほか、時期不明中に該期のものが含まれる可能性もある。

【　SC７　】（第83図）

土坑は0.5m×0.4mの楕円形で、立ち上がりは外に向かって大きく開く。土坑は散礫２の分布と重なった位置にあり、土坑埋土中にも多量の赤化礫が混入していた。甕（597）は土坑中に横倒しで出土した。周辺に関連遺構はみられない。



第83図　SC7および出土遺物実測図

SC７ 出土遺物（第83図・図版23）　甕は斜方向のタタキを持つ。外面胴部中位から下位にかけてススの付着がみられ、日常使用の甕である。底部が失われている。

SC７のほか、SC１・SC13で若干の甕・壺（598～601）が出土する。土坑は、竪穴住居に付随するもの等の可能性を考慮し、周辺の柱穴等との配置を検討したが、明確な関係は見いだせない。遺物はいずれも古墳時代中期後半から後期初頭に収まり、竪穴住居群と同時期である。

溝

【　SE1　】（第73図）

SE１はA１区西側に、調査区を南東～北西に縦断するように検出された。SA2の主軸方向とはほぼ同一であり、時期的に近接するものと推定される。

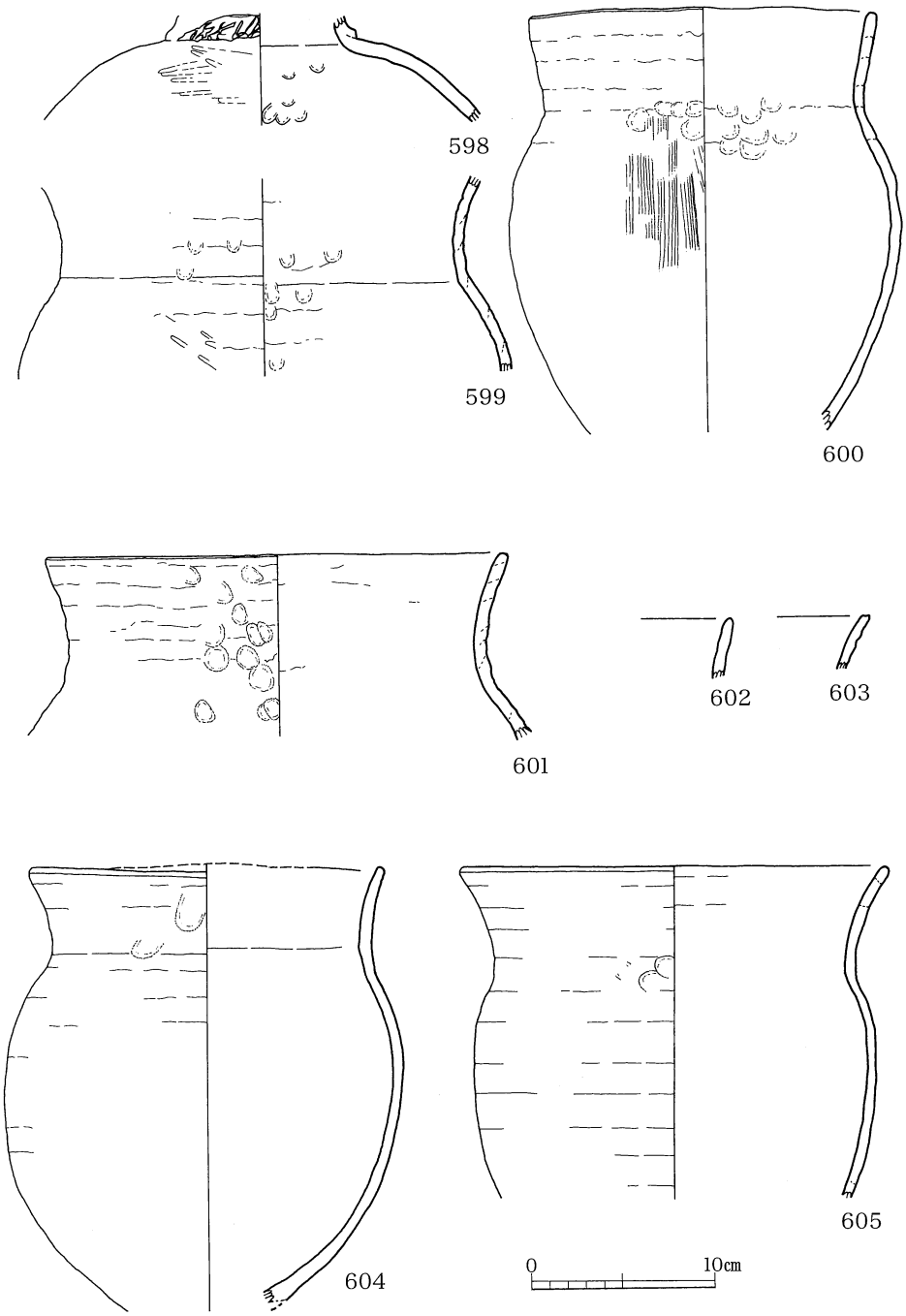
SE１は、検出面で幅0.9m、下場幅0.4m、床面までの残深0.54mである。埋土中には、特に北半において多量の礫の混入が確認された。礫径、形状は多様で、その多くは赤化していた。この礫の特徴はSE１周辺に残された縄文早期の集石構成礫と似通っており、SE１の埋没過程で混入したものと推測される。礫のほか、埋土中から602・603が出土した。

【　SE4　】
(第73図)

SE４は、野首１号墳周溝周辺を覆っていた黒色土を指す。遺構であるか明確でないが、甕（604・605）が含まれていた。性格は不明。

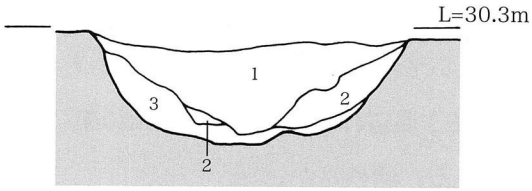
【　SE5　】
(第４・85図)

SE５はA2区丘陵端の黒色土を除いた時点で検出された。走行方向は、丘陵端から丘陵斜面を下っている。溝埋土からは時期の判別できる遺物の出土はないが、溝を覆っていた黒色土中から、弥生時代から古墳時代・古代の土器が出土した（606～614）。



第84図　土坑・溝等出土遺物実測図（１）

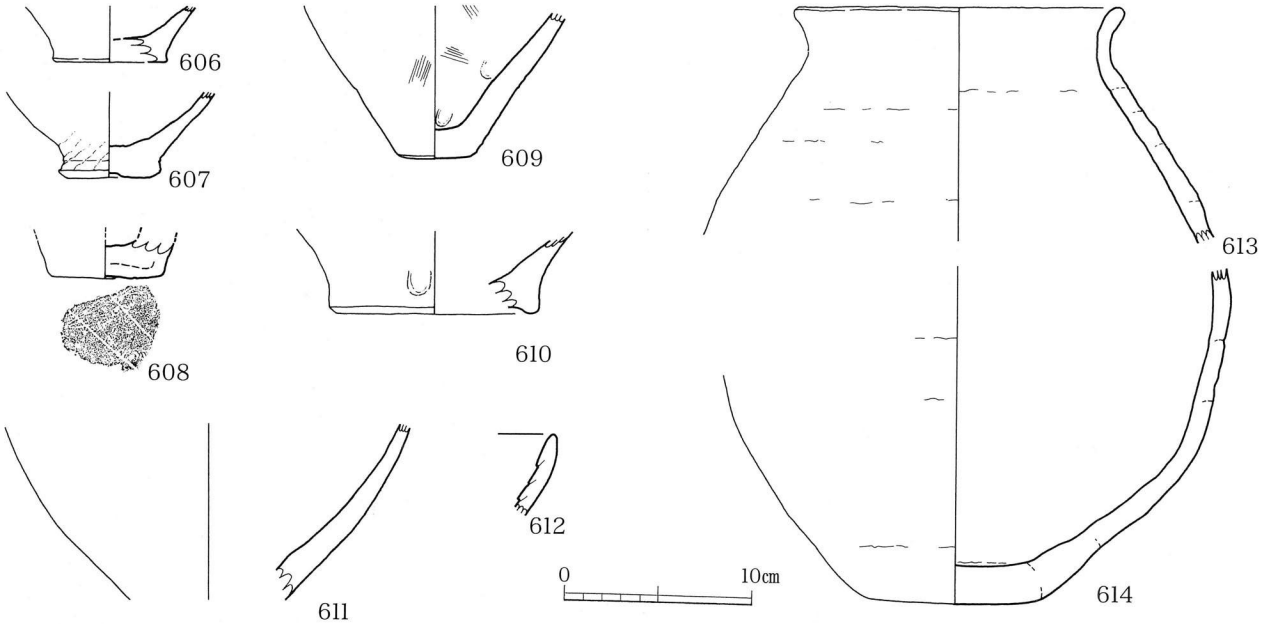
このほか、A2区東端で、白色粘土と炭化物・焼土粒の広がる箇所があった。範囲は30cm四方の円形で、小トレンチを設定し断面を確認したところ、白色粘土等はわずかに1cmほど残存するばかりであった。これらの性格については、削平の著しいカマドの可能性も想起されるが断定できない。周辺には縄文早期の炉穴群が分布する。



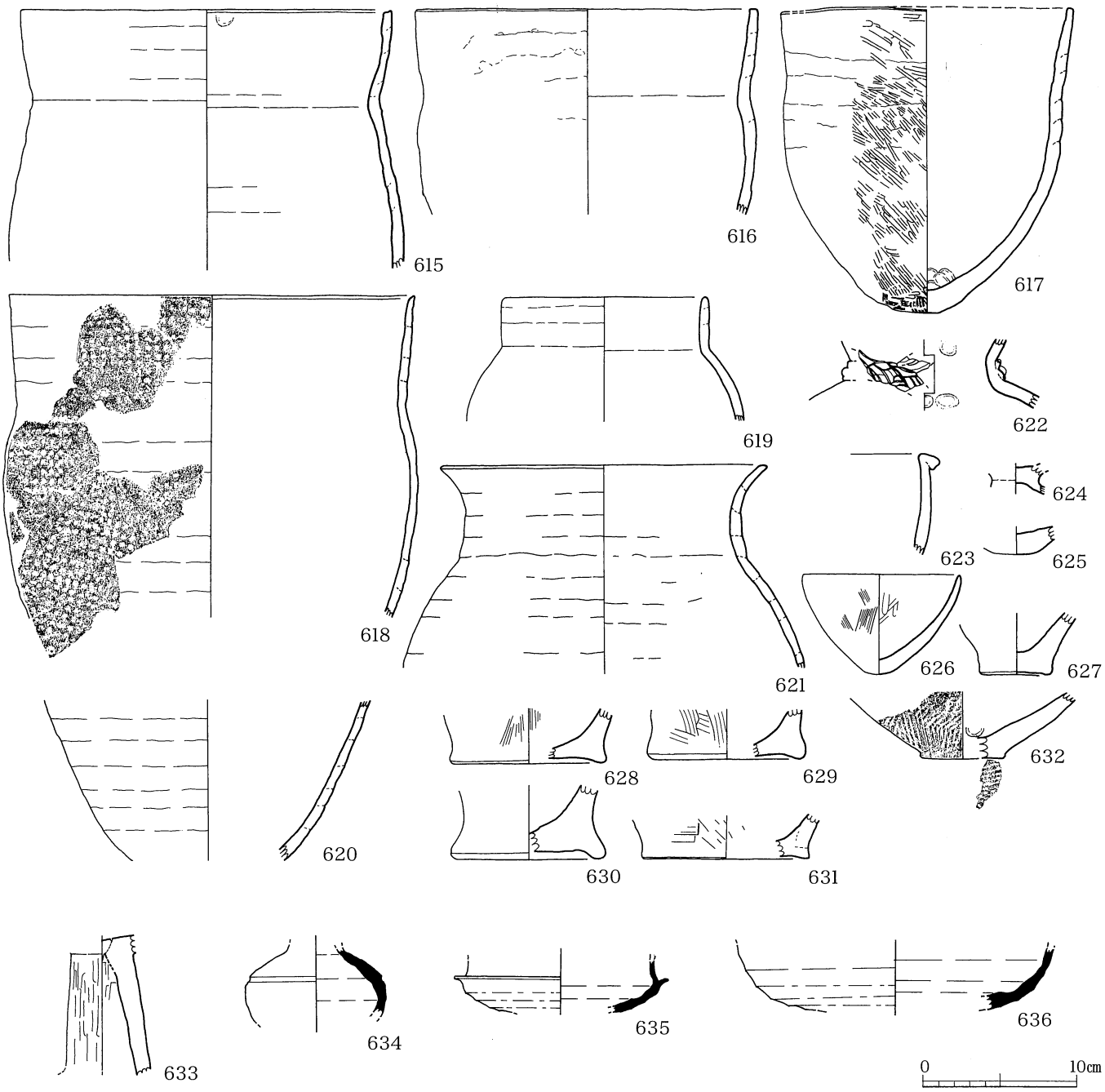
SE5　埋土土層注記
1層：黒褐色土　　粒子が細かい
2層：にぶい黄褐色土　1～2層の暫移層
3層：明赤褐色土　　地山の崩落か

第85図　SE5土層断面図

なお、遺構検出面や表土中あるいは中・近世などあきらかに他時期の遺構埋土中より、数多くの弥生～古墳時代の遺物が採集された（615～636）。



第86図　土坑・溝等出土遺物実測図（2）



第87図　調査区内採集遺物実測図

第35表　古墳時代住居ほか出土遺物観察表

No.	位置	器種	部位	法量（cm） 口径	器高	胴径	底径	胎土	調整 内面	外面	色調	備考
588	SA10	甕	完形	11.7	17.1	11.9	3.7	φ1～7mmの灰褐・黄灰・褐・灰白色粒を含む	ナデ	縦器具ナデ+ナデ	内面：にぶい黄橙色　外面：橙色	砲弾形
589	SA10	坏	口縁のみ	－	－	－	－	φ1～3mmの褐・灰白・褐灰色粒を含む	横ナデ	横ナデ	内面・外面：にぶい黄橙色	
590	SA10	甕	口縁付近	－	－	－	－	φ1～4mmの褐・褐灰・にぶい褐色粒を含む	縦ミガキ	口唇横ナデ　ほか斜方向ナデ	内面・外面：にぶい黄橙色	
591	SA10	須恵器甕	底部のみ	－	－	－	－	φ1～5mmの灰白色粒を含む	タタキ	格子目タタキ	内面：灰黄褐色　外面：灰色	焼きぶくれ・焼きひずみ顕著。焼成は堅緻
592	SA13	甕	口縁から胴部	20.0	－	24.0	－	φ1～6mmの灰褐・灰白・黒褐色粒を含む	ナデ	ナデ	内面・外面：にぶい黄橙色	接合痕顕著。口唇は丸みがありやや外反する。胴は大きく張る。
593	SA13	甕	口縁欠	－	－	22.9	3.5	φ1～6mmの赤・にぶい赤褐・褐灰粒多くを含む	横器具ナデ+ナデ	縦器具ナデ+ナデ	内面・外面：にぶい黄橙色	球形胴。
594	SA13	甕	口縁	－	－	－	－	φ1～5mmの褐・黄褐色粒を含む	ナデ	ナデ	内面・外面：にぶい黄橙色	
595	SA13		胴部	－	－	－	－	φ1～5mmの褐・黄褐・灰白色粒を含む	ナデ	ナデ	内面・外面：にぶい橙色	
596	SA13	甕	底部	－	－	－	－	φ1～4mmの灰白・褐色粒を含む	ナデ	ナデ？	内面・外面：橙色	
597	SC7	甕	底部欠	18.0	－	21.8	－	φ1～4mmの褐・茶褐・灰白色粒を含む	口縁横ナデ・胴部斜方向ナデ	口唇ナデ　口縁斜方向タタキ後ナデ胴部タタキ後ナデ	内面：にぶい黄橙色　外面：にぶい黄橙色	胴部中部～下部にススが付着。
598	SC1	壺	肩部	－	－	－	－	φ1～4mmの灰・灰黄褐・褐・黒褐色粒を含む	ナデ(比較的丁寧)	タタキ後ヘラミガキ	内面・外面：にぶい黄橙色	頸部に貼付突帯。突帯上には工具による刻みあり。外面にススが付着。
599	SC1	甕	頸部	－	－	－	－	φ1～4mmの暗褐・灰白、φ1～2mmの黒褐色粒を含む	ナデ	ヘラミガキ＋一部指頭痕	内面：にぶい黄橙色　外面：にぶい橙色	
600	SC1	甕	口縁から胴部	18.8	－	21.7	－	φ1～5mmの茶褐・褐・灰・灰白色粒を多く含む	斜方向ナデ	口縁ナデ　胴部縦ハケ後ナデ	内面：にぶい黄橙色　外面：明褐灰色	内外面ともに頸部に指頭痕顕著。頸部から胴部上半にススが付着。
601	SC13	甕	口縁から頸部	24.6	－	－	－	φ1～4mmの淡黄・黄灰・にぶい褐・黒・灰白色粒を含む	横ナデ+ナデ	口縁ナデ　胴部斜方向タタキ	内面：黄橙色　外面：浅黄橙色	外面に指頭痕目立つ。外面にススが付着。
602	SE1	甕	口縁のみ	－	－	－	－	φ1～3mmのにぶい橙・灰白色粒を含む	横ナデ	横ナデ	内面・外面：浅黄橙色	
603	SE1	甕	口縁のみ	－	－	－	－	φ1～3mm褐灰・灰白・赤褐色粒を含む	横ナデ	斜方向タタキ後ナデか？	内面：浅黄橙色　外面：にぶい黄橙色	
604	SE4	甕	底部欠	19.6	－	22.2	－	φ1～5mmの灰褐・灰白・黄褐色粒を含む	ミガキか	口唇ナデで面取りほかナデ	内面：灰褐色　外面：橙色	おそらく丸底で球形胴。推定器高25cm。
605	SE4	甕	口縁から頸部	23.1	－	22.2	－	φ1～4mmの褐・灰白・黄褐色粒を含む	ナデ	ナデ	内面・外面：にぶい橙色	外面にススが付着。
606	EB	甕	底部	－	－	－	6.2	φ1～4mmの褐灰・茶褐色粒を多く含む	横・斜方向ナデ	斜方向ナデ	内面・外面：浅黄橙色	
607	EB	甕	底部	－	－	－	5.5	φ1～3mmの灰白・黄褐・褐色粒を含む	ナデ	ナデ	内面・外面：にぶい黄橙色	底部には自重のため潰れねじれた痕跡あり。
608	T3	甕	底部	－	－	－	6.0	φ1～3mmの灰・褐色粒を多く含む	指頭痕あり	ナデ	内面・外面：橙色	底部に木の葉痕。
609	EB	甕	底部	－	－	－	4.1	φ1～6mmの褐・灰白色粒を含む	ハケ　底部のみ指頭痕＋ナデ	ハケ	内面：灰褐色　外面：にぶい黄橙	
610	EB	甕	底部	－	－	－	11.2	φ1～4mmの灰白・浅黄・茶色粒を含む	3.5mm幅の工具痕	横・斜方向タタキ？　くびれ部にナデ	内面：灰褐色　外面：にぶい黄橙	
611	SE5	甕	底部付近	－	－	－	－	φ1～5mmの褐灰・灰白色粒を多く含む	ナデ		内面：灰褐色　外面：橙色	外面に一部ススが付着。
612	T13EB	甕	口縁のみ	－	－	－	－	φ1～5mmの灰白・にぶい赤褐・灰色粒を含む	口唇は、端部から内に向かってつまみ入れるように成	ナデ	内面・外面：黄橙色	
613	T13EB	壺	口縁から胴部	17.0	－	－	－	φ1～4mmの茶・灰・灰白色粒をかなり多く含む	横ナデ	口縁横ナデ　ほかは風化のため不明	内面・外面：浅黄橙色	
614	T13EB	壺	底部	－	－	14.8	8.6	φ1～4mmの茶・灰・灰白色粒をかなり多く含む	風化のため不明	風化のため不明	内面・外面：浅黄橙色	

第36表　調査区内採集遺物観察表

No	位置	器種	部位	法量（cm） 口径	器高	胴径	底径	胎土	調整 内面	外面	色調	備考
615	点	甕	口縁から胴部	24.2	－	25.9	－	φ1～4㎜の褐・黄褐・灰白色粒を含む	ナデ	ナデ	内面：にぶい黄橙色　外面：にぶい褐色	外面にスス付着。
616	点	甕	口縁から胴部	22.4	－	22.2	－	φ1～4㎜の灰褐・褐・黄褐色粒を含む	ナデ	ナデ	内面：にぶい橙色　外面：にぶい黄橙色	外面にスス付着。
617	SQ2	甕	完形	18.8	20.2	18.3	－	φ1～7㎜の灰・褐、φ1～3㎜の灰白色粒を多く含む	ナデ	口縁～胴部斜方向ヘラミガキ　底部横・斜方向平行タタキ	内面・外面：橙色	外面は黒斑顕著。最大径は口縁にあり、胴部の張らないダラ甕。
618	点	甕	口縁から胴部	26.6	－	27.2	－	φ1～7㎜の黄褐・灰白色粒を含む	斜方向ナデ	口唇ナデ　口縁～胴部格子状タタキ	内面・外面：にぶい黄橙色	外面にスス付着。
619	点	壺	口縁から胴部	13.6	－	－	－	φ1～3㎜の褐・黄褐・灰白色粒を含む	ナデ	口唇ナデ　ほか斜方向ナデ	内面・外面：にぶい橙色	
620	点	甕	胴部	－	－	－	－	φ1～8㎜の灰褐・灰白色粒を含む	ナデ	ナデ	内面：にぶい黄色　外面：灰黄色	外面にスス付着。
621		甕	口縁から胴部	21.4	－	－	－	φ1～5㎜の灰白・灰褐・黄褐色粒を含む	ナデ	口縁ナデ　胴部斜方向タタキ	内面：黄灰色　外面：灰黄色	
622	A	壺	頸部のみ	－	－	－	－	φ1～3㎜の褐灰・灰白色粒を含む	ナデ	ナデ	内面・外面：橙色	頸部に貼付突帯。突帯上には工具による刻みあり。外面にスス付着。
623	SN1	甑	口縁のみ	－	－	－	－	φ1～4㎜の灰白・褐色粒を含む	丁寧なナデ	丁寧なナデ	内面・外面：にぶい黄橙色	口唇を外方に折り返す。
624	B	高坏		－	－	－	－	φ1㎜以下の褐・灰白・光沢ある黒色粒を含む	不明	不明	内面・外面：橙色	
625	点	甕？	底部のみ	－	－	－	2.7	φ1～6㎜のにぶい赤橙・黒・灰白色粒を含む	ナデ	ナデ	内面：橙色　外面：褐灰色	やや平底。
626	TA	鉢？	完形	10.2	6.6	10.4	1.8	φ1～4㎜の褐・茶褐・灰白色粒を含む	ミガキ	口縁～胴部ハケ　底部ナデ	内面・外面：にぶい橙色	外面底部付近にスス付着。
627	点	甕？	底部のみ	－	－	－	4.8	φ1～3㎜の褐・灰白・光沢ある黒色粒を含む	ナデ	ナデ？	内面・外面：橙色	
628	A	甕	底部のみ	－	－	－	10.3	φ1～3㎜のガラス質・黄灰・灰白色粒を含む	ハケ？	ハケ？	内面：黄灰色　外面：にぶい黄橙色	
629	A	甕	底部のみ	－	－	－	10.4	φ1～2.5㎜の褐・茶褐・灰白色粒を含む	ハケ？	ハケ？	内面・外面：にぶい橙色	
630	点	甕	底部のみ	－	－	－	9.3	φ1～3㎜の褐灰・明褐・灰白色粒を含む	横方向の条痕？	ナデ	内面：淡黄色　外面：橙色	やや上げ底。
631	点	甕	底部のみ	－	－	－	10.7	φ1～4㎜の黄橙・灰白色粒を含む	ナデ	ナデ	内面・外面：にぶい橙色	
632	SN1	？	底部のみ	－	－	－	5.6	φ1～4㎜の褐・茶褐・灰白色粒を含む			内面・外面：にぶい黄橙色	
633	T7	高坏	脚部	－	－	－	－	φ1～3㎜の灰・灰白・赤褐色粒を含む	ナデ	縦方向にヘラミガキ	内面・外面：浅黄橙色	
634	B	鉢	胴部のみ	－	－	9.2	－	精良	回転横ナデ	回転横ナデ	内面・外面：灰色	やや丸みを持ちつつ算盤玉状を指向する。TK217平行か。
635	点	高坏	坏部のみ	11.9	－	14.2	－	精良	回転横ナデ	坏体部回転横ヘラケズリ	内面・外面：灰色	底部の状況から、方形透かし窓の切り込みを確認できる（3方透かし）。坏部よりTK23～TK47平行の短脚の高坏か。
636	B	台付長頸壺	胴部下半のみ	－	－	－	－	φ1㎜以下の白色砂粒をわずかに含む	回転横ナデ	回転横ナデ	内面・外面：灰色	台部を欠損。

2　野首１号墳

古墳の位置と現況（第73図・巻頭図版６）

野首１号墳は丘陵端に築かれ、丘陵南に入る谷に向かって開口する。さらに、調査の過程で、調査区外の斜面に、野首１号墳に近接してもう１基古墳が確認された。新古墳は、古墳築造面の高低差はあるものの、野首１号墳に近接すること、開口方向がほぼ同じであることから野首１号墳と一群のものであり、新古墳を野首２号墳とした。

１号墳の調査の方法と経過・概要（図版５）

調査当初、古墳の存在はまったく予想されていなかった。確認調査T10で溝が検出され、出土土器から弥生後期の溝と判断していた。そこで、溝上部に堆積した黒色土を除いていくと、溝は円形にめぐるとわかり、さらに、溝の内側に巨石が「コ」の字に露出した。この時点ではじめて、円形にめぐる溝は古墳周溝、巨石は上部を削平された石室玄室と判明した。

玄室内側には、崩落した玄室石材と土砂が詰まっており、床面までの深さなどがまったく不明な状態であった。そこで、玄室の軸線を交叉する畦を残したうえで、奥壁・側壁１段目の上半分が露出するまで一気に掘り下げた。崩落した石材についてはチェーンブロックで除いた。遺物は、床面上から須恵器坏、鉄製武器・馬具類、耳環などが出土した。周溝は畦２ヶ所を残して掘り上げ、周溝床面上から須恵器大甕・提瓶・瓿などが出土した。記録方法としては、石室・周溝を1／20、石室内、周溝内の遺物類の出土状況を1／10で図化した。

野首１号墳は、調査時においてすでに近世の溝などにより大きく削平されていた。現況は、玄室壁面2～3段目までが残存していた。なお、玄室の羨道側半分、周溝南半分については、調査区外にのびるため未調査である。

なお、調査の過程で古墳の保存の方向性が示されることとなった。したがって、石室石材の解体調査や周溝・墳丘部分にかかる縄文時代等の遺構への精査はおこなっていない。石室・周溝については土嚢袋を充填して保護している。

埋葬施設

墳　丘・周　溝（第88・89・91図・図版５）

墳丘は、玄室規模や丘陵の地勢から、おそらく低い盛土をもつ円墳であったと推定される。墳丘直径は図上復元で約7.2mである。墳丘の高さについては、削平のため不詳である。

周溝の調査は約半周までとなったが、おそらくやや隅丸気味に円形にめぐると推定される。断面は逆台形を基本とし、検出面で幅2.6～2.8m、底面で幅1.0～1.4mを測る。底面の高さは、ベルト１で標高30.9m、ベルト２で標高30.3mとなり、底面は奥壁側が最も高く両側壁側に向かって傾斜する。周溝奥壁側の底面上には、瓿、提瓶、須恵器大甕・中甕がまとまって出土した。これらは、底面にはりつく、一部の資料はめり込むような出土位置であった。周溝埋土は黒褐色土を基本とし、埋土中には、古墳時代後期土器、縄文土器・石器の小片などが含まれる。堆積状況から、周溝は自然に埋没したものであろう。

石室掘方

玄室の掘方は、削平面でのみ確認できた。調査については、保存の方向性が出てきたため、掘方の精査はおこなっていない。掘方の幅は、削平面（玄室壁２～３段目上面）で4.1mある。掘方壁と玄室石材との隙間には、ピンクに近い色調の粘質土を詰め、裏込めとしている。

石室の石材・裏込めの供給源（巻頭図版８）

石室の石材のうち、石室内側に露出する壁材は、一部すき間を埋める小形礫に砂岩が用いられるほかは、尾鈴山酸性岩類で占められる。裏込め土は、ピンクに近い色調や角閃石が含まれることから、Aso-4起源のものである。

石室石材・裏込め土については、発掘調査終了後の道路建設にともなう掘削工事中に、丘陵壁面に同質の礫・粘質土を確認した。石室石材は本遺跡基本層序のＸＶ層、裏込めの粘質土はXIV層（本報告第Ｖ章を参照）から採取されたと推測される。おそらくは、谷に向かって露出した露頭等から採取されたのであろう。なお、眼前を流れる小丸川河原の礫は小振りで、石室壁材にはなりえない。

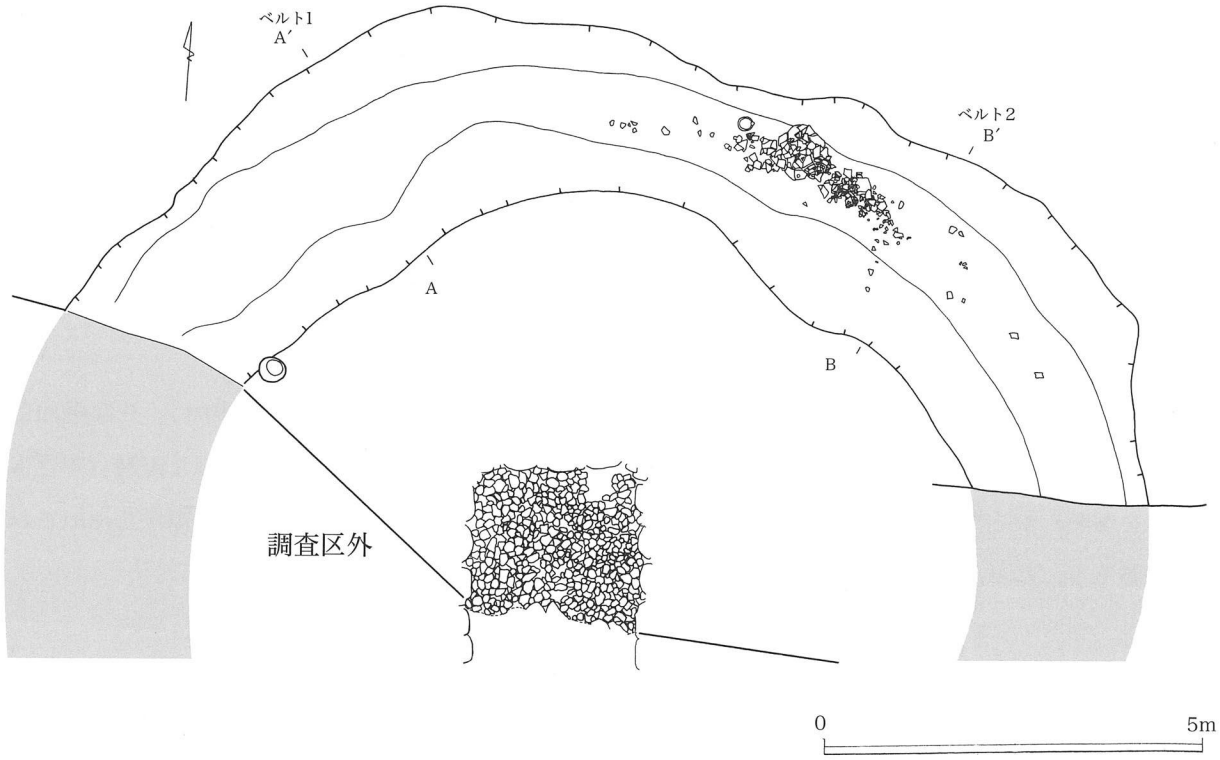
玄　室（第93図・図版５）

石室の調査は、調査区の都合上、玄室の一部のみとなった。玄室内の崩落石材の向きは、立位・横位両者が混在しており、これは盛土などとともに石室内へ一気に崩落した結果であろう。この崩落土中には、遺物はほとんど確認されていない。玄室の残存状況は、奥壁・右側壁が床から3段目まで、左側壁が2段目までである。

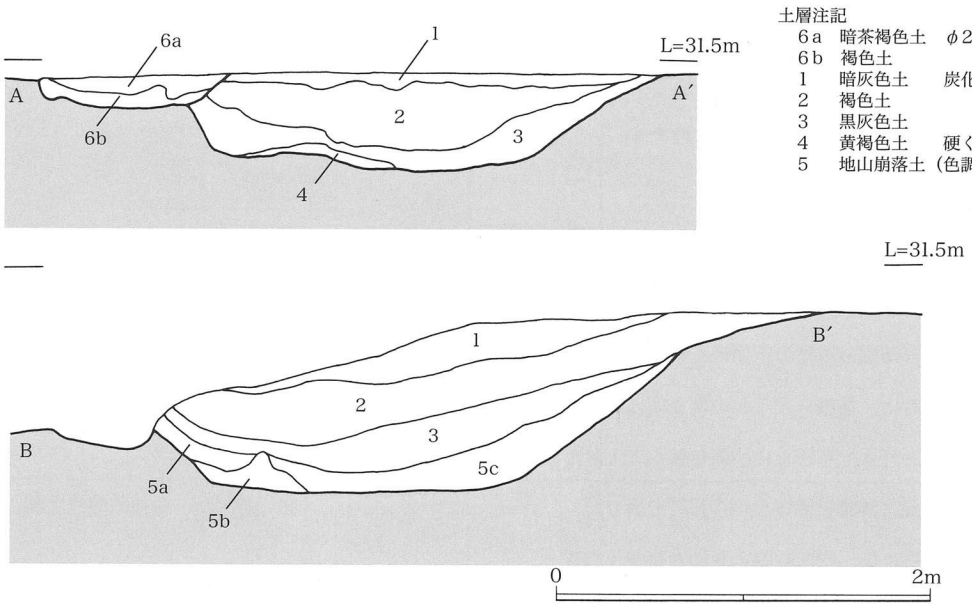
玄室の規模は、床面で奥行き1.9m＋α、幅2.2mである。石材の積み方は野積みを基本とし、石材間の隙間には小振りの礫を詰めて補っている。また、工程によって、玄室内側に石材の正面・側面・小口面をみせており、積み方に変化をもたせる特徴がある（第37表）。4段目より上段は削平のため不明である。玄室床面は10～20cm角の平石がほぼ水平に敷かれる。敷石は一面のみであり、ほぼ隙間なく敷き詰められる。平石の上に小礫などが敷き詰められることはない。

第37表　野首１号墳の石室構築過程

工　程	作業内容	石材の積み方	石　種
Ⅰ工程	基底石５つを配し（奥壁１段目）、奥壁の位置を決定する。 次に、奥壁１段目両端の石材の正面に、石材を配する（両側壁１段目）。 奥壁・両側壁ともに、基底石どうしのすき間に1個ずつ礫を詰める。 床面に平石が敷かれる。平石上に小礫を敷くことはない。	正　面	尾鈴山酸性岩類 砂岩(隙間充填)
Ⅱ工程	１段目の上に小振りの礫を補いながら石材を積む。 奥壁・側壁の接点には、奥壁両端よりに力石を積む。	側　面	尾鈴山酸性岩類
Ⅲ工程	２段目の上に小振りの礫を補いながら石材を積む。 ２段目の石材よりも内側にわずかにせり出すことから、持ち送りを意識したものと推定される。	小口面	尾鈴山酸性岩類
Ⅳ工程～	Ⅳ工程以降、おそらく急に持ち送りながら天井へつながるものと予想される。 すでに削平を受けている。		尾鈴山酸性岩類

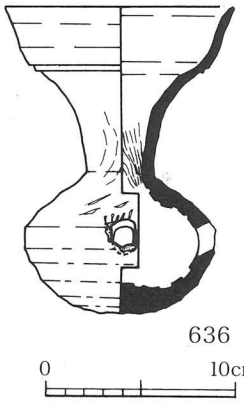


第88図　野首1号墳平面図

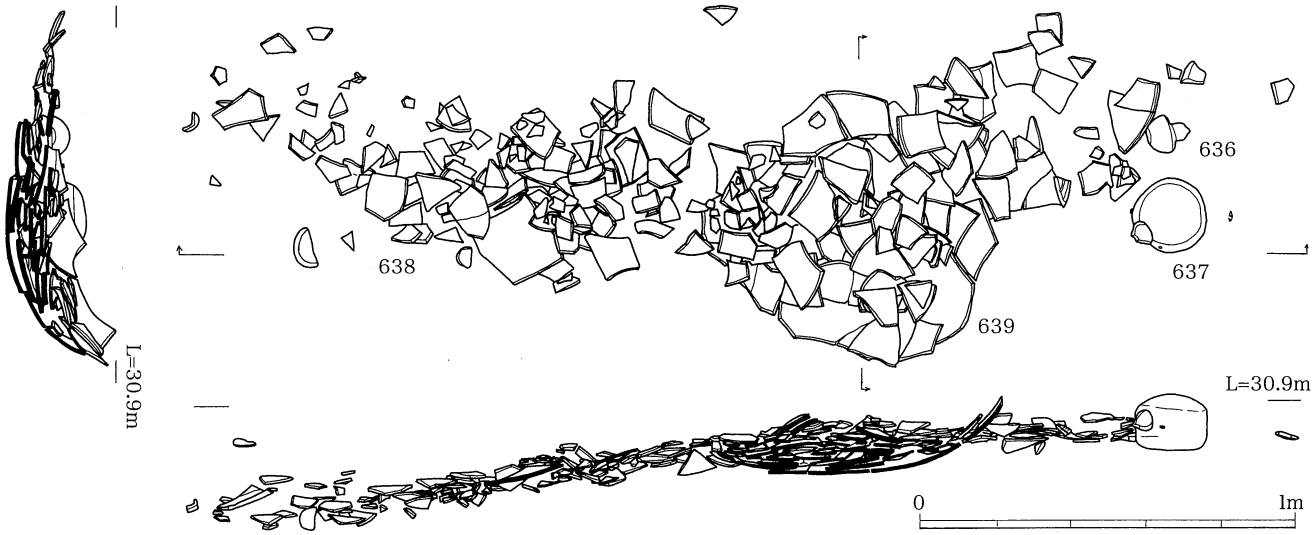


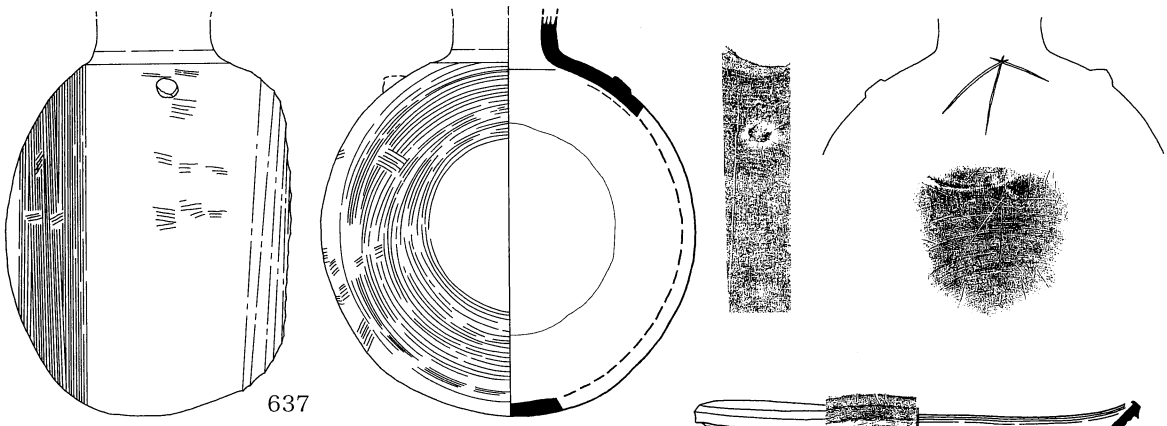
土層注記
6a　暗茶褐色土　φ2㎜以下の小礫含む
6b　褐色土
1　暗灰色土　炭化物含む
2　褐色土
3　黒灰色土
4　黄褐色土　硬くしまる　イワオコシブロック含む
5　地山崩落土（色調の違いによりa～cに細分）

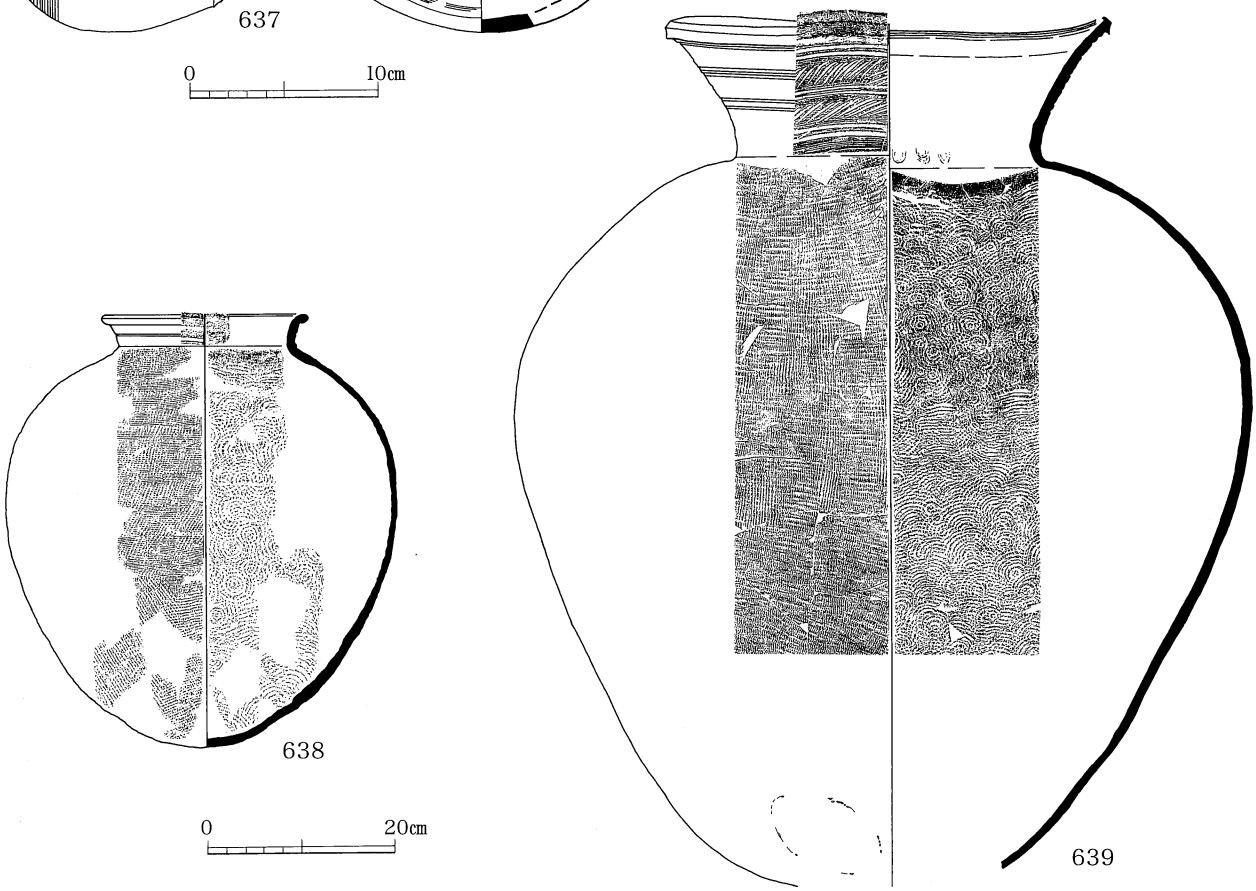
第89図　周溝土層断面図



第90図　周溝内出土遺物
実測図（1）







第91図　周溝内遺物出土状況（上段）
第92図　周溝内出土遺物実測図（2）（下段）

なお、玄室内に崩落した石材の大半は、本来、玄室壁・天井を構成していた石材とみて大過ない。石種は尾鈴山酸性岩類であり、残存する玄室石材と同一である。明確に天井石と思われる大形の平石は確認できていない。

羨　道

玄室奥壁から羨道に向かって6.5mの地点には、玄室幅の約１／２にあたる1.3m幅をもって石材が露出する。それは、羨道の両側壁が露出したものとも推定されるが、石室内での位置関係は明確にしえていない。

出土遺物

周溝内出土遺物（第90・92図・図版28）

大甕（639）・中甕（638）・提瓶（637）・瓿（636）は、周溝床面直上でまとまって出土した。出土位置は、周溝奥側から順に、瓿、提瓶、大甕、中甕と並んでいる。各器種の接合関係では、大甕のみ、周溝脇に占地するSA10埋土中に含まれた胴部片1点の接合があった。中甕・提瓶・瓿の接合関係は、すべて周溝内で収まっている。

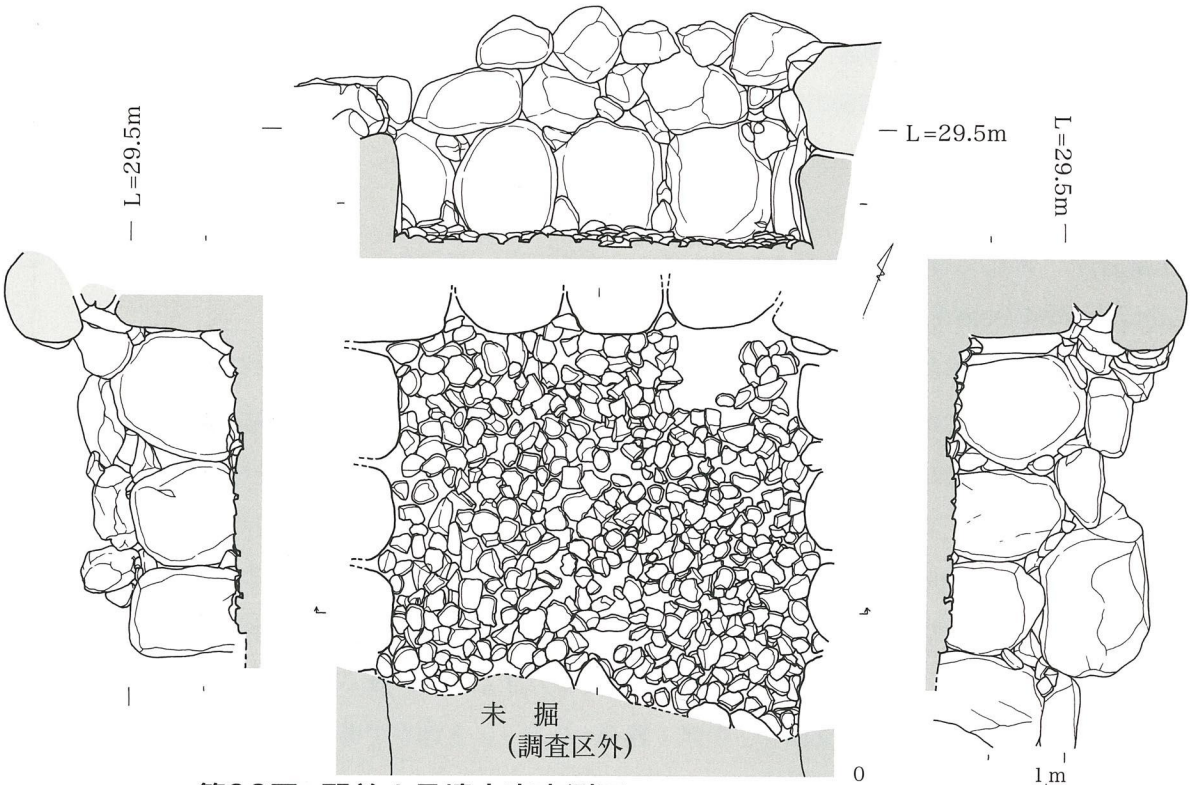
瓿は、口頸部の基部は細く、上方に向かって大きく外反し、口縁部付近で一度段をなした後、さらに上方へ伸びる。体部は最大径が中央部やや上方にある偏球形をする。提瓶は、口縁部を失う。体部はカキ目調整で、把手２ヶ所は欠けている。体部と頸部の境にはヘラ記号がある。大甕は頸部下から胴部上半に最大径を持ち、器高は推定93.3cmと１m近い。整形は、胴部内面で同心円タタキ、外面で縦位に平行タタキがなされる。底部付近には直径12.6cmの円形の変色部と、それを囲むような自然釉の輪っか状の固着が４ヶ所みられ、これは焼成時の支え具の痕跡と推定される。底部は円形に失われ、調査区内では破片すら確認できない。中甕は胴部中央やや上に最大径を持ち、器高46.5cmと大甕の約１／２である。

玄室内　遺物出土状況（第94図・図版５）

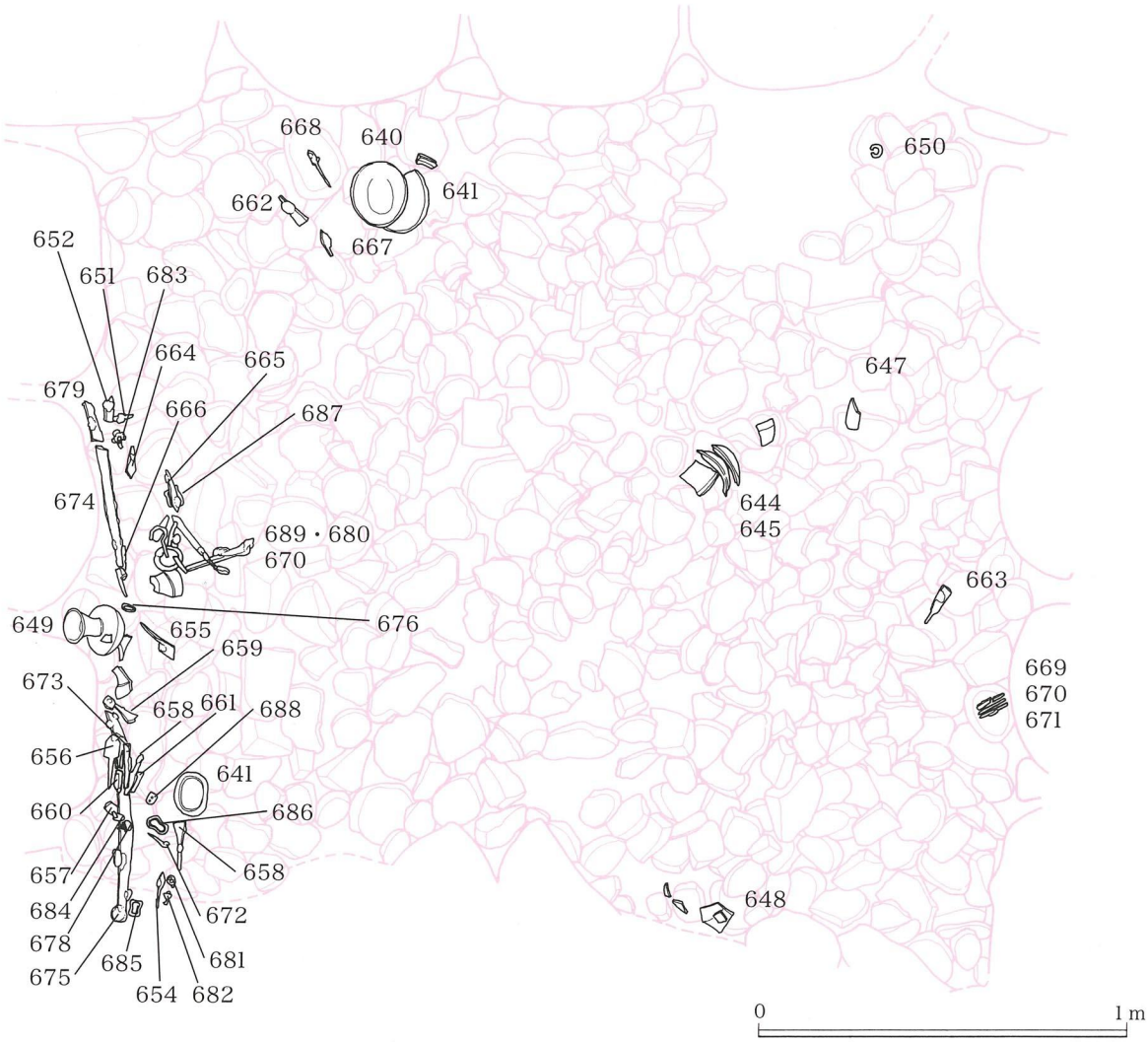
玄室床面上からは、須恵器坏身３、坏蓋２・土師器坏１・短頸壺１・脚付長頸壺１、装身具として耳環１、武器類として鉄鏃22・直刀２・鍔２、馬具類として喰１対・轡関係と思われる鉸具３、鋲７が出土した。須恵器坏身２点（642・646）は、玄室埋土中からの出土である。

出土位置については、直刀や鉄鏃など武器類の大半は玄室左壁に接しており、鉄鏃の一部のみ右側壁側に散在していた。直刀や鉄鏃など長身の武具類はその長軸と玄室長軸がほぼ並行し、また鉄鏃の切先の向きには正逆がみられた。喰1対と轡関係の馬具類は、すべて玄室左壁に寄っていた。轡関係は奥壁側と手前側の２ヶ所に集中箇所がある。耳環は1点のみ、右壁側奥で確認された。

坏類は奥壁左側（640・643）、左壁側（641）、右壁側（644・645・647）の３群に分かれる。このうち、640・643、644・645は重なり合うような格好で出土した。641は単独である。脚付長頸壺は脚部が破砕された状態ではあったものの、直刀2振の間に石室左壁に寄りかかるように立っていた。短頸壺の破片の多くは玄室埋土中から出土しており、その残りの破片が他遺物と離れた右側壁側の手前より出土した。



第93図　野首１号墳玄室実測図



第94図　野首１号墳玄室内遺物出土状況

玄室内出土　須恵器・土師器（第95図・図版26）

玄室内出土の須恵器・土師器の時期は、いわゆる隼上り編年を参照すると隼上りⅠ～Ⅱ期に収まる。口径：器高の比や受け部の立ち上がりから、若干の型式差が存在する。

土師器坏　640の体部は外に開きながら丸く立ち上がり、口唇あたりでやや内傾ぎみとなる。口径14.1cm、器高4.3cmで、口径：器高＝3.3：1となる。

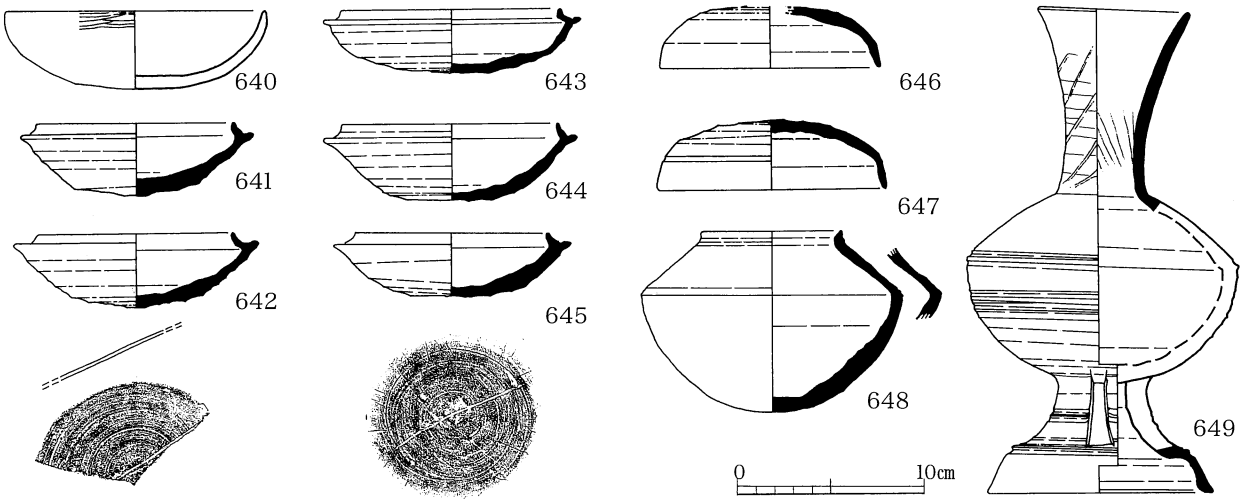
須恵器坏　641～645は身である。641は体部が外に向かって大きく開くように立ち上がり、受け部は内に向かって大きく倒れる。口径：器高は2.9：1となる。器厚も底部を中心に分厚いものが目立つ。外面底部付近の調整は粗雑である。焼き上がりは灰白色であり、他坏と比べ白っぽい色調をする。642・644・645は、体部・受け部の特徴が641と近いものの、相対的に大形である。642・645には底部に「－」のヘラ記号がある。3個体は口径平均10.8cm、器高平均3.8cmで、口径：器高＝2.8：1となる。外面の調整は特に底部付近で粗雑である。焼き上がりは灰色から青灰色である。

643は、体部が丸く立ち上がる。受け部はまず内に大きく倒れ、強く屈曲してまっすぐ上方に立ち上がる。口径11.8cm、器高3.3cmで、口径：器高＝3.6：1と低平である。焼き上がりはやや暗い青灰色である。他資料に比べ、若干古相か。

646・647は蓋である。天井部の調整は粗雑で、体部から口縁に向かって「く」の字状に屈曲し、647の外面には段がつく。口径平均12.1cm、器高平均3.5cmとなる。

短頸壺　648の1点である。玄室内出土ではあるものの、全体の1／3ほどが失われる。短頸壺について、脚付長頸壺（649）の体部と比較すると、加飾がない・丸みがないなど若干相違するものの、ともに肩部：胴部：最大径＝1：2：5とほぼ一致し近い形状となる。

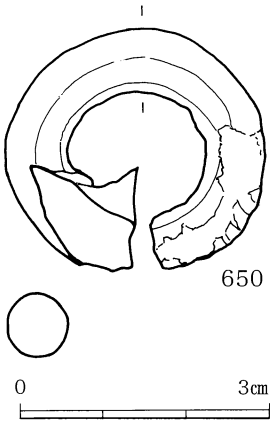
脚付長頸壺　649の1点である。頸部の調整は粗雑で、巻上げ痕や粘土滓の付着がみられる。また整形も厚ぼったい。肩と脚台部分の調整は丁寧で、特に脚台部分はミガキに近いナデとなる。体部は算盤形に近い。脚台部の透かしは3方向1段であり、体部との接着後に体部方向へ切り上げている。



第95図　野首1号墳玄室内出土土器

玄室内出土装身具（第96図・図版27）

耳環１点がある。青銅製で、長さ2.9cm、幅3.1cm、断面厚は0.8cmの断面円形である。表面は金銅張りで、端部の方から捲れ上がっている。



第96図　野首１号墳 玄室内出土装身具

玄室内出土　鉄製武器類（第97・98図・図版27）

鉄鏃22・直刀２・鍔２がある。

鉄　鏃　鉄鏃は三角形鏃（651～658・667・668）が最も多く、そのほか方頭鏃（659～663）・圭頭鏃（664～666）など各種形態のものが混在する。鏃身部から頸部にかけての個体差が大きい。三角形鏃には、鏃身部が細身で柳葉形に近いもの、三角形で関が角張るものがあり、数量では前者７点・後者３点となる。669～672は鏃茎部である。なお、三角形鏃656・鏃茎部のみ672には繊維がらせん状に巻き付けられた痕跡が良好に残る。

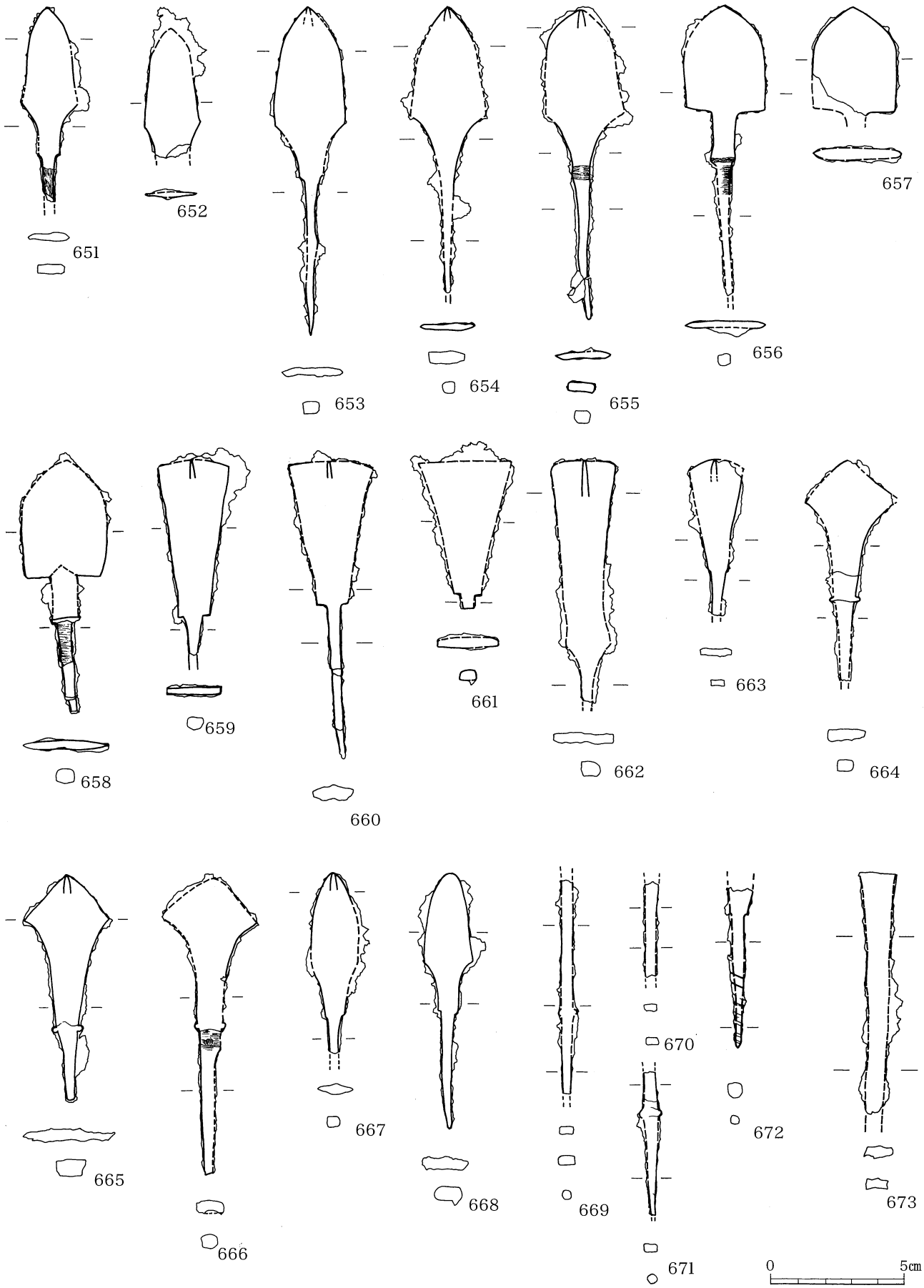
673は断面方形の板状品で、先端に向かってやや幅広くなるものである。鉄鏃の一種か。

第38表　野首１号墳周溝内出土遺物観察表

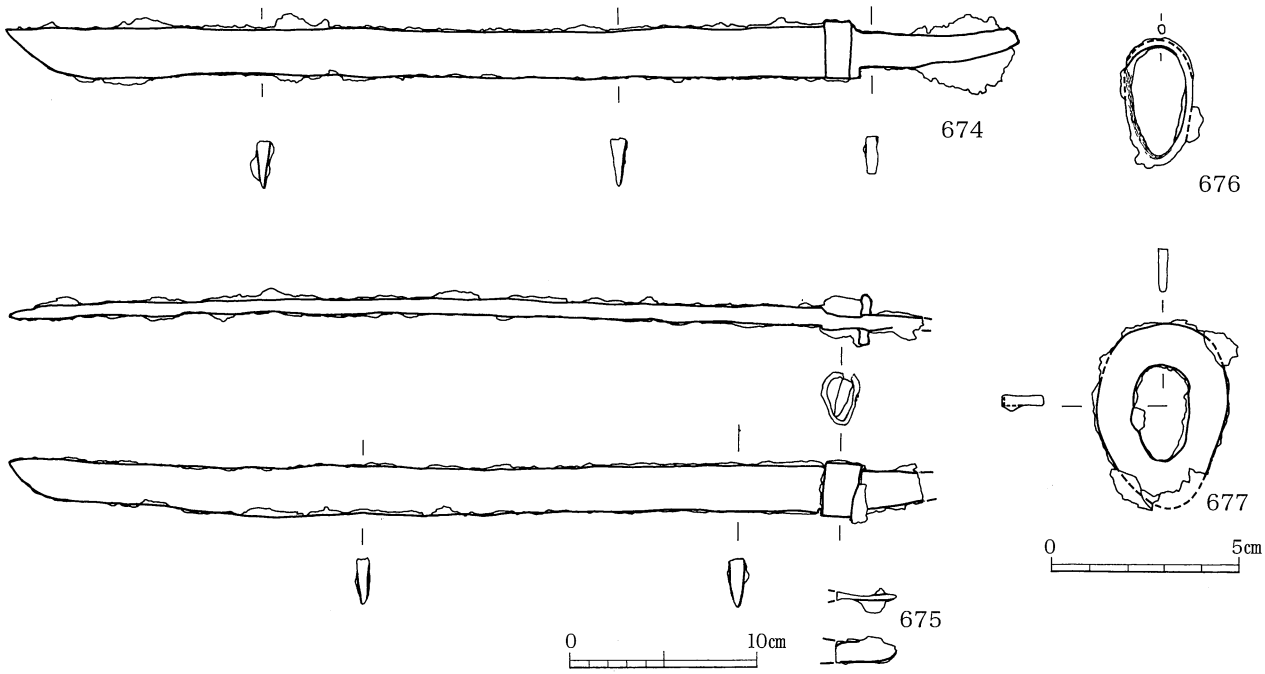
No.	器種	器径	胎土	調整（内面／外面）	焼成	色調	備考
	須恵器 瓿	口径12.2cm　器高16.5cm			堅緻	灰N7/	円孔の周囲に剥落あり（使用痕か）
	須恵器 提瓶	胴径20.0cm	～3mm白色粒含む	回転ヘラケズリ、カキ目又は横ナデ	堅緻	青灰5BG6/1	ヘラ記号「＊」
	須恵器 中甕	口径22.2cm　器高46.5cm	～5mm灰白・黄灰粒含む	同心円タタキ/平行タタキ　胴部上半のみタタキ後カキ目、口縁横ナデ	堅緻	灰7.5YR5/1・4/1～オリーブ7.5YR4/2	
	須恵器 大甕	口径46.3cm　器高推定93.3cm		同心円タタキ/タテ方向に平行タタキ、口縁横ナデ	堅緻		

第39表　野首１号墳玄室内出土遺物観察表

No.	器種	器径	胎土	調整（内面／外面）	焼成	色調（内面／外面）	完成度	備考
640	土師器 杯	口径14.1　器高4.3	0.1mm大白色粒多数	横方向のヘラミガキ	やや軟	にぶい赤褐色(5YR5/4)／明赤褐色(5YR5/6)	完存	摩滅著しい
641	須恵器 杯身	口径10.6　器高3.7　立上り高0.6　受部径12.4	0.1mm大白色・1mm大半透粒多数	上ヨコナデ中工具ヨコナデ底工具ナデ／　底切離し後未調整	良好	灰色(5Y7/1)　オリーブ灰(2.5GY6/1)	完存	
642	須恵器 杯身	口径10.6　器高4.0　立上り高0.6　受部径13.3	～1mm大白色粒多数	底工具ナデその他ヨコナデ／底1/2回転ヘラ削り他ヨコナデ	良好	灰(7.5Y6/1)／灰(7.5Y6/1)	口縁部1/6	ヘラ記号「－」
643	須恵器 杯身	口径11.8　器高3.3　立上り高0.6　受部径13.8	～1mm以下白色粒多数	上工具ヨコナデ底工具ナデ／底1/2回転ヘラ削り他ヨコナデ	良好	青灰(5B6/1)／暗青灰、暗紫灰、青灰	口縁一部欠損	
644	須恵器 杯身	口径11.5　器高4.1　立上り高0.7　受部径13.5	0.1mm大白色粒多量	上ヨコナデ中工具ヨコナデ底工具ナデ／底1/2回転ヘラ削り他ヨコナデ	やや軟	青灰(10BG5/1)／灰(N6/)	完存	
645	須恵器 杯身	口径10.3　器高3.4　立上り高0.55　受部径12.7	0.1～1mm大白色粒多量	上～中工具ヨコナデ底工具ナデ／底1/2回転ヘラ削り他ヨコナデ	良好	青灰(10BG5/1)／青灰(5BG6/1)	完存	ヘラ記号「－」
646	須恵器 杯蓋	口径11.8　器高3.3	0.1～1mm大白色粒多数	中工具ヨコナデ口縁ヨコナデ／天井1/2回転ヘラ削り他工具ヨコナデ	良好	灰(N5/)　灰オリーブ(5Y5/2)	口縁部1/8	
647	須恵器 杯蓋	口径12.4　器高3.7	0.1mm大白色粒多数	天井工具ナデ中～口縁工具ヨコナデ／天井1/2回転ヘラ削り他ヨコナデ	良好	暗青灰(5BG4/1)／青灰(10BG5/1)	口縁部1/2	
648	須恵器 短頸壺	口径7.6　器高14.0　頸部高0.8　体部最大14.0	～1mm大白色粒多数	胴丁寧な工具ヨコナデその他ヨコナデ	良好	青灰(5BG6/1)／青灰～暗青灰	破損1/3	肩部に焼成時のゆがみあり
649	須恵器 脚付長頸壺	口径8.2　器高26.0　頸部径5.0　頸部高10.0　体部最大径14.6　同高10.0　台部接合径4.9　同高6.3　台端部径12.1	～1mm大白色粒多数	頸部外面工具→斜方向ナデ肩部丁寧なナデ胴部2/3回転ヘラ削り台部外面ヨコナデ／内面斜方向ナデ	良好	頸部オリーブ灰(5BY5/1)／青灰(10BG5/1)	完存	



第97図　野首１号墳玄室内出土鉄器（１）



第98図　野首１号墳玄室内出土鉄器（2）

直　刀　・　鍔　直刀（674）は刀身長54.1cm・身幅3.4cm・刃厚0.8cm・茎口幅2.1cm・茎尻幅1.1cm・茎厚0.7～0.8cmである。674には676が錆着しており、676は674の一部であろう。675も674とほぼ同規格である。いずれも鍔が残っている。677は楕円形をしたリングであり、おそらく刀剣の鍔であろう。

第40表　鉄器処理の流れ

鉄器の保存処理について

鉄器の保存処理は、株式会社京都科学に委託しておこなった。以下に示すのは、作業の簡単な流れであり、関連図版を次頁に掲載している。

【現状確認】

器種名の特定。資料表面を拡大観察し、有機質残存の有無などを確認・種類などを特定。

【一次クリーニング】

表面に付着した余分な土砂や錆の除去。

【脱塩処理】

資料をアルカリ水溶液に浸漬し、錆の進行を促進する働きを持つ塩化物イオンを除去。

【樹脂含浸】

脱塩終了後、資料の補強と防錆の目的からアクリル樹脂の減圧含浸を実施。

【二次クリーニング】

資料を補強した後、一次クリーニングで除去し切れなかった余分な錆を除去。

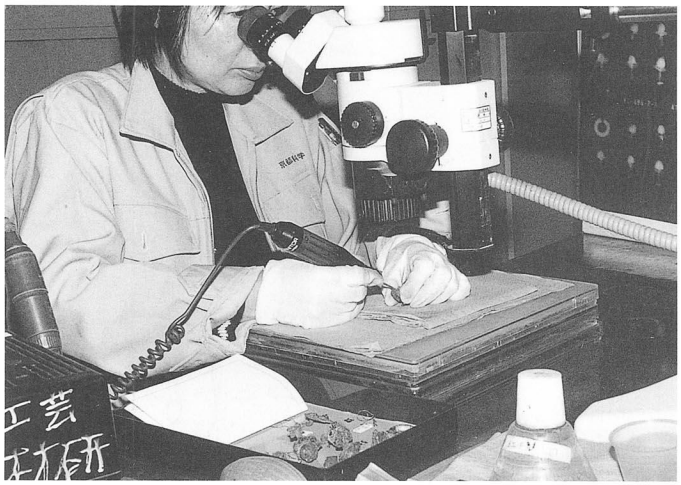
【整形・接合】

破損資料は、破損状況に応じてセルロース系、エポキシ系接着剤を使い分けて接合。

破損の恐れのある箇所は、「セルロース系接着剤＋充填剤」を充填し部分的に補強。

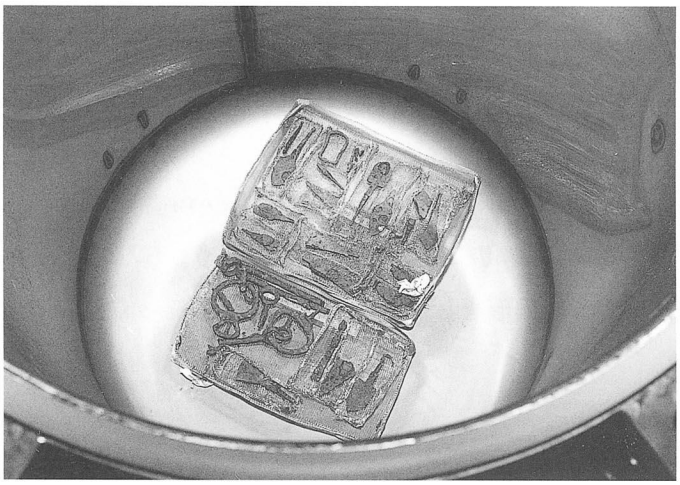
【樹脂塗布】

外気の影響を受けにくくする目的から、表面に樹脂を塗布。

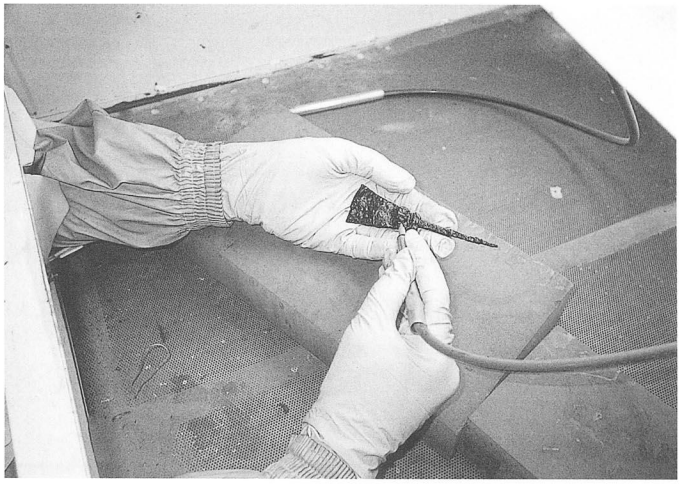


一次クリーニング

脱　塩　処　理

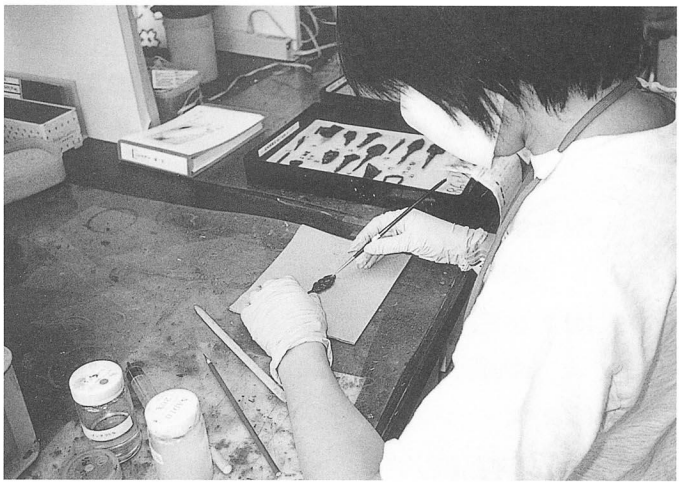


樹　脂　含　浸

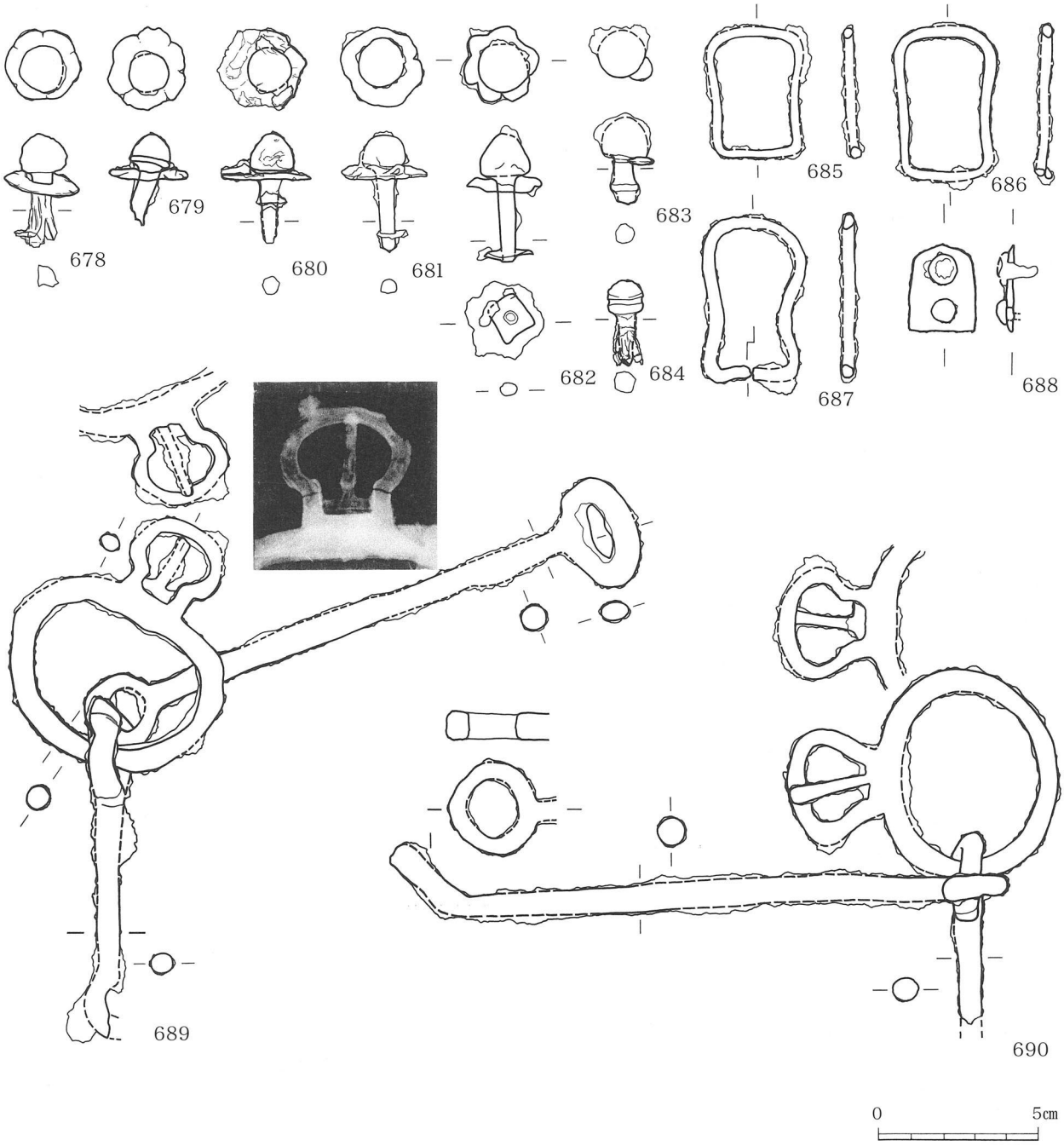


二次クリーニング

整　形　・　接　合



樹　脂　塗　布



第99図　野首１号墳玄室内出土鉄器（3）

玄室内出土　鉄製馬具類（第99図・図版26）

馬具類として轡１対・轡関係と思われる鉸具３、鋲７、板金具１がある。

鋲（678～684）のうち、678・682・683は金銅張りである。おそらく他鋲も金銅張りであり、剥落したのであろう。682は、方形の板金具を留めていたのであろうか。鉸具（686・687）のX線透過画像から、輪下側の中程で分厚くなっているとわかった。厚みの中央には溝があることから、鉄棒の端部を重ねて鍛接されたと考えられる。688は鋲２ヶ所で留められた板金具である。

轡（689・690）は喰と引手で、断面円形である。立聞は、刺金基部に短い鉄棒が刺金に対して直角についており、全体が逆T字形となっている。X線透過画像（第99図中の写真）からは、この鉄棒は立聞の凹みにはめ込まれており、この鉄棒を軸として刺金が可動する構造であるとわかる。刺金の軸となっている鉄棒がはまっている深さも確認できる。また、引手上部の環は、外形が整った円であるが内部の形状は楕円で、特に上部の厚みが薄い。これは使用によって生じた変形（環同志が触れることで起こる摩滅）によるものとも考えられる。

3　土　坑

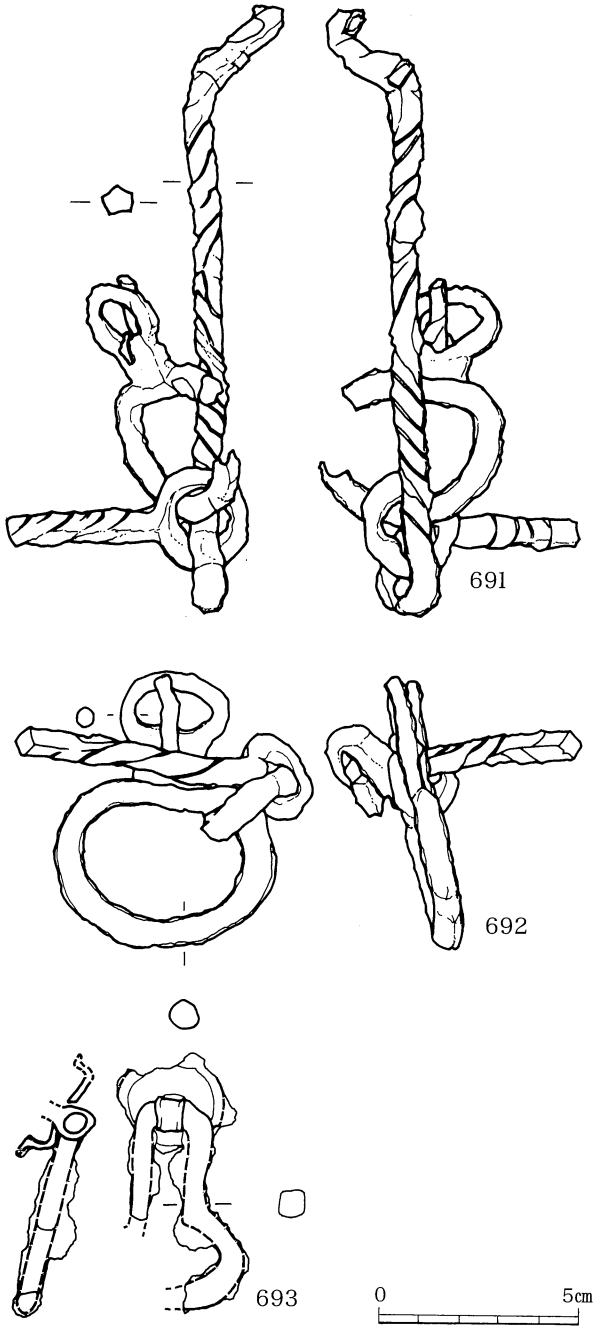
【SC28】

周溝から3.4m北側に位置する土坑である。土坑の大部分は攪乱を受けており、残りは非常に悪い。埋土は暗褐色土を基調とし、褐色ロームのブロックを多量に含むなど、汚い埋土であった。埋土中位と思われるあたりから鉄製馬具類が出土した。

SC28 出土遺物（第100図・図版26）

691・692は轡で、喰と引手にあたる。野首1号墳玄室出土の轡と比較して、小ぶりである。

引手・喰はねじられ、断面は歪な方形となる。素環と立聞の断面は円形である。立聞については、X線透過画像から、その中程に穿たれた穴に刺金の端部を通し、曲げることで刺金が可動する構造になっているとわかった。693は鞍である。



第100図　SC28出土遺物実測図

第41表　野首１号墳玄室内出土鉄製武器・馬具類観察表

長・幅・厚＝cm　重量＝g

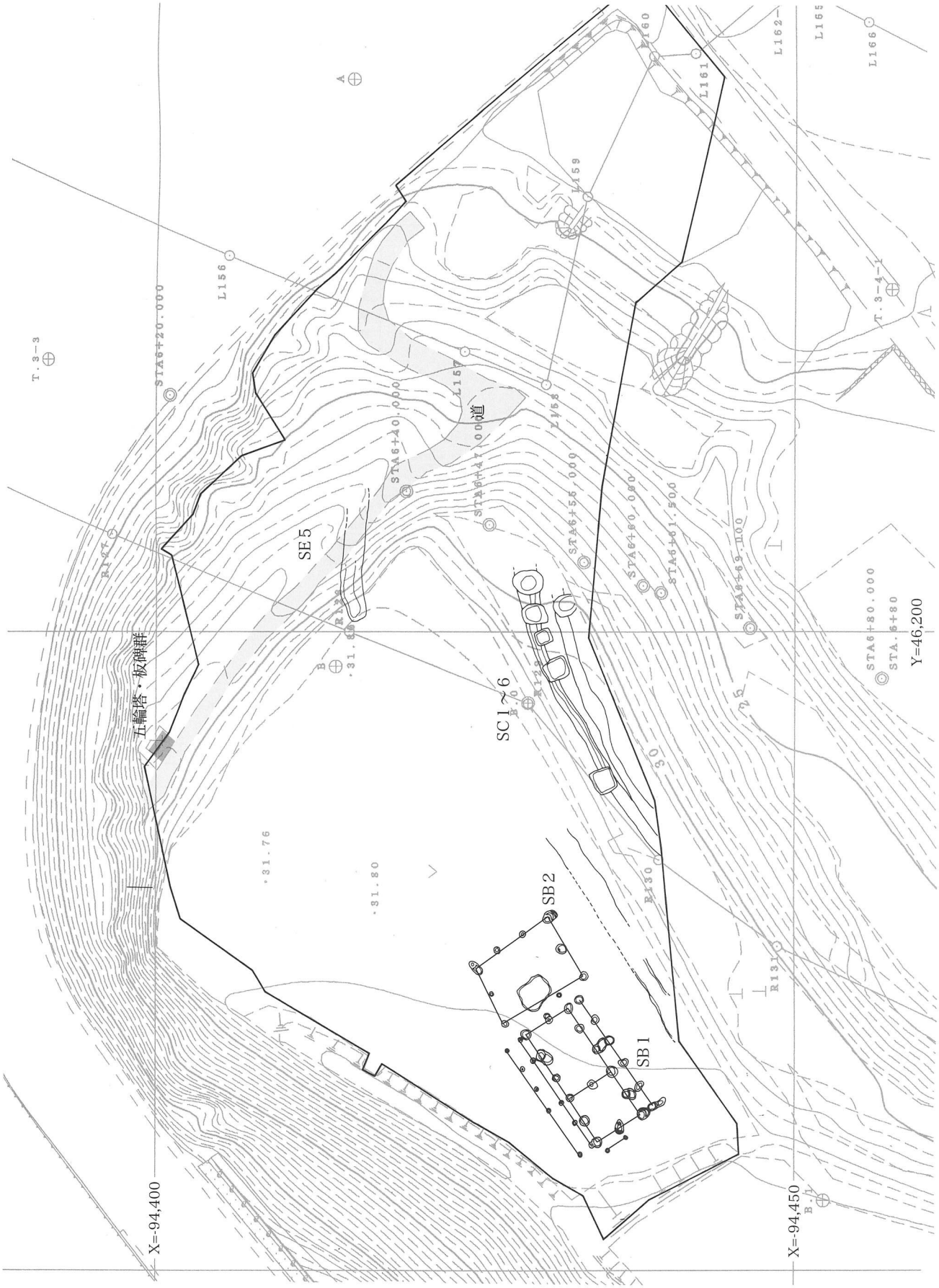
No	種別	器種	残存長	幅	厚	処理前重量	処理後重量	備考
651	鉄鏃	三角形鏃	7.4	1.6	0.4	9.0	12.9	鏃身部長3.6cm
								サビによる腐食著しい
652	〃	三角形鏃	4.8	2.1	0.4	8.9	9.5	鏃身部長3.7cm
653	〃	三角形鏃	12.4	2.7	0.5	12.9	19.8	鏃身部長4.5cm
654	〃	三角形鏃	10.8	2.9	0.5	12.1	19.5	鏃身部長4.2cm
655	〃	三角形鏃	11.8	2.8	0.5	15.6	20.3	鏃身部長4.1cm
656	〃	三角形鏃	11.0	3.1	0.5	13.8	20.7	茎部にらせん状に繊維を巻き付けた痕跡が良好に残存
								鏃身部長4.0cm
657	〃	三角形鏃	4.1	3.2	0.5	8.0	11.9	鏃身部長4.0cm
658	〃	三角形鏃	9.8	3.2	0.5	14.2		鏃身部長4.3cm
659	〃	方頭鏃	7.5	2.6	0.5	12.9	18.0	鏃身部長5.9cm
660	〃	方頭鏃	11.3	3.2	0.5	12.2	17.7	鏃身部長5.5cm
661	〃	方頭鏃	5.6	3.8	0.4	11.6	16.5	鏃身部長5.0cm
662	〃	方頭鏃	9.0	2.5	0.6	21.4	26.0	方頭鏃でなく、馬具等の可能性もある
								鏃身部長7.0cm
663	〃	方頭鏃	5.9	2.1	0.3	6.4		
664	〃	圭頭鏃	8.3	3.2	0.5	11.8	13.5	鏃身部長1.7cm
665	〃	圭頭鏃	8.6	3.4	0.8	12.3	13.8	鏃身部長1.8cm
666	〃	圭頭鏃	11.3	3.5	0.5	12.9	15.8	鏃身部長1.8cm
667	〃	三角形鏃	6.8	1.8	0.4	9.2	9.9	鏃身部長3.4cm
668	〃	三角形鏃	9.6	1.7	0.5	7.8	10.0	鏃身部長3.9cm
669	〃	－	8.1	0.6	0.4	4.0		棘関をはさんで、上半は断面方形、下半は断面円形
670	〃	－	3.6	0.6	0.3	1.5	1.6	断面方形
671	〃	－	5.4	0.9	0.4	2.6	2.8	
672	〃	－	6.0	0.5	0.6	3.5	3.9	断面円形
								茎部にらせん状に繊維を巻き付けた痕跡が良好に残存
673	－	－	9.1	1.1	0.5	12.3	15.0	断面方形
674	刀剣	直刀	54.1	3.4	0.8	290.4		茎口幅2.1cm・茎尻幅1.1cm・茎厚0.7～0.8cm
675	〃	直刀	49.0	3.7	0.9	262.7		茎口幅2.1cm・茎厚0.7cm
676	〃	鍔	3.5	1.8	0.3	2.0		輪の内側に一部木質が残存
677	〃	鍔	5.0	1.3	3.7	10.7		断面方形
678	馬具	鋲	3.6	2.4	－	12.0	14.1	金銅貼り
								木質残存
679	〃	鋲	3.0	1.3	－	6.9		
680	〃	鋲	3.5	2.9	－	12.6		
681	〃	鋲	3.9	2.7	－	11.1	13.7	
682	〃	鋲	4.1	－	－	－		金銅貼り
								方形板あり
683	〃	鋲	3.0	1.5	－	8.6		金銅貼り
684	〃	鋲	2.8	1.2	－	3.5		木質残存
685	〃	鈴具	4.3	3.1	0.5	4.1	5.0	
686	〃	鈴具	5.1	3.3	0.4	5.7	7.8	
687	〃	鈴具	5.3	3.3	0.7	8.1		
688	〃	辻金具	2.8	2.1	0.3	4.0	4.5	鋲部分は緑錆をふく
689	〃	轡	－	－	－	126.5		
690	〃	轡	－	－	－	106.6		

第42表　SC28出土鉄製馬具類観察表

No	種別	器種	最大長	幅	厚	重量	備考
691	馬具	轡	－	－	－	46.9	喰・引手はねじられる
692	〃	轡	－	－	－	41.2	〃
693	〃	鞍	6.6	3.0	0.7	12.7	断面方形

第５節　中世の遺構と遺物

中世の包含層は、大半が表土によって削平されているものの、従来の編年を参照すると大きく２時期に分けられる。そこで、古い方から中世Ⅰ期、中世Ⅱ期として報告する。

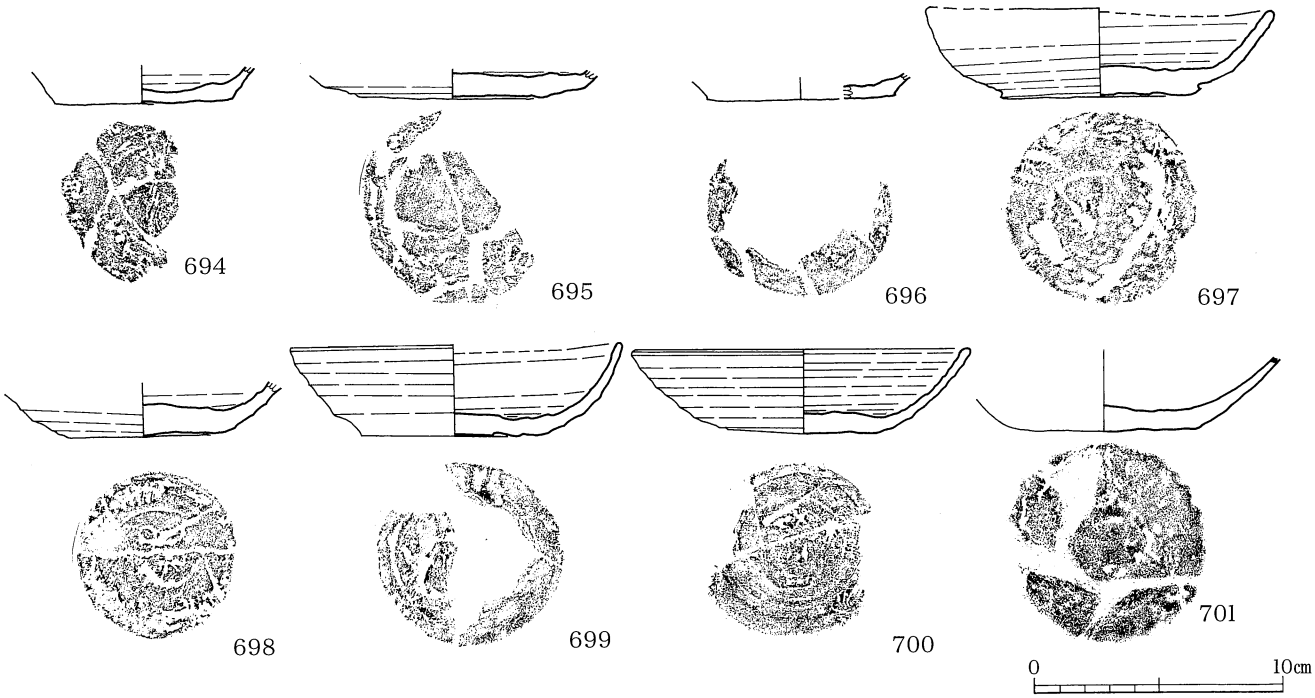


第101図　中世・近世の遺構分布図

1　中世Ⅰ期の遺構と遺物（第102図）

中世Ⅰ期は、遺物のみ確認された。遺構については時期不明のピット群等に含まれている可能性がある。

遺物は土師器坏であり、最大で９個体分が確認された。出土位置は、694・695・699・700はA1区北東のSA５付近の包含層中より比較的近接して出土した。697・699・700については、体部内・外面には段が付くほど明瞭な調整痕が残り、また口径：器高＝3.5～４：１と扁平である。体部は大きく外反し、口縁部に向かってごくゆるく内湾気味となる。体部と底部の関係をみると、境が明瞭な一群（694・696・701）、丸く立ち上がる一群（695・697～700）に大別される。底径は８個体で6.1～８cm、平均7.3cmである。底部切り離しは、すべてやや雑なヘラ切り技法であり、697のように張り出し気味のものもある。



第102図　中世Ⅰ期遺物実測図

第43表　中世Ⅰ期遺物観察表

No	出土位置	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	残存状況	胎土	底	焼成	色調 内面	外面
694	SA5付近	坏	－	－	7.1	底部のみ	5mm以下の赤褐色粒・1mm以下の灰色粒を少量含む	ヘラ	良好	橙（5YR7/6）	橙（5YR7/6）
695	SA5付近	坏	－	－	7.8	底部のみ	3mm以下の赤褐色粒・1mm以下の灰色粒を少量含む	〃	〃	にぶい褐（7.5YR6/3）	にぶい橙（7.5YR7/4）
696	SA5付近	坏	－	－	7.6	底部のみ	3mm以下の明赤褐・黒色粒、微細な透明の光沢粒を含む	〃	〃	橙（5YR7/6）	にぶい橙（5YR7/4）
697	SA5付近	坏	14.0	3.8	8.0	完形	4mm以下の褐色粒・1mm以下の黒褐色粒を含む	〃	〃	にぶい黄褐（10YR7/4）	にぶい黄褐（10YR7/4）
698	SA5付近	坏	－	－	6.3	口縁欠	2mm以下の赤灰・赤黒色粒、1mm以下のにぶい赤色粒を含む	〃	〃	浅黄橙（7.5YR8/4）	にぶい橙（5YR7/4）
699	SA5付近	坏	13.2	3.8	7.5	完形	1mm以下の赤褐色粒を少量含む	〃	〃	灰白（10YR8/2）	浅黄橙（7.5YR8/3）
700	SA5付近	坏	13.7	3.5	6.1	完形	1mm以下の灰・赤褐色粒を少量含む	〃	〃	浅黄橙（7.5YR8/3）	浅黄橙（7.5YR8/3）
701	A2区	坏	－	－	7.7	完形	3mm以下の赤褐色粒・1mm以下の灰色粒を少量含む	〃	〃	橙（5YR7/6）	橙（5YR7/6）
	レキ4	坏	－	－	－	底部のみ	5mm以下の赤褐色粒・1mm以下の灰色粒を少量含む	〃	〃	にぶい黄褐（10YR7/4）	にぶい黄褐（10YR7/4）

2　中世Ⅱ期の遺構と遺物

中世Ⅱ期は、掘立柱建物２棟、土坑１基、五輪塔・板碑群１と土坑中より中国産染付皿等が確認された。切り合い関係から、土坑はSB２より新しい。また、SB１の柱材については放射性炭素年代測定を実施した。SB１・SB２の前後関係は不明である。

掘立柱建物　丘陵中央部にあたる、A2区西側で２棟検出された。建物間距離は1.2mと非常に近い。切り合いはなく、また時期を示すような遺物は出土していない。SB1の柱穴①埋土中から柱材が検出され、それは放射性炭素年代測定に用いた。

第44表　掘立柱建物一覧

	主　軸	面　積（㎡）	規　　格	備　　考
SB1	N－50°－E	40(身舎)・58(庇)	桁行5間・梁行2間	二面庇付き 北西側に5間、南西側に1間の小柱穴
SB2	N－28°－W	44.3	桁行3間・梁行2間	SC32より古い

(註) 掘立柱建物に関しては、柱穴＝柱掘り方、柱（柱痕跡）＝柱そのもの（その痕跡）を指す。以下の記述も同じ。

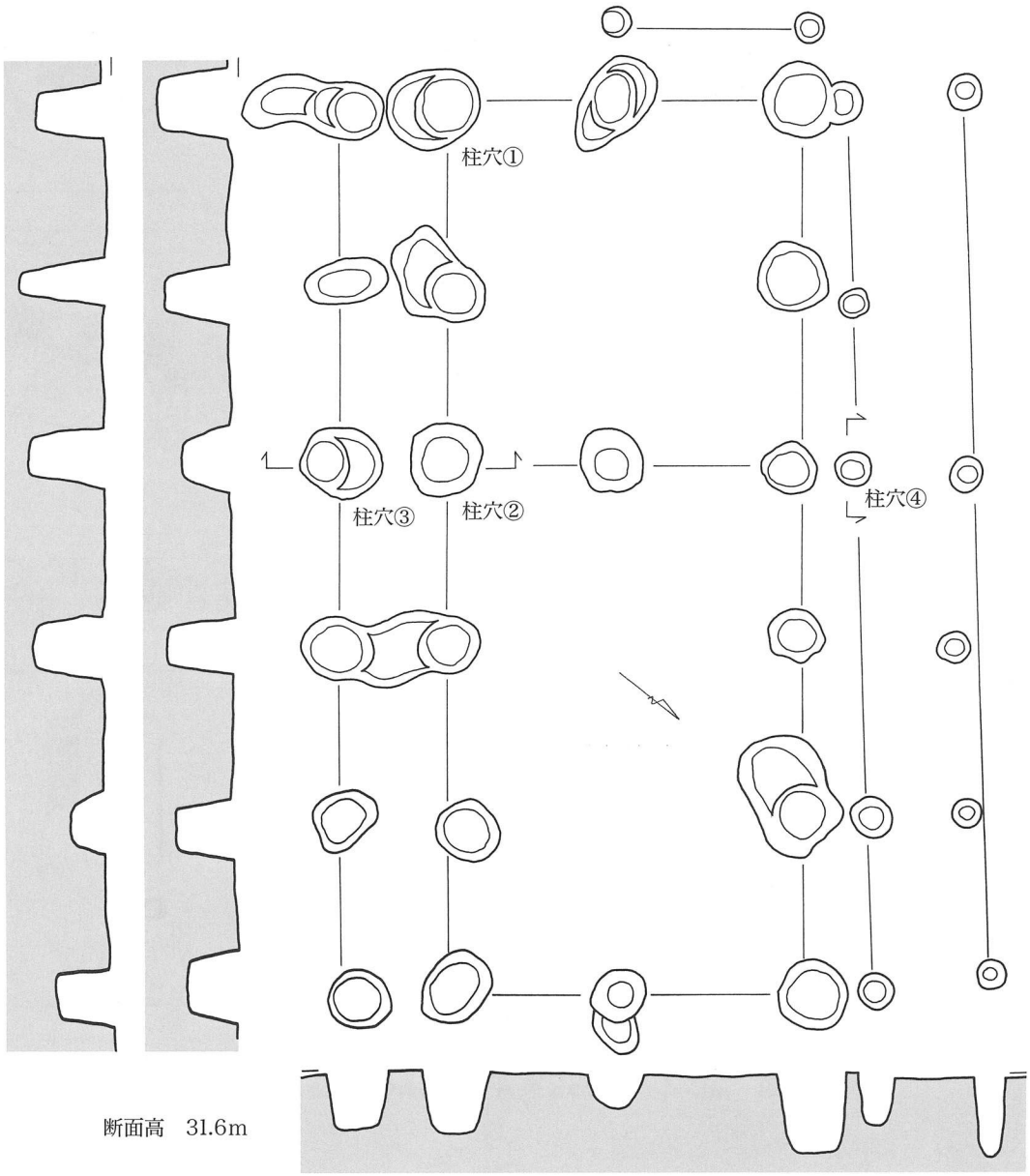
【　SB１　】(第135図・図版７)　桁行５間×梁行２間の掘立柱建物で、左右の桁に並行して庇が廻る。柱穴は身舎・庇ともに円形で、身舎の柱穴平均径0.82m、南東側庇の柱穴平均径0.73m、北西側庇の柱穴平均径0.38mとなる。身舎の南西２間目の棟通りに柱穴があり、身舎はここで間仕切られた可能性がある。

柱痕跡は、平面では捉えにくく、断面で明確である。柱痕跡は身舎の柱穴②、庇の柱穴③④でのみ断面を図化した。柱穴断面からは、柱の周囲を突き固めた状況が明白であり、また、柱穴の底面はX層イワオコシやXI層（明黄褐色土層）など、より硬質の面をあてることが多かった。柱の下や周囲は、VII・VIII層（AT下位の硬質の層)、X層（イワオコシ)、XI層（明黄褐色土層）の混じった暗褐色土で突き固められている。暗褐色土には硬い部分とそうでない部分とがある。また、いくつかの柱穴には、柱の抜取り痕が見られた。

柱穴②は身舎にあたり、径0.77mである。柱痕跡が見られ、柱径0.25mを測る。柱穴の底面は、ねじりが断たないほどに突き固められ、柱はその硬質の部分にのる。柱周辺の埋土は、その下部がやや硬い程度で、柱穴検出面付近で再び硬さを増す。

柱穴③は南東側庇にあたり、径0.84mである。縄文時代の土坑を切る。柱穴埋土の底部は硬く突き固められ、その上は軟らかく、しまりがない。柱痕跡は明確でないが、柱穴埋土中～下部に、炭化物の密で、非常にしまりのない土質が見られた。柱の立ち腐れか。

柱穴④は北西側庇にあたり、径0.31mである。柱痕跡が見られ、柱径0.12mを測る。埋土状況は柱穴②に近く、最下部は非常に硬く突き固められる。



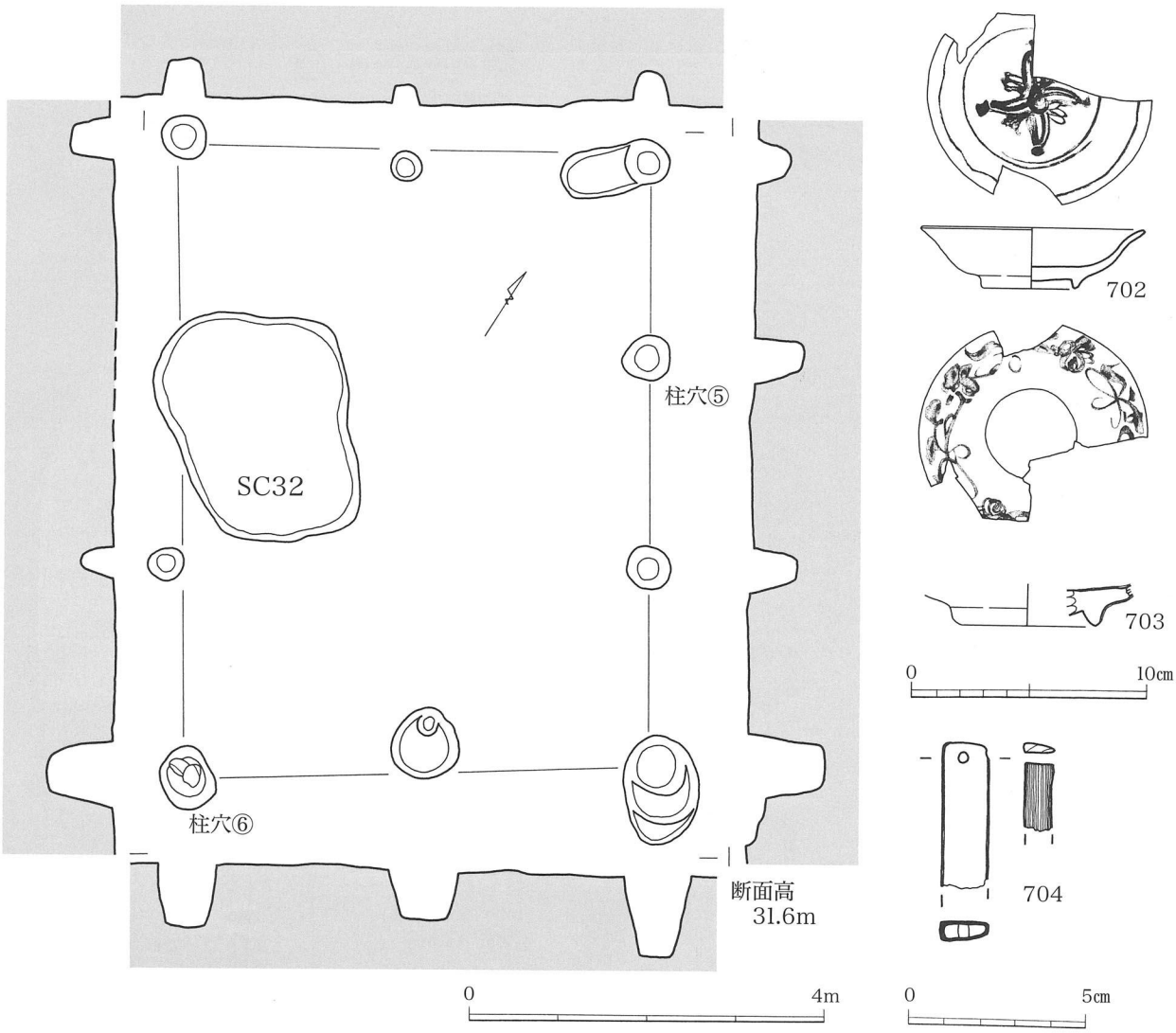
SB１柱穴土層断面注記　　※土色は、暗褐色土をベースとし、各種の土が混入する

１層：やわらかい。炭化物を少量含む（２層に比べ量は少ない）。
　　Ⅶ・Ⅷ層（姶良Tn下位の暗色帯）のブロックを含む、Ⅹ層（イワオコシ）の粒を含む。
２層：やわらかい。炭化物を多く含む。Ⅹ層（イワオコシ）の粒を含む。
３層：やわらかい。Ⅶ・Ⅷ層（姶良Tn下位の暗色帯）のブロックを含む。
４層：やわらかい。Ⅶ・Ⅷ層（姶良Tn下位の暗色帯）のブロックを少量含む。
　　３層に比べ、Ⅹ層（イワオコシ）粒・Ⅸ層（暗色帯下の褐色土）が目立つ。
５層：含有物等は４層に同じであるが、非常に硬くしまっている。

６層：Ⅶ・Ⅷ層（姶良Tn下位の暗色帯）の大きなブロックを含む。
７層：７a～７c層はもとは同一層。７a・７b層は６層に比べ明るい色調である。
　　Ⅶ・Ⅷ層（姶良Tn下位の暗色帯）のブロックを含む。
　　Ⅹ層（イワオコシ）粒・Ⅸ層（暗色帯下の褐色土）も含む。
　　７c層はしまりがなく、指で触れただけでボロボロと崩れる。
　　７a層に比べ色調は暗く、また炭化物が非常に目立つ。

10層：やわらかい炭化物を多く含む。
　　Ⅹ層（イワオコシ）の粒を含む。
11層：Ⅶ・Ⅷ層（姶良Tn下位の暗色帯）
　　のブロックを含む。
12層：Ⅹ層（イワオコシ）ブロックを多く含む。
13層：Ⅵ（姶良Tn）ブロックを多く含む。
14層：やわらかい。Ⅶ・Ⅷ層（姶良Tn下位の暗色帯）のブロックを含む。
15層：含有物等は14層に同じであるが、非常に硬くしまっている。

第103図　SB１実測図



第104図　SB2・SC32実測図およびSC32出土遺物

【　SB2　】(第104図・図版７)　柱穴⑤は礫が集中しており、一見すると縄文早期の集石様である。当初、集石として調査していたが、調査中に遺構配置・埋土状況から柱穴と認識できた。柱穴⑤は、検出面付近で礫の集中があり、礫下に暗褐色土をはさんで埋土中位に再び礫の堆積がある。礫は縄文早期の集石構成礫と同一である（図版７－３段目左)。柱穴⑥は、平らな楕円礫が2枚、柱穴底部に向かって斜めに落ち込んでいた（図版７－３段目右)。

【　SC32　】(第104図)　SB2の柱穴を切る土坑である。2.8m×2.1mの平面楕円形、残深0.3m。埋土はしまりない黒色土で、埋土中より染付皿・青磁碗・青銅製品が出土した。

SC32出土遺物　702は高台を持つ端反り皿であり、口径9.4cm・器高2.6cm・底径3.9cmである。高台はヘラ削り、斜めに面取り・砂敷きで焼成。外面胴部には牡丹唐草文、見込に十字花文。小野分類の皿B群Ⅵ。703は龍泉窯の青磁碗。復元底径5.8cm。704は青銅製で、4.1cm＋α×1.3cm×0.6cm・重量7.8gで、端部には径３mmの孔が貫通する。断口方形の筒状で、中には木質が残っている。

SB1柱穴①検出の炭化材に関する自然科学的分析の内容

Ⅰ．樹種同定

方法　炭化材を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75.750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行なった。

結果　炭化材は、クロマツ Pinus thunbergii Parl.　マツ科　と同定された。クロマツは仮道管と放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。本州、四国、九州に分布する常緑の高木で、高さ35m、径2mに達する。材は耐朽性、保存性が中庸で、水湿によく耐え、広く用いられる。また、材は樹脂を多く含み、燃料にも適する。同定の根拠となった特徴は以下のとおりである。

横断面　：早材から晩材へのやや移行は急で、垂直樹脂道が見られる。
放射断面　：放射柔細胞の分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内壁には比較的緩やかな鋸歯状の肥厚が存在する。
接線断面　：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

文献　佐伯浩・原田浩（1985）　針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）　広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296.

Ⅱ．放射性炭素年代測定

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
№1	試料1（大）	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
№2	試料1（小）	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法

2．測定結果

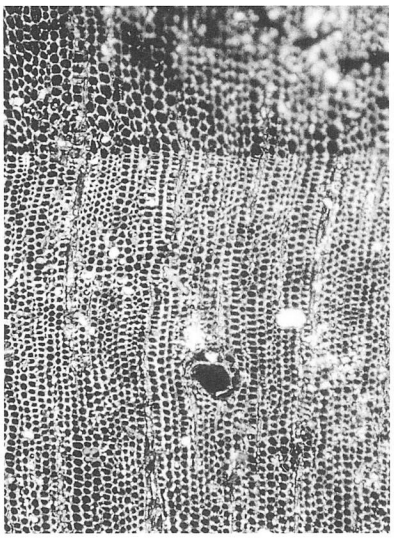
試料名	δ13C（‰）	補正14C年代（年BP）	暦年代（西暦）	測定№（NUTA2-）
№1	−26.5	335±30	交点：cal AD 1520, 1590, 1625	2386
			1σ：cal AD 1485～1535	
			cal AD 1540～1635	
			2σ：cal AD 1465～1645	
№2	−27.5	345±30	交点：cal AD 1520, 1595, 1620	2383
			1σ：cal AD 1480～1530	
			cal AD 1545～1635	
			2σ：cal AD 1450～1645	

※NUTA2は、名古屋大学年代測定資料研究センターの測定番号（2号機）

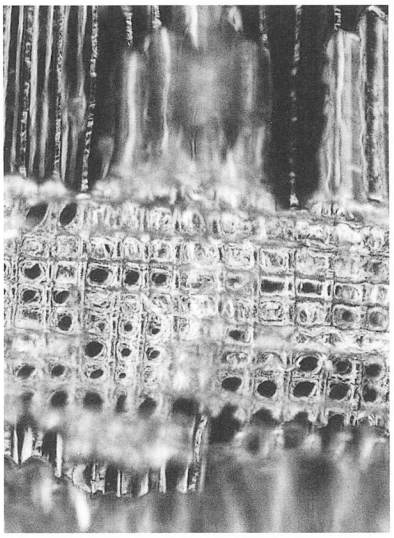
1）δ^{13}C測定値　試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

2）補正^{14}C年代値　δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。^{14}Cの半減期は国際慣例に従って5568年を用いた。

3）暦年代　過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動を較正することにより算出した年代。較正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース（"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)）により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。暦年代の交点とは、補正14C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68%確率）および2σ（95%確率）は、補正14C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。



横断面━━━━━━：0.4㎜



放射断面━━━━━━：0.1㎜

接線断面━━━━━━：0.2㎜

炭化材1　クロマツ